

# 緑谷出久が悪堕ちした話

知ったか豆腐

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『無個性』の少年、緑谷出久がNo.1ヒーロー「オールマイト」と出会った運命の日。

ちよつとした運命の悪戯で、緑谷出久はワン・フォー・オールを継承できず、オール・フォー・ワンに目をつけられてしまった。

そんなお話。

## 目次

プロローグ	1
雄英高校U S J襲撃事件編	
緑谷出久は敵堕ちしました	4
雄英高校U S J襲撃事件 アフター	18
とある研究員の手記	27
雄英体育祭襲撃事件編	
緑谷出久は体育祭に参加しました	31
雄英高校体育祭襲撃事件 アフター	49
とある研究員の手記2	55
保須市三勢力乱戦編	
緑谷出久は保須市にきました プロローグ	57
緑谷出久は保須市にきました 前編	61
緑谷出久は保須市にきました 後編	71
緑谷出久は保須市にきました アフター	81
緑谷出久は保須市にきました アフター ダークサイド	87
番外編	
エイプリルフル企画 I F B A D E N D	90
運命のショッピングモール くルート分岐1	94
緑谷出久はショッピングモールにお出かけしました プロローグ	
緑谷出久はショッピングモールにお出かけしました	100
緑谷出久はショッピングモールにお出かけしました アフター	

雄英合宿攻防編

緑谷出久は合宿に来ました プロローグ

緑谷出久は合宿に来ました 前編

緑谷出久は合宿に来ました 後編

英雄失墜編（バッドエンド最終章）

緑谷出久は○○○○になりました

緑谷出久は○○○○になりました 前編

緑谷出久は○○○○になりました 後編

エピソード

あとがき＋アフター

バッドエンドアフター ダイジェスト

課題提出の甘味処 ～ルート分岐2～

緑谷出久は課題を出されました（プロローグ）

緑谷出久課題を出されました

緑谷出久は課題を出されました（アフター）

弾劾非難の仮免試験

緑谷出久は試験会場に来ました プロローグ

緑谷出久は試験会場に来ました

緑谷出久は試験会場に来ました エピソード

英雄願望と決戦場

緑谷出久は呪いをかけました プロローグ

緑谷出久は呪いをかけました その1

緑谷出久は呪いをかけました その2

緑谷出久は呪いをかけました その3

緑谷出久は呪いをかけました  
その4

## プロローグ プロローグ

緑谷出久は「無個性」である。

世界総人口の約八割が何らかの「特異体質」である超人社会となった今では珍しい、何の特殊能力も持たない人間。それが「無個性」だ。

「個性」と呼ばれる特異体質を使い、犯罪を犯す敵を「個性」を使って捕まえる『ヒーロー』は、現代では多くの子供たちの憧れの職業だ。

当然、今年で中学3年生になる緑谷出久も、進学先にヒーロー科を考えるほどにヒーローに憧れていた。さつきまでは。

『何が出来たわけでも変わつたわけでもない。でも……よかったよ。これでちゃんと身の丈に合った将来を考えていける』

今日この日、緑谷出久はヒーローになるための道を諦めたのだ。

憧れのNo.1ヒーローからは、「個性」ちからがなくとも成り立つとは言えない」と、現実を突き付けられた。

ヴィランに襲われていた友人を見て思わず飛び出してみたものの、その行動はヒーローたちから叱られ、救けようとした友人からは「救けられていない」と否定された。

今日一日で自分の目指す道を多くの人から否定されたのだ。長年の夢を諦めるのも当然と言える。

「無個性」だと診断された4歳のころから、ずっと胸のなかでくすぶっていた気持ちに、ようやく踏ん切りがつく。そんな不思議と落ち着いた気持ちになっていた。

「失礼、緑谷出久ですね？」

とぼとぼと家路に向かう途中で、突然声を掛けられた。

襟の高いバーテンダーのようなスーツを黒い霧が着込んだ、そんな姿の男が立っていた。

「だ、誰?!? ですか?」

出久が驚いて質問するが、男は答えずに言葉を告げる。

「おめでとうございます。このたび、あなたは『先生』から選ばれたのです」

「選ばれた？ 先生」って、何を言ってるんですか？」

困惑する出久をよそに、男は『個性』を使い、腕を霧状に伸ばして出久を包み込む。

「うわ、なんつだ、これ!!」

「さあ、おとなしく一緒に来ていただきますよう」

ジタバタと暴れる出久の些細な抵抗は何の意味もなく、霧に包まれた出久の姿はその場から消え去っていた。

スーツの男も姿を消す。

残されたのは、「将来のためのヒーロー分析ノート」と題された一冊の大学ノートだけ。

「ハア、ハア……マスコミを撒くのに、思ったより時間がかかって緑谷少年を見失ってしまった。どこに行ったんだ〜緑谷少年〜！ おや？」

出久が消え去ってから、荒い息で駆けつけたオールマイト。

落ちていたノートを拾い上げ、『これは緑谷少年のノートでは』と首を傾げた。

この日、オールマイトは出久を見つけることができなかった。

このことを、彼はのちに後悔することとなる。

「ようこそ、緑谷出久くん。僕のこととはそうだねえ……『先生』とでも呼んでくれたまえ」

連れ去られた出久は、気がつけば薄暗い部屋の中にいた。

モニターが並び、心電図の電子音が響く。そして、点滴のチューブが刺され、車いすに座っている人物が話しかけてきた。

「ひいっー」

目の前の人物の顔半分を失った容貌に、出久は思わず息をのんだ。いや、その姿以上に目の前の人物からは言いようのない恐怖がわき

あがってきた。ただ見られているだけで、身体が金縛りにあつたように動けなくなってしまうほどに。

「緑谷出久くん、君をこうして呼んだのはプレゼントを上げようと思つたからなんだ。」

「……………なあ、緑谷出久くん。君、〝個性〟が欲しくないか？」

「先生」は不気味な笑みを浮かべ、そう告げた。

これはほんのわずかな差で、ヒーローが間に合わず、悪が先にたどり着いてしまった、少年の運命の物語。



## 雄英高校USJ襲撃事件編 緑谷出久は敵堕ちしました

「『無個性』というだけで、いままでしなくてもいい苦勞をしてきたんだろう?」

「『個性』がないってだけで馬鹿にされてきた。

『『無個性』のくせに』』どうせ『無個性』だから』そんな言葉で皆が君を自然と見下してきたんだね」

「『個性』がないってだけで努力を笑われた。

どんな頑張っても、どんな結果を出しても、『無個性』ってだけで否定された。

「『個性』がない、それだけで今の社会は生きていきにくい……『無個性』なのは君が悪いわけでもないのに」

「『個性』さえあれば……」

「そう、何度思ったことだろう。」

「もう大丈夫。僕が君に『個性』を上げようじゃないか」

「僕は『個性』が欲しかった……」

|||||

——雄英高校 ウソの災害事故ルーム 通称『USJ』

ヴィラン連合を名乗る集団に、ヒーロー育成校の名門・雄英高校が襲撃されるという前代未聞の事件。

警報は無効化され、通信も妨害されて孤立無援の状態で、さらに敵の個性でエリアの各地に生徒が散らされる。

そんな不利な状況を跳ね返し、オールマイトが駆け付けるまで耐え抜いた雄英の生徒と教師。

だが……その代償は大きかった。

その場にいた教師<sup>プロヒーロー</sup>2人、スペースヒーロー「13号」は、自らの力を利用され背に大怪我を負った。

抹消ヒーロー「イレイザーヘッド」は、右腕の裂傷に加えて全身打撲・骨折の重傷。

両者ともに意識もなく、戦闘不能である。

その惨状を作り出したのは3人。

ヴァイン連合の首魁・死柄木 弔。

死柄木のお目付け役にして側近。『ワープゲート』の黒霧。

そして、対『平和の象徴』改人・骸無<sup>がいむ</sup>。

目を隠す黒いバイザーと口元に金属製のパーツがついた後頭部を覆うヘルメット。額からは2本の飾り角が取り付けられている。

体は肘・膝・肩の要所を保護するプロテクターがついた強化繊維のジャンプスーツに手足を守るグローブ・ブーツ・レガース。

黒を基調とした不気味な戦闘服<sup>コスチューム</sup>。

こいつこそが相澤に重傷を負わせた張本人だ。

「オールマイト、気をつけて。あいつ、相澤先生の個性を受けてもすごい力だったわ」

「先生に個性を消されてたのに、軽々と先生を振り回してブン投げてたんだ。あいつ、素の身体能力も化け物だぜ、オールマイトオー！」

先ほど、死柄木に殺されかけた蛙吹梅雨と峰田実がオールマイトへ自らが知りえた骸無の情報を話す。

生徒たちの健気な献身にオールマイトは笑みを見せ、

「ありがとう。どうやらあのマスクマンがあいつらの切り札のようだね」

2人にお礼を言ってヴァイン連合の主力3人に向き直った。

「作戦会議は終わったかな、オールマイト。あんまり待たせるなよ、俺はおまえを早く殺したくて仕方ないんだ」

「わざわざ待っていてくれるとは、案外律儀じゃあないか。

さあて、覚悟はいいか？ ヴァインども」

死柄木の言葉に答え、拳をかまえるオールマイト。

鋭い眼光と共に向けられた戦意から死柄木をかばうように骸無が

前に出た。

瞬間。

局地的な嵐が巻き起こった。

“CAROLINA SMASH!!”

“GRAND SMASH!!”

オールマイトのクロスチョップと骸無のストレートパンチがぶつかり合い、轟音と衝撃波をあたりにまき散らした。

互いの攻撃を相殺した2人はそのまま乱打戦に突入。

真正面からの殴り合い、ラッシュの速さ比べだ。

「おいおい、これ本当に弱ってるのか？」

「くっ、近づけません」

その迫力に、死柄木と黒霧の二人が声を漏らす。

天候を変えるほどの威力を持った一撃が2人の間で連続で繰り出され、近づくどころか身動きすら取れない。

『私並のパワー。いや、パワーだけなら私の100%以上か……死柄木が自慢する切り札だけはあるな。』

時間制限、力の衰え、未だ未知数の相手の個性……不利ばかりだ。

だが、それがどうした！ 私は平和の象徴!! どんなどきでも、負けるわけにはいかないのだ!!』

No.1ヒーローとしての意地で限界以上の力を引き出すオールマイト。

その気迫は、スペックで勝るはずの骸無を圧倒して、ついに骸無の顔面に一撃をくらわせた。

振りぬく拳。

吹き飛び、地面を転がる骸無。

舞う土埃。

オールマイトの一撃。普通の敵ならばこれで決着がくだらう。だが……

「立てよ、骸無。その程度でやられるような身体じゃないだろう」

「……了解。死柄木クン」

何事もなかったかのように立ち上がる骸無。

戦闘に支障をきたした様子はなく、平然とした姿はまさに化け物のようだった。

ただ、さすがにコスチュームは無事ではなかったようで、金属製のプロテクターはヘコみ、スーツに傷ができていた。

特に直撃を受けたヘルメットは損傷がひどく、飾り角はへし折れ、左半分が割れて素顔が露わになってしまっている。

「なっ、その顔。君はまさか!?!」

骸無の素顔に驚くオールマイト。

それを見て死柄木は笑みを浮かべる。

「ハハハ、気が付いたのか。いいなア。感動のご対面だ。せつかくなんだから挨拶の一つもしてやれよ、骸無」

「……………わかったよ」

死柄木の言葉を受けて、口元の留め具をはずしてヘルメットを脱ぐ。

色素の抜けた灰色の髪に、そばかすのついた頬。特徴的な緑の瞳は光なく、無表情でオールマイトを見つめている。

「緑谷……少年ツ!!」

「……お久しぶりですね、オールマイト。覚えていてくれて嬉しいです」

改人・骸無の正体、それは約1年前に行方不明になった緑谷出久であつた。

何故!?!

そんな気持ちを隠せず、動揺するオールマイトに出久は無感動に言葉を返す。

いま見ているものが信じられないと、オールマイトは言葉を投げかける。

「何故だ! あれほどヒーローに憧れていた少年がヴィランになど!」

悲痛な声で叫ぶオールマイト。

だが、出久は笑みを浮かべ、

「ええ、懂れていました。でも、懂れは懂れでしかなかった。『無個性』のボクはヒーローにはなれない。それが現実だったから」

「ツ……少年」

現実を見たから、だから諦めたんです。

そう告げる出久の言葉に、オールマイトは自責の念を覚え何も言えなくなってしまうた。

確かにあの時、自分は言ったのだ。

『夢みることは悪いことじゃない。だが……相応に現実もみなくてはな少年』

この言葉が少年を絶望させ悪の道へと引き込んだのなら、これは己の罪だと。

いまの個性社会で『無個性』がどんな立場になるのか、すぐ予想できただろうに。

本当は現実を彼自身が一番分かっていたことだろう。分かっている、それでも継るようにオールマイトN.O.1ヒーローに言葉を投げかけてきたのだ。

そしてオールマイトはそれを振り払った。

かつて己も無個性であったことを忘れ、冷徹に答えを突きつけたのだ。

それが、あの日、誰よりもヒーローらしく動いて見せた少年の運命を変えてしまったならば……

後悔。罪悪感。

オールマイトの心に重くのしかかり、絶望感がジワジワと体を侵していくようであった。

『平和の象徴』

その偉大なカリスマは、良くも悪くも影響を周りに及ぼす。

オールマイトの動揺が生徒たちも伝播し、不安で身動きがとれなくなってしまうた。

1人を除いて――

「てめえええええええええ!!」

「……ああ、キミか」

雄たけびをあげながら右手の爆発をぶつける爆豪勝己。

爆破をこともなげに右腕で払いのけて出久は爆豪に視線を向ける。

「言ってた通り、雄英高校に入学したんだね」

「ハッ、んなこたあ、どうでもいいんだよ。なんでてめえがここにいるんだア？ クソナード」

「なんで？ 頭のいいかつちゃんにしては当たり前前のことを聞くね。

そんなの……ボクがヴィランだからに決まってるじゃないか」

爆豪の問いに出久は平然と答えた。

なんの感情も示さないその様子が逆に、爆豪は苛立たせる。

「ぶざけたこと抜かしてんじゃねえ！ 突然いなくなっただと思ったらヴィランだあ!?! いままで何をしてやがった!!?」

「それ、キミにはどうでもいいことだろ？ どうして教える必要があるのかな」

「なん……だと……てめえ」

苛立ちをぶつけるように吼える爆豪。

だが、出久は無感動のまま淡々と返事をするだけだ。

「だってそうでしょ？ ボクはキミにとって路傍の石っころでしかないって言ってたじゃないか」

「ぎけんな！ てめえがいなくなつて、インコのおばさんがどれだけ心配したか分かってんのか!」

「心配……ハハッ、キミがそれを言うのか。『ワンチャンダイブ』なんて自殺教唆まがいのことを言っておいてさあ！

あれって、ヒーロー志望の人間が言うセリフじゃないよね。いまからでもヴィラン<sup>ち</sup>側に来たらいいんじゃないかな」

口が浅く弧を描き、嘲笑の色を表情に滲ませて言う出久。

1年前まで格下だと思っていた相手からの挑発に、爆豪の堪忍袋の

緒は容易くブチ切れた。

「ハッ、何もできない。『無個性』のクソナードはパンピーとして過ごしてるのが分相応だつてのによお、何を勘違いしてヴィランになんかかってやがんだア、『雑魚で出来損ないのデク』さんよオ」

「デク？ ……いま、デクって呼んだな！」

かつてと同じく、罵倒の言葉と蔑称でコンプレックスを刺激する爆豪。

その言葉に出久の顔に激情の色が灯った。

「ボクをその名で呼ぶな！ ボクはもう、『無個性』じゃない!!」

憎しみに満ちた目で爆豪をにらみ、怒号を上げる。

「そうさー！ ボクはもう『無個性』じゃない！」

何もできない木偶の坊、『デク』なんかじゃない！

ボクは選ばれたんだ！ ちよつといい個性を持っている人間とは違う。

オールマイトみたいなパワー。オールマイトみたいなスピード。オールマイトと同じくらいのスペックの体にたくさんの『個性』があるんだ！」

「ゴチャゴチャと訳の分かんねえことをほざいてんじゃねえ！」

叫ぶ出久に、爆豪が個性を使って攻撃を仕掛けた。

爆音が響き、もうもうと煙があたりにたちこめる。

先ほどまでチンピラどもと戦い、身体が温まっていたこともあって爆破の威力はかなりのものとなっていた。

「右の大振り。昔から最初の一撃はそれだよね」

「ッ……クソが！」

煙が晴れたときには、左手の手刀を振り切った出久と右腕を押さえようとする爆豪の姿があった。

爆豪の動きを読んで右腕にカウンターの手刀を当て、攻撃を逸らしたのだ。

出久は痛みを悶える爆豪に歩み寄り、片手で首をつかんで宙に持ち上げた。

「さてと。これからさんざん馬鹿にしてた『デク』に殺されるわけだ

けど、何か言い残すことはあるかな？」

「クソ、クソが！ てめえなんぞにやられるか！」

ボロボツ、と、小規模な爆破を持ち上げている出久の右腕にぶつけて抵抗する。

だが、出久は対 “平和の象徴” として造られた改人・骸無。生半可な抵抗ではその拘束を外すことは叶わない。

「それじゃ、さよなら。来世では、もうちよつとまともな性格になれるといいね」

出久の左腕が後ろに引かれ、貫手の構えを取った。

狙いは……心臓。

「よすんだ、緑谷少年！」

「おっと、邪魔はさせないぜ。こんな面白いショーはなかなかないんだから」

「オールマイト、あなたには生徒が殺されるのを指をくわえてみててもらいましょう」

「シット！ 君たちに構っている暇はないぞ！」

助けに入ろうとしたオールマイトは、死柄木と黒霧のコンビネーションに邪魔されて間に合わない。

爆豪の命は風前の灯火。

「爆豪を離せ！ この野郎」

それを助けたのは、爆豪と共に飛ばされていた切島鋭児郎だった。

『硬化』の個性で拳を堅め、無防備な出久の顔に叩き込んだ。

ガツンと、硬い物がぶつかる音が響く。

「痛う——」

数瞬後、声を上げたのは殴られた出久ではなく、殴った側の切島だった。

硬化化した拳にヒビが入り、血が流れ出していた。

「硬くなる個性か。いい個性だね。——ボクのほうが固かったみたいだけど」

そう口にする出久の頬は黒光りする何かに覆われている。

『炭素硬化』



人体の炭素原子の結合度合を変化させ、硬度を変える個性。

それによつて、硬度を高めた皮膚を変化させて攻撃を受けたのだ。切島はダイヤモンド並みに硬さの物へ拳を叩きつけ、逆にダメージを負つてしまった。

いくら硬化の個性といえど、ダイヤモンド並みの硬さまでには及ばない。

ついでに言えば、出久は『ショック吸収』の個性も同時に使つてノーダメージ。

吊り上げられた爆豪の拘束はほどけることはなかった。

「邪魔だね。キミは」

「なつ、ヤベえー！」

出久の言葉と共に、突風が吹き荒れて切島を吹き飛ばした。

『風力操作』

周囲の空気を操り、風を起こす個性を使い邪魔者を排除する風の境界を作る出久。

だが、風を避けるように地面を這つて冷気が出久の左半身を包み込む。

「てめえがどうやらオールマイイト殺しの切り札らしいな」

現れたのは、紅白の髪が特徴的な少年。轟焦凍。

彼の強力な氷結の個性は、特殊な素材の強化戦闘服コスチュームすら凍らせて出久の動きを封じたのだった。

「いい加減、離せや、コラッ！」

その隙を逃さず、爆破を使つて拘束を外す爆豪。

吹き飛ばされた切島も戻つて来たため、半身が凍結された状態で3対1に追い込まれてしまった。

轟が告げる。

「動くなよ。無理に動かそうとすれば体が碎ける。ヴィランとはいえそんなのは見たくねえ」

降伏を促すそのセリフに出久は、持つて生まれた者の無自覚な驕りを感じて嫌悪に顔を歪めた。

「もう勝つたつもり？ ずいぶんと自分に自信があるんだね」

憎々しげに轟をにらみながら、体の凍結を解除するためにまた新たに個性を使う。

「熱吸収／放出」

熱を吸収し、放出する個性。

爆豪の爆破による熱を利用し、凍らされた半身を溶かす。

この程度の氷の拘束では出久の障害にはなりえない。

「なに!？」

「また新しい個性かよ。ありえねえ!」

また新たに使われた個性に驚く轟と切島。

その傍らで、爆豪が警告を発した。

「バカ野郎!油断すんな!」

タツ

と、爆豪の声と同時に地を蹴る音が聞こえ、意識を戻した時にはすでに致命的な隙が生まれていた。

目の前には腕を振り上げる出久がいる。

「クソが!」

「チツ、速い……」

「うお!? おおおお!」

爆豪は無事な左手で爆破を。

轟は右足を伝って氷を。

切島は硬化させた左ストレートを。

各々のとっさの反応で迎撃に動いていた。

ここで誰一人として防御も回避も選んでいないところは、さすが雄

英のヒーロー科。勇敢だ。

だが、連携も取れていないのでは、ほぼ同時に思える三方向からの攻撃といえど、改造人間となり知覚が強化された出久にはぬるい。

爆豪の腕をつかんで爆破を逸らし、氷は炎熱で融かす。

切島の攻撃に至っては防御すらなく、真正面から受け止めてみせた。

1—Aでも高い戦闘力を持つ3人の攻撃は、いとも容易くあしらわれてしまったのだった。

「嘘だろ……」

見ていた生徒の一人が思わず漏らした言葉は、その場の生徒全員の代弁に思えた。

圧倒的な戦闘力の差。

それを見せつけられて、オールマイトが来たという希望に徐々にヒビが入り始めるのを感じた。

そして、さらに絶望させるような光景が続く。

「ガアアアアア！」

「冷てえろ！」

出久に触れていた爆豪と切島の二人が苦悶の声を上げる。

少し離れてそれを目撃した轟は呆然と言った表情で声を漏らした。

「バカな……俺と同じ個性だと……」

その目に映るのは、腕を氷漬けにされて倒れる二人の姿だ。

先ほどの炎の放出と今見せた氷結。

自らの個性と同じような能力を見せつけられて平静を保てない轟に、出久は告げる。

「同じ？ 違うよ。氷だけのキミと違って、ボクのは応用を効かせれば熱するも冷やすも両方できるんだ。いわばキミの上位互換ってやつだよ」

見下すような歪んだ優越感に満ちた言葉は、轟の心をえぐる。

『俺の炎だけでなく、氷も操れるお前は、俺の上位互換だ！ いずれは俺をも超える最高傑作だ！』

過去、忌み嫌う父親から言われたことが頭にリフレインする。

“半冷半燃”の己の個性を父への反抗から封じている轟にとって、炎と氷を使う出久は父親の言う通りになった自分の姿に思えてならなかったのだ。

「ぎげんな！ 俺はこの“個性”<sup>ちから</sup>だけで——」

「遅いよ」

激昂し、氷の個性の最大出力を放とうとする轟だったが、その左腕はすでに出久によって掴まれてしまっていた。

瞬間、冷気と共に轟の左半身が凍りつき、動きを奪う。

いや、動きだけではない。自身が耐えられる冷気の限度を超えたため、氷の個性すら封じられてしまった。

轟は無力化されてしまった。

正確には、左の炎の個性を使えば戦闘に復帰できるだろう。

だが、父親への対抗意識がぬぐえない轟には、この期に及んでも左を使う決心がつかなかったのだった。

邪魔者がいなくなった出久は、爆豪のもとへ歩き出す。

倒れ伏した爆豪を見下ろす出久は、嬉しそうに嗤った。

「いいざまだね。お似合いだよ、その姿」

「デク……てめえ……グッ！」

「その名前で呼ぶなって言ったら何度分かるの……さッ！」

爆豪の頭を足で踏みにじり怒りをぶつける。

その表情は憎しみに彩られている。

痛みと屈辱、そして怒りでうなり声をあげる爆豪。

“New Hampshire SMASH”

このままとどめを刺されるばかり。

そんな状況を救ったのは、やはりオールマイトであった。

拳の風圧で死柄木と黒霧への牽制としながら、その反動で出久のもとまで移動したのだ。

空中で反転し、出久に向き合う形となったオールマイトは、勢いのまま掴みかかった。

「クッ、離してくださいオールマイト」

「NO！ いや、離さないぞ緑谷少年。私は君に言わねばならないことがある」

両者組み合う形で、出久に語りかけるオールマイト。

オールマイトは、あの日、出久に言うことができなかった言葉を伝えるつもりであった。

「少年、私はあの時、ヘドロのヴィランに立ち向かっていった君の姿に私は動かされた！」

ほかでもない、小心者で“無個性”の君だったから!!!」

「な、なにを言ってるんです?! オールマイト!!」

オールマイトの言葉に、出久は心臓が早鐘を打つのを感じる。

「トップヒーローの多くはこう語る『考えるより先に体が動いていた』と！ 君も、そうだったんだろう?!」

「ああ……あああ」

忘れていた何かを思い出すような。

ずっと欲しかった言葉を。

「あの日、私は君に伝えたかったんだ。

『君はヒーローになれる』

「う、うわああああ!!」

オールマイトの言葉を受けて叫び、その腕を跳ね除けて飛び退る。

その言葉は出久の心をぐちゃぐちゃにかき回し、狂乱状態へと導いた。

「僕がヒーローに？ でも僕なんかじゃ分不相応で……だからボクは諦めたんだ。そんなボクを『先生』は選んでくれた……だから、その恩返しをボクは……でも僕は、僕は本当はヒーローに……僕は……ボクは——」

頭を抱え、うわ言のようにブツブツとつぶやく出久。

死柄木はその姿にイライラした口調で文句を言う。

「チツ、こんな肝心な時にバグリやがった。ふざけんな！」

「落ち着いてください、死柄木弔。まだ、骸無がやられたわけではないです」

「適当なこと言うなよ、黒霧イ。アレがまだ使えるように見えるのかよ！」

ガリガリと首をかきむしりながら苛立つ死柄木を黒霧は何とかなだめようとする。

思い通りに進まないことに腹を立てる様子はまるで子供だ。

子供の癩癩など、それで事態が好転することなどほぼない。

そんな死柄木の態度が招いたわけではないだろうが、ヴィラン連合にとって最悪の状況が訪れた。

「ごめんよ皆。遅くなったね。すぐ動けるものをかき集めてきた」

玄関の扉が開かれ、校長の独特な高い声が響く。

「1-Aクラス委員長、飯田天哉！ ただいま戻りました!!」

委員長飯田が増援の知らせを告げ、雄英教師のヒーローたちが姿を現した。

形勢逆転。

追いつめられたのはヴィラン連合だ。

「ああ、来ちゃったな……ゲームオーバーだ。帰って出直すぞ、黒霧、骸無」

死柄木に反応して出久がヒーローの攻撃を防ぎながらワープゲートをくぐる。

「待つんだ、緑谷少年！ くう、こんな時に制限時間が！」

オールマイトの必死の呼びかけにも、出久は答えることなくワープゲートへ消えていく。

ヴィラン連合の幹部の撤退により、雄英高校USJ襲撃事件は幕を閉じた。

この事件は、ヴィラン連合が起こした最初の事件として——  
そして、行方不明になっていた緑谷出久が敵<sup>ヴィラン</sup>堕ちしたことが確認された事件として記録された。

## 雄英高校USJ襲撃事件 アフター

ヴィラン連合による雄英高校USJ襲撃事件は、幹部3人を除く襲撃犯の逮捕により幕を閉じた。

教師2名が重傷を負ったものの命に別状はなく、生徒も爆豪の骨折以外は軽傷で済んでいる。

現場の検証もすでに警察の手に渡り、事件は一応の落ち着きを見せていた。

今回の功労者であるオールマイトは、身体の限界時間のため保健室のベッドで体を休めていた。

備え付けのベッドに腰掛け考え込むその表情にいつもの明るさはなく、重く落ち込んだ顔をしている。

考えているのは他でもない、骸無がいむと呼ばれていた改人の少年、緑谷出久のことだ。

あのヘドロ事件において、あの場の誰よりもヒーローらしい行動を示した少年を自分の言葉が悪の道に引きずり落としたのではないか。

そんな罪の意識が重くのしかかってくる。

コンコン

と、ノックの音にオールマイトはうつむいていた顔をあげた。

客人は一人。

中折れ帽にトレンチコート姿の男。オールマイトが最も信頼する警察官・塚内 直正警部がオールマイトに声を掛ける。

「やあ、調子はどうかな？」

「ハハハ、なあに、ケガはたいしたことがなかったからね。もう体は大丈夫さ」

先ほどまでの暗い表情などなかったかのように笑顔で振る舞うオールマイト。

その姿に、塚内警部は笑みを浮かべて、

「体は……か。ということは、元気がないのは別の悩みがあるからかな？」

こともなげにオールマイトの演技を見破った。

これには苦笑するしかなく、頭を軽く掻きながら内心を打ち明けた。

「まったく、さすがに塚内君にはごまかせないか。そうさ、ちよつと柄にもなく悩み事を抱えていたところさ」

「なるほど。君を悩ませるとはかなり難題みたいだね」

塚内はオールマイトと向かい合うようにイスに座り、じつくり話を聞く体勢になった。

「それで？ 今回の事件、いったい何があった？ おそらくは君が戦った故人の少年を気にかけているのだろうか……」

早速、話の核心を尋ねる塚内の言葉にオールマイトは頷く。

「その通りさ。一年前、ヘドロヴィランの事件があったのを覚えているかい？」

「ああ、たしかーA生徒の爆豪君が巻き込まれた事件だったね」

「その日に私は故人・骸無と……いや、緑谷少年と出会ったんだ」

「やはり顔見知りか。だが、解せないな。その少年が君ほどのヒーローがそこまで思いつめるほどの相手とは思えないけれど」

オールマイトと長い付き合いのある塚内警部は、件の故人がオールマイトと知り合いであったところに驚きはしたものの、納得のいかない顔で疑問を投げかけた。

多くのヴィランと相対してきたオールマイトの経歴には、不幸にも友人・知人が悪の道に堕ちてしまうことは何度か経験している。それでも、平和のためと齒を食いしばって打倒してきたのだ。

そんな彼にここまで影響を与える存在とは何者なのか、塚内が疑問に思うのも当然といえる。

「彼とはヘドロヴィランを追っていた時に救けたのが出ファーストコンタクト会いでね。その時に彼にこう聞かれたよ……」

『「個性」がなくともヒーローになれますか』

とね」

「無個性でヒーロー……それは……」

「ああ、普通に考えれば無茶な話。私も彼には厳しい言葉を送ったよ。『個性ちからがなくとも成り立つとはとてもじゃないが言えない。夢を見る



ことは悪いことじゃないが、現実も相応に見なくてはな  
だつたかな。

いま思えば、そんなこと彼が一番分かっていたことだつたろう。そ  
れでも私に問いかけてきたのは……」

「オールマイト……」

「まったく情けない。救いを求める手を払いのけて何がヒーローだ」  
拳に力を籠め、悔しさを握りつぶす。

「あまり自分を責めるな、オールマイト。彼がヴィランになったのは  
君のせいじゃない」

優しく慰めの言葉をかける塚内警部であつたが、オールマイトは首  
を横に振って答える。

「いいや。私はNo. 1ヒーローの名前に知らず知らずのうちに傲慢  
になつていたんだよ。それを教えてくれたのが彼だつた。

無個性でありながら、その場のどのヒーローたちも——私も含めた  
ヒーローたちが立ちすくむ中、友人を救けるために飛び出していった  
彼にヒーローの輝きを見たんだ。

「それこそ私の個性ちからを受け継いでもらいたいと思えるほどに」  
「個性ちからを!?」そうか、君が選ぶほどの人物だつたのか」

「あの日、私は彼のノートを拾つた。もしあの場所で敵の手に落ちた  
のだとすれば、もう少し早く駆けつけていられたのなら彼にちゃんと  
言えていたはずなんだ。

『君は、ヒーローになれる』

彼が一番欲しかった言葉を」

ヒーローは遅れてやつてくる。

事件が起きてから動かざるを得ないヒーローの宿命のような言葉  
だ。

ヴィランの起こす事件に後手に回つたせいで、救えなかつた命を前  
に『もう少し頑張つていれば……』『もう少し力があれば……』と、新  
米ヒーローならば一度は経験する思いだ。

そんな後悔は何の役にも立たず、経験を重ねるごとにその失敗をか  
みしめ次に活かす術を身に着けていく。

だが、ベテランヒーローであるオールマイトも、今回の事件はそんな思いを考えずにはいられないのだった。

己の力の無力を後悔するオールマイトに塚内警部は、「それでどうするんだい？ その少年と次にあった時に君はどう行動する？」

と、現実的な問題突きつけた。

オールマイトは覚悟を決めた顔で告げる。

「次に会ったときは……私が……責任を持って彼を……倒す！」

宣言するのは悲壮な決意。

オールマイトが出した、救えなかった緑谷出久への責任の取り方の答えだ。

だが、

「おいおい、らしくないなオールマイト。君の口から出た言葉とは思えないよ」

長年の友人である塚内警部は、その決意に水を差す。

「ら、らしくないって、塚内君くん」

「だってそうだろう？ いつもの君なら『倒す』なんて言葉は使わない。僕の知っているオールマイトっていうヒーローならこう言うはずだ『彼をヴィランから『救ける』』ってね」

「彼を……救ける？」

塚内警部の言葉を呆けたようにおうむ返しで返すオールマイトに塚内警部は頷いて言葉を重ねる。

「君がそこまで見込んだ彼が、いくら現実に夢破れたからといって悪の道に走るとは思えない。むしろ、無個性とわかってから10年も諦めきれなかった思いを裏切ることなんかできるかな？」

思い起こすのはUSJでの最後の戦闘。

一年遅れで伝えた言葉に、彼は大きく動揺していた。

自分の言葉は確かに届いていたのだ。

「そうだ、まだ諦めるには早いー」

希望を見出し、目に光が灯る。

緑谷出久はまだ悪に染まりきってはいない。

そう信じると決めたのだ。

「それに、彼が洗脳されている可能性もある。

彼が個性を複数使っていたことは、生徒の証言からも確認されている。無個性だった彼が『ヤツ』から個性を与えられて手駒にされた——と、考えるのが自然じゃないかな」

「オール・フォー・ワン」……あいつの仕業か」

「その可能性が高い。ヤツなら洗脳系の個性を持っていても不思議じゃないからね」

事件の背後に宿敵の影が見えたことで、ますます戦意を高ぶらせるオールマイト。

そこには先ほどまでの力ない姿はもはやない。

「ヤツの好きにはさせない。次こそ決着をつける！　そして緑谷少年を救って親元へ返す！　それが『オールマイト』の、『8代目ワン・フォー・オール継承者』としての最後の役目だな!!」

意気揚々、決意を新たにするオールマイト。

この次に戦いの場に出た時には、ためらうことはないだろう。

だが、その前に、オールマイトはもう一つ厳しい現実と向き合わねばならなかった。

|||||

この日、爆豪は人生最悪の日だと思った。

一年前に姿を消した格下の幼馴染がヴィランとなって現れ、あまつさえ自分は手も足も出ずに敗北した。

それだけでも耐えがたい屈辱であったが、加えて顔見知りであるということから警察に事情聴取を受ける羽目になったのだ。

戦闘と腕の骨折の治癒に体力を消耗していたところに、過去の話——それも爆豪には話し辛いこと——を根掘り葉掘り聞かれたのだ。

そんなこともあり、爆豪の機嫌は最底辺を記録している。

近寄れば噛み付きそうな手負いの獣じみた爆豪。

彼に話しかけるのはよっぽどの理由があるのだろう。そう、目の前に立つ轟と切島のように。

「んだよ。邪魔だ、ブツ殺すぞ」

「悪い、話がある」

「知るか、ボケエ！　なんでてめえの話なんぞ聞かなきゃならねえんだ?!」

話しかける轟に構わず、立ち去ろうとする爆豪。

それを慌てて切島が引き留めた。

「待て待て、疲れてんのは分かっけど、少しくらい話をさせろって」

「ヤダ」

「なっ、ヤダって、子供か!?!」

まったく取り合ってくれない爆豪に切島が頭を抱える。

まだ短い付き合いだが、爆豪に振り回されていることが多いのが切島だ。

「おまえが疲れてるかどうかは興味ねえ。あの骸無とかいう野郎とおまえ、知り合いつぽかったよな」

「ああん!?!　なんだ、てめえ喧嘩売ってんのか?」

「ちよ、轟も火に油を注いでんじゃねえよ!?!」

空気も読まず、質問を投げかける轟だが、一言多いせいで爆弾を投下してしまっている。

ただでさえ機嫌の悪かった爆豪は即座にヒートアップ。轟とらみ合うこととなった。

隣で見ている切島は、キリキリと胃が痛むのを感じた。苦労人臭が漂っている。

「あいつと知り合いなら、知っていることを教えろ」

「ずいぶんと命令口調で言ってくれるじゃねえか、オイ！　てめえに教えてやる必要はねえな!!」

「そうか、知らないとは言わねえんだな」

「……チッ!」

失言だったと舌打ちをして顔を歪める爆豪。

言葉の内で、関わりのあることを認めてしまったことに気が付いた

のだ。

「だからなんだ！ てめえには関係ねえ話だろうが！ いちいち首ツツコんでくるんじゃない、クソが！」

関わりがあることを知られたからといって、話してやる義理はないと拒絶する。

だからと引き下がるような二人ではない。

「無関係じゃねえよ。ヤツが雄英を襲った時点で全員関係者だ。特に、ヤツと直接戦ったのは俺たちだからな」

「そうだぜ。またあいつが襲ってこねえとも限らねえ。その時に詳しい話を聞いてれば対策が取れるかもしれないねえ。今後のみんなのためになることを自分が嫌だからって話さないのは男らしくねえぞ、爆豪！」

無関係ではない。話す義理はなくとも義務はある。

そう主張する二人に爆豪は足を止めた。

また、デクと戦うことになる。再度あいつと会ったときに自分はどうするのか？

1年ぶりに会った、姿も、力も、そして性格すらも変わってしまった幼馴染のことを思い出してみる。

いつもおどおどしていて、それでいてどれだけ痛めつけても自分の後ろをついて来ていた無個性のデク。路傍の石つころくくらいの認識しかなかった相手。

こうして改めて考えてみると、長年の付き合いにも関わらず自分は緑谷出久という人物のことを何一つ知らないことに気が付いたのだ。

ヒーローに目を輝かせてヒーローになると夢を語っていた裏で、どんな闇を抱えていたのか。

自分がその夢を馬鹿にするたびに、もしかすればその闇は少しずつ積み重なっていったのではないか。

そんな鬱屈とした考えが頭から離れず、爆豪の苛立ちをさらに強めることとなっている。

緑谷出久は何を考えてヴィランになったのか。

その最後のヒントとなるのは、他ならぬ爆豪本人だった。

あの日、出久のノートが落ちていた現場は、最後に爆豪と出久が言葉を交わした場所からさほども離れていない場所だった。

つまり、最後に出久と会ったのは爆豪なのである。

『あいつ、あの時何を考えていた？　どんなことを思っていたんだ？　クソ、分からねえ……』

爆豪自身ですら理解できていないのに、他人に話せるはずもない。話すことなど一つもない。

「あいつと俺の問題だ。話すことなんかねえよ。それに、あいつと戦うのは俺だ。譲るつもりも無え」

「お、おい、爆豪！」

止める切島を振り切り歩き出す。

今まで知ろうともしなかった幼馴染と正面から向き合うことを決めた爆豪。

その方法は一つだけ。

「あいつは、俺が直接ブツとばす！」

拳を交わす。それだけである。

いまさら言葉だけで終わるような関係にはなっていないのだ。

覚悟を決めた爆豪だが、ふと脳裏に1人の人物がよぎった。

「チツ、あのクソナードが。インコおばさんになんて言えばいいんだよ」

|||||

——折寺総合病院

「……出久」

一冊のノートをベッドで捲る女性。

緑谷出久の母、緑谷インコだ。

「緑谷さん、またあのノートを開いてますね」

「ええ、いなくなった息子さんが残っていたノートなんですって」

「緑谷さんもお気の毒ですね。行方不明になった息子さんを心配して心労が祟って入院ですもの」

「息子さんが見つければ、緑谷さんも元気になるんでしょうけれど……」

病室の前を看護師が心配そうに見つめながら通り過ぎる。

緑谷インコは、息子が行方不明になったショックから精神を患い入院している。

もはや、看護師のおしゃべりも聞こえていない様子で、一心不乱にノートを見つめていた。

タイトルは「将来のためのヒーロー分析ノート No. 13」

そのノートは焼け焦げ、汚れてしまっていた。

## とある研究員の手記

私は「先生」にその科学力を認められて、研究員となってから毎日が発見の連続だ。

噂には聞いていたが、「個性を奪い・与える個性」が実在するとは！

だが、普通の人間の何倍もの時を生きてきた「先生」ですら、『個性』には謎が残っている。

私は、「先生」のもとで行った実験が、今後の『個性』研究の助けとなることを願い、ここに書き記すものである。

### 『個性付与実験について』

この実験の目的は2つ。

1. 「先生」の個性付与の際の負荷を減らすメカニズムを見つけること。
  2. 対ヒーロー用の改造人間の改良。
- 以上である。

1. に関して、「先生」による個性の付与は、場合によっては与えられた対象が負荷に耐えられず、物言わぬ人形のような廃人となることがある。

この事実を、「先生」の後継者である「S」が、「先生」のすべてを引き継ぐことになった際に懸念される問題の一つだ。せつかく育て上げた後継者を、「先生」自らの手で壊させるわけにはいかない。

2. に関して、先にあげた問題と関わってくるのだが、現在造られている対ヒーロー用の改人「脳無<sup>のうむ</sup>」は、複数の個性を与えられ、かつ、肉体を薬物によって強化・調整している。

これにより、並の人間には対抗できないほどの戦闘能力を身に着けた反面、思考力が極端に低下。

命令がなければ動くことも不可能な人形と成り果てた。

戦闘訓練と経験を積んだヒーローによる連携や戦術に対応できるほどの知能がなければ、「脳無」は容易く討ち取られるだろう。特に



トップヒーローと呼ばれる者たちが相手ならば、身体能力のスペックだけで圧倒できるようにするにはコストの面で現実的ではない。つまり、新しい改人のコンセプトは「戦闘能力と思考力の両立」である。

最終目的の個性付与の際のリスク削減のためのデータ採取。それが実験の主旨であるわけだ。

既に第一次から第三次実験まで終了しており、もともと個性を持っていたチンピラを実験体として、最後には「脳無」の素体とした。

今回の第四次実験からは『無個性』を対象に行う、個性付与の負荷耐久実験だ。

個性を与える・奪うを繰り返し、どの程度で廃人となるかデータを採るのだ。

数の少ない『無個性』の人間を探して連れてくるのが手間ではあるが、まあ、『無個性』の人間など今の社会では役立たず扱いだ。

いなくなったところでまともに取り扱われることもあるまい。

しかし、この実験には「先生」曰く、もう一つの目的があるのとこのだが……

|||||

『被検体No. B004 実験記録』

無個性実験第四番被検体について。

コードNo. B004 被検体名「緑谷出久」14歳

一回目 「風を操る個性」付与。——被検体、心理的動揺が見られるも身体・意識共に正常。

二回目 「筋力増強個性」付与。——身体・意識ともに異常なし。

三回目

58回目の実験　被検体、体力の消耗が見られるものの身体・意識は正常な数値を示している。

驚くべき結果だ。

これを持つて、“先生”により、実験の中止が言い渡される。

被検体N o . B 0 0 4は、特殊な個体らしい。“先生”自らが調べになるこのことだ。

どのような結果がでるのか楽しみだ。

|| || || || || || || || || || || ||

まさかまさかまさか！

こんなことがあるとは!!

やはり『個性』の研究はまだ未知数だ。

まさか他人から『個性』を与えられて初めて意味を持つ『個性』があるとは!!

“先生”によれば過去にもそのような事例があったらしい。

この『無個性』への実験には、そうした「個性を持っているが、本人が気づいていない、もしくは意味のない個性」を見つける目的もあったのだという。

過去の事例では、『個性』を与えられたことで強力な『個性』が発現したという。

柳の下の泥鰌という言葉があるが、“先生”にはそれを狙って引き当てるほどの強運を持っていたということだろう。

…興奮しすぎて、本題からそれてしまった。

『無個性』であると思われる被検体N o . B 0 0 4が持っていた『個性』は、「個性を引き受ける個性」という。

まさに“先生”がいなければ、意味のない個性だ。

この『個性』の持ち主が我々のもとに来てくれたというのは、なんとこの幸運だろう。

この結果より、被検体N o . B 0 0 4を「次期対ヒーロー用改造人間素体」に選出。

コードナンバーをN o . B 0 0 4から、N o . G 0 1と変更した。

科学のさらなる発展のため、また、  
“先生”の栄光のために、今夜  
は祝杯をあげよう。

## 雄英体育祭襲撃事件編

### 緑谷出久は体育祭に参加しました

#### 雄英体育祭。

日本において、個性の存在が一般化して形骸化してしまったオリンピックに代わるビッグイベントだ。

先の襲撃事件を考慮し、警備のヒーローたちを増員して行われた今大会。

襲撃事件を乗り越えたA組はもちろん、同じヒーロー科のB組、ヒーロー科編入を目指す普通科、そして企業からの注目を得たいサポート科の生徒たちも気合を入れて臨んでいた。

とくに普通科は、ヒーロー科のA組が1人、初日に相澤によって除籍されているため空きがあるため、好成績を残せば編入の可能性が高いこともあって熱気にあふれていた。

そんな熱い思いが交差する体育祭は、当初の心配をよそに最終種目を迎えようとしている。

第一種目の障害物競走ではA組19名、B組20名とヒーロー科全員が通過を果たし、普通科からも2名、サポート科から1名が第二種目進出している。

1位はA組の轟焦凍。2位の爆豪とのデッドヒートの末、僅差でトップの座を勝ち取ったのだった。

#### 第二種目の騎馬戦。

ここでも轟焦凍が力を示した。

1位の1000万ポイントを狙われるも、上鳴の放電と自身の凍結で相手を拘束。氷の城砦を築き、八百万の迎撃装置で最後までポイントを守りきった。

2位で進出したのは心操チーム。心操の個性により、2位をキープしていた鉄哲チームのポイントを競技終了間近で奪い、進出。

3位進出は爆豪チーム。一時ポイントを物間チームに奪われるものの、途中で奪い返すのみならず相手のポイントをすべて強奪した。

4位は青山チーム。轟の攻撃により動けなくなったチームを、麗日の個性と発目のサポートアイテムで空中から襲撃。ポイント確保後は、常闇の個性である黒影が防御にまわり時間いっぱいまで耐えた。そして、最終種目の1対1の直接バトル。

心操チームの尾白と庄田が棄権して、鉄哲と塩崎がエントリー。16名によるトーナメントが行われる。

———はずであった。

|||||

「ちっ、電波ジャックだ！ システムを確認しろ！ これ以上放送させるな!!」

放送席の相澤から指示が飛ぶ。

レクリエーションを終え、最終種目の開始時刻となりトーナメント表が表示されるはずだった巨大スクリーンは乗っ取られて別の映像を映し出している。

スクリーンに映るのは掌を模したマスクの男、ヴィラン連合のリーダー・死柄木弔である。

『やあ、会場にお集まりの方々、そしてテレビをご覧のみなさん。俺は死柄木弔。ヴィラン連合のリーダーだ。前回、雄英高校を襲撃したのは俺たちだ。そして、今回この場を借りて伝えたいことはただ一つ。

……宣戦布告だ。

おまえたちが安全盤石だと思っているこのヒーロー社会が、おまえたちが信じる“正義”とやらがいかに脆弱であるか暴いてやる。

そして見せつけてやろう、俺たちがどれだけの力を持っているのかをなア。

さア、ショータイムを楽しんでくれ』

マスク越しにニヤアと笑う死柄木がそう告げたあと、映像が途切れる。

そのかわりに会場のあちこちから黒い霧のようなワープゲートが出現して、そこから飛び出してきた化け物が人を襲い始めた。

脳がむき出しで多腕や多眼などおおよそ人の姿からかけ離れた姿の改人・脳無。

その恐ろしげな姿に、一般人のいる観客席はパニックに陥った。

「民間人の救助を優先しろ！ 戦えるヒーローはチームを組んで、ぐあつ！」

「おい、大丈夫か！ くそ、増援だど!？」

その場にいたヒーローが動き出そうとしたところで、ワープゲートから新たな敵が現れる。

その姿は人型ではあるが、プロテクターのついたジャンプスーツの戦闘服コスチュームにフルフェイスのマスクが不気味な印象を与えている。

「なんなんだ、こいつら。訓練された動きだぞ！」

「気をつける、すごい力だ。全員、増強系の個性持ちか!？」

1体だけでなく、複数人で連携して攻撃を仕掛けてくるヴィランたち。

その正体は、対ヒーロー用改人2号・身無しんむである。

身無の妨害により、思うように動けないヒーローたち。

その場にいたNo.1ヒーロー・オールマイルトもまた、足止めをされていた。

「くうつ、ただ者じゃないな、君たち！」

攻撃をガードし、呻くオールマイルト。

その周りを囲むように戦闘服コスチュームを纏った改人たち5人が各々拳をかまえている。

「くつくつく、そこいらの奴らと一緒にするなよ。オールマイルト」

「我々は対オールマイルト用に出され、訓練を受けた」

「特別な改人、コマンドー・チームである！ おぬしの命運もここまでじゃ！」

改人・身無の強化バリエーションチーム「コマンドー・身無」。

通常の個体より強化され訓練を受けた彼らはいわゆるエリート部隊だ。

対策に対策を重ねた彼らは、生きる伝説オールマイルトを前にしても

物怖じすることなどない。

「私対策……か、だからどうした！ 私がいままでどれだけのヴィランを相手にしてきたと思っっている!!」

そんなことを言ってきた輩は今までたくさん見てきたものさ」

「チィイ、吼えるな！」

鋭く眼光を光らせ、5人相手に啖呵を切るオールマイト。

その言葉を合図に戦いが再開した。

正拳・蹴り・手刀・タツクル・エルボー

次々と襲いくる5人のコンビネーション攻撃を身体スベックと長年の経験から捌ききり、隙を見て反撃をするオールマイト。

めまぐるしく拳や蹴りが相手を破壊するべく振るわれる嵐のような攻防のなか、オールマイトは違和感を感じた。

『あれだけ自信満々に言っておきながら、たいした攻撃は仕掛けてこない。むしろ彼らの動きは防御に力点を置いたような……まさか!』  
身無の一人に向けて拳を放つオールマイトであったが、相手は空手の廻し受けのような動きで攻撃を受け流す。

その動きを見てオールマイトの予測していた相手の意図は確信に変わった。

「君たち、私と勝負を決めるつもりがないな！」

オールマイトの言葉に身無たちはクツクツと笑いだす。

「ククツ、気づいたかオールマイト」

「カカツ、我らは耐久性を強化され、防御を重点的に訓練を受けてきたのじゃ」

「そう、我々の得意とする戦いは持久戦」

「さてさて、おめえさんの限界時間はどのくらいだあ？ オールマイト」

「この戦い、ワタシたちは総力を持って持久戦を続けるとしよう……おまえが真トゥルーフの姿オールムを晒すその時までな！」

オールマイトの限界時間の弱点を突く作戦。

この戦いは身無たちにとって勝つ必要がない。なぜなら、オールマイトの足止めさえできれば勝ちが転がり込んでくるのだから。

会場に、平和オールドの象徴はまだ来ない……

|||||

——1年生 体育祭会場

本来ならば生徒同士が栄冠を目指して競い合うはずであった舞台は、ヴィランとのデスマッチの場と化していた。

主審のヒーロー「ミッドナイト」と副審「セメントス」を倒し、舞台に立つ骸無。

その目は次の獲物、トーナメント進出者の生徒たちに向けられている。

「さて、邪魔なヒーローは片付けた。死柄木くんの指示なんだ。君たちには悪いけれど、生贄になつてもらおうよ。

ヒーローを指すものがどんな末路を迎えるのか、我々、ヴィラン連合に楯突くことがどんな結末を呼び込むのかを見せつけるための……ね」

冷徹に敵意を向けてくる骸無に怯える生徒たち。

その中から1人、骸無に向けてまっすぐに飛び出した者がいた。

「デエエクウウ!!」

「また君なの？ かっちゃん」

叫び声をあげながら突進する爆豪。

それを呆れた様子で受け止めた骸無は、軽々と爆豪を放り投げて告げた。

「本当にしつこいね。でも、君がボクを執着するなんて……気に入ったよ。なら君を殺すのは最後にしてあげるね」

だから、それまではこいつらと遊んでて。

と、骸無の合図で身無が新たに2体現れ、爆豪に襲い掛かる。

「ハァー」

「チツ、離せや。このクソ雑魚が!!」

組み付いてくる身無と戦闘を開始する爆豪。

戦いながらその場を移動していく姿を見送った骸無は残りの生徒たちに目を向ける。



その時には、もう既に平静を取り戻したヒーローの卵たちが戦闘準備を整えていた。

「真っ先に突っ込んでいった爆豪の男らしさには負けられねえぜ！」

「おめエの好きにはさせねえぞー！」

先陣を切ったのは切島・鉄哲の硬鉄コンビ。

共に前衛向きで、似通った個性を持った2人は息も合うのか、流れるような連携技で格闘戦を挑んだ。

硬化化した腕の斬撃に、鋼鉄のハンマーのような拳の攻撃。

普通の相手ならば当たればダメージは確定である。

が、相手は対ヒーロー用の改人・骸無。ただかヒーロー科の1年生の攻撃などあしらうことなど容易いものだった。

「遅いし単純な動きだね。そして、硬化化の個性といえど弱点はある」

「痛えー」「クソオ、離しやがれ」

腕をつかみ捻りあげ、あつという間にサブミッションホールドで二人を取り押さえてしまった。

痛みに身をよじる切島と鉄哲。硬化による打撃・斬撃に耐性はあつても、極め技は防げない2人の個性を分析して対処を行う骸無。

その2人を助けるために仲間たちが遅れて動き出した。

そのうちの一人は、麗日お茶子だ。

「触れてしまえばー！」

麗日が骸無に手を伸ばす。

触れてしまえば無重力で相手を無力化できる個性ならば、いくら力量差があれど逆転できる。

そう思い、背後に密かに回り込み奇襲をかけた麗日であったが、骸無に気が付かれてしまっていた。

「どわあああー」「うおおおー！」

「浮かす個性……これは危ないな」

「くう、離してー！」

両手に拘束していた2人を数メートル投げ飛ばし、麗日の両腕をつかんで止める。

身体スベックだけでなく、その場の素早い状況判断も骸無の脅威の

一つだ。

両腕を拘束したまま骸無は分析を続ける。かつて「緑谷出久」だったころのように――

「触れる必要がある個性……死柄木クンみたいだな。彼みたいに五指で触れる必要があるんだろうか？ この肉球が個性のカギ？」

「ひ、人の手えじろじろ見てブツブツと！」

腕をつかんだまま考察を始める骸無に、麗日は薄気味悪さを感じた。そして、次の骸無の言葉で恐怖に凍りつく。

「――無力化するには……指を切り落とせば使えなくなるかな？」

「ヒイッ！」

冷静に指の切断をほめかす骸無に麗日の表情が恐怖にひきつる。

感情を感じない言葉に、麗日は目の前の人物が人間とは別の生き物のように感じてしまった。

思わずへたり込む麗日のもとへ仲間たちが助けにはいる。

まず動いたのは常闇と塩崎の2人。

塩崎の茨が骸無の腕に巻き付き、常闇の黒影が麗日を救出した。

骸無は茨の拘束は即座に抜け出したが、それでも数瞬の間が生まれてしまっている。

その隙について骸無へ反撃に出たのは芦戸・青山・八百万たち。

強酸

レーザー

銃弾

いずれも中遠距離からの攻撃だ。

強酸のシャワーを躲し、輝くレーザーを潜り抜けたものの、最後は八百万が作ったマシンガンの銃弾に直撃を受ける骸無。

ガガガッ！

と、鈍い音を立てて弾丸が骸無のコスチュームをはねる。

しかし、衝撃に一・二歩ほど後ずさったものの、その体に大したダメージは見受けられない。

それもそのはず。撃ち出されたのはゴム弾だったのだから。

「こんなものゴム弾じゃボクは倒せないよ。ボクを倒したいなら殺す気で、鉛玉くらい使わないと」

「ヒーロー志望相手に殺す気では、無茶を言ってくれますわね」

「撃たれたよね!? 撃たれたのに全然効いてないなんて化け物だよお……」

骸無の言葉に顔を歪める八百万と思わず弱音を吐く芦戸。青山は恐怖のあまり萎縮してしまっている。

怯える3人を救けるためにほかのメンバーが攻撃を仕掛けた。

パシユツ

という射出音とともにワイヤーが飛び出し、骸無の右腕に巻き付く。

ワイヤーを辿った先にいたのは上鳴電気。サポート科の発目のアイテムを腕に装備した彼は、骸無に向けて不敵な笑みを浮かべた。

「へへッ、これなら俺の攻撃にみんなを巻き込まずに済む。この状況なら俺は……クソ強え!」

「ぐっ!」

ワイヤーを通して電気が流れ込み、骸無が苦痛にうめく。

電気ショックにさすがの骸無も動きが止まった。そしてその隙を狙えるくらいに雄英のヒーロー科は経験を積んでいる。

「上鳴、ナイス!」

瀬呂がテープの個性ですかさず拘束。上鳴の攻撃に巻き込まれないようすぐさまテープを切るのも忘れない。

上鳴・瀬呂と続いたコンビネーション。

その後続いたのは、

「これで決めるぞ! トルクオーバー……レシプロバースト!!」

頼れる委員長、飯田天哉。

個性を暴走させて威力を増すリスクの高い必殺技を使いこの場を決めにかかる。

体に蹴りが突き刺さり、高速移動の勢いがそのまま破壊力となって骸無を襲う。

蹴りの反動で後方にコンクリートの地面を転がる骸無。吹き飛ば

された距離は数メートルにおよぶ。

地面に這いつくばり、身体に土をつけられた。だがしかし、それで終わるほど甘い相手ではない。

「この程度、痛みの中に入らない。ああ、懐かしいなア……こうやっていつも這いつくばって生きてきたんだよな。

……そうだ。こんな体の痛みなんか、*“無個性”* だって這いつくばって生きてきた痛みに及ぶものかッ!!」

突然怒りを顕わにする骸無に、その場の一同は思わず気圧された。いまだにワイヤーで骸無と繋がれたままの上鳴がつぶやく。

「やべえ、なんかスイッチ入っちゃったぞ」

上鳴の言葉の通り少しキレた骸無は、今まで見せていなかった新しい力をもって生徒たちを蹂躪する。

「エレクトロ——ファイヤー!」

瀬呂のテープを力任せに引きちぎり地面に拳を叩き込んだ瞬間、放電が駆け巡った。

先ほどの意趣返しに同じく電撃技をおみまいしたのだ。

広範囲の無差別攻撃に生徒のほとんどが行動不能となった。

一撃で戦況をひっくり返す。

対ヒーロー用兵器の神髄の一つを見せつけたのだ。

「さてと。さつきはずいぶんとやってくれたね?」

「ウエ、ウエウエー!」

「聞いていないぞ、前回には見せていなかった能力か……」

ワット数が許容オーバーシアホ面を晒す上鳴と、骸無との距離が最も近かったせいでもとに攻撃を受けて動けない飯田。

拳を向けて歩み寄る骸無に2人はなすすべもない。

そんな絶体絶命のピンチに、救いの手がおろる。

「やらせねえよ。上鳴、いくらアホになっても飯田を連れて逃げるくらいできるだろ。さつきと逃げろ」

「ウエイ! ウエウエー! (ああ! 任せとけ)」

「くっ、すまない」

2人を守る氷の障壁。

今大会の最優の生徒。轟焦凍だ。

彼の言葉に従って、上鳴はウェイウェイと飯田を運んで骸無から離れていく。

「氷？　そうか、氷は電気の抵抗が高い……。自分だけはうまく防いだみたいだね、轟焦凍。随分と遅い登場だ。お友達は君の踏み台かな？」

毒舌を吐く骸無だが、轟は冷静に言葉を返した。

「囁るなよ。そう言ってられるのも今のうちだ。おまえは俺が倒す」

「ふん、そつちこそ強い言葉で吠えたものだね。まるで弱い犬ほどなんとやらだ」

「そうか……。なら、犬以下だろ。おまえ」

罵倒も半ば無視し、いきなり最大規模の氷結を繰り出す。

視界が氷の山に覆われ、骸無の姿が完全に見えなくなるほどの大規模攻撃。受けてしまえばいかに改造人間と言えどただではすまない。

「この攻撃をするのに仲間を巻き込みかねなかったからな。どんなに多くの個性を持っていても一瞬で凍らされたら意味はねえだろ」

最大規模の氷結を使った反動で半身に霜をつけながらつぶやく轟。

彼の目的は最初からこの最大出力を骸無にぶつけることだったのだ。

以前の戦いで、中途半端な攻撃では無意味だと断じた轟が仲間たちが傷つく中狙った勝利への希望だった。

勝利への執念。逆転への希望。

——そして、それらを打ち砕くために造り出されたのが改人・骸無である。

「なるほど。たしかに狙いはよかったよ。ま、それも当たればの話だけだ」

「なに!?　おまえは……」

「凍ったはずなのに、って?　甘いよ、轟くん」

いつの間にか背後に立つ骸無に驚き、即座に飛びのく轟。

だが、体温の低下で落ちた身体能力では十分な間合いを取ることなどできるはずもなく、右腕のえぐい一撃が轟に突き刺さった。

胃液を吐き散らしながらぶつ飛ばされ、自らが作り出した氷の塊に突っ込んだ衝撃で肺の空気が無理やり空にされる。

気を失いそうになりながらも、轟が膝を突くのを根性で支えて顔を上げれば、骸無がゆうゆうと歩いてくるのが目に入った。

「自分で視界をふさぐなんてナンセンスだよ。ボクは君より早いのは分かっているのにその姿を見失って勝てるわけがないよね。ついでに言えば個性にかまけて動作が大雑把すぎるな。地面から足を離すほど飛びのくとか攻撃も防御も放棄した中途半端な回避だ。ついでに言えば、右足がついてなければ冷気をこちらに伝えることもできない。ダメダメだね。まあ？ 最大出力のあとで氷が出せたかどうかは怪しいところがあるけれどね。いまも寒さで震えてるし。当然、個性も身体能力の一つだから限界も当然あるはずだしね」

ブツブツと嘲笑まじりにダメ出しをしながら近づいてくる骸無。轟は悔しさに歯を食いしばった。

『こんなやつに負けるのか。クソ親父を見返すこともできず、こんなところで』

死が迫るなか、轟の脳裏を過るのは憎い父親の顔だった。

いま、父親から受け継いだ“個性”を使えば助かるかもしれないのに、それでも使わないことを選んでしまう自分。

今更ながら、こじれきった親子関係を自覚して悲しくなった。

父エンデヴァー親からは『オールマイトを超えろ』と言われるばかりで、親子らしい会話はした記憶がない。

だから、父親が必死の形相で自分を守っている理由がなんなのか分からず、ただただ見ているだけしかできなかった。

「焦凍オー！ 何をぼさつとしている!! 相手に隙を見せるな！」

両手から高温の炎を放ち、骸無を牽制するエンデヴァー。

骸無は熱吸収の個性で対処しているが、熱の許容量があるのか回避のために飛び退り距離をとっている。

「親父、なんで俺を助けた？ やっぱ、俺が道具だからか？ オール

マイトを超えるための……」

強烈な一撃をくらって朦朧としていたからだろうか。

轟は場違いにも父親へ質問を投げかけた。

はつきりとした口調で、しかしどこか縋りつくような弱さを含んだ問いかけに、エンデヴァーは首だけを向けて返事を返した。

「こんなときに何を言っている！ いいか、焦凍！ おまえは——」

「敵を前におしやべりか！ ふざけるなよオ、エンデヴァー!!」

「ちいい、邪魔だ！」

エンデヴァーが何かを告げようとするも、骸無が襲い掛かり言葉は半ばにして途切れた。

振り向きざまの炎の迎撃を骸無は右腕で受け止める。

いや、受け止めたわけではない。右腕に吸収した熱を集中させて必殺技の体勢になっている。

空気が焼き焦げているような錯覚を覚えるほど熱を放ち、真つ赤に輝く右腕を振るう。

「うおおおおお！ バニシングウウウ・フィストオーツ！」

「ぬう、おおおおお！」

雄たけびと共に繰り出される灼熱の拳にエンデヴァーも最大出力で迎え撃つ。

灼熱と豪炎がぶつかり合い、コンクリートを溶かすほどの破壊を生み出す。

陽炎が揺らめく戦いの場。

膝をつき、荒い息を吐く骸無と仁王立ちのエンデヴァー。

「大丈夫か、焦凍」

轟に向き直り、安否を確認したエンデヴァー。

無傷の轟を見て安心したような笑みをうかべ、そして膝から崩れ落ちた。

「お、親父……？」

とつさに体を受け止めると、ぬめりと生温かい感触が手に触れた。腹部全体に出血が広がっており、一目で重傷だとわかる傷だ。

その場に体を横たわらせて、父親へ問いかける。

「なんで、なんでこんなことを!」

憎んでいるはずの父親の無残な姿に動揺していることが、自分でも理解できず、叫ぶように言葉を投げかける轟焦凍。

エンデヴァーはいつもの力強い声ではなく、穏やかな声で答えた。「なぜ? 当たり前のことを聞くな。おまえは、俺を超える才能を持った自慢の息子だ。俺を超えるヒーローに……」

おまえが、俺ではなくオールマイトに憧れていることは知っている。

だからこそ、おまえをオールマイトを超えるヒーローにしてやろうと……グフツ」

「もういい、しゃべるな!」

「すまん、焦凍……負けるな……よ」

謝罪の言葉を口にして力尽きたエンデヴァー。

その謝罪が何を指しているのか轟には判断がつかない。

いままでの自分への扱いに関してなのか、それとも脅威を目の前に力及ばず倒れることについてなのか……

「結局何が言いたかったんだよ、クソ親父……」

何ひとつはつきりとせず心の霧は晴れぬままで、力なくつぶやく。

そう、結局なにもわからないままなのだ。父親エンデヴァーの心の内は。

「お別れは済んだかな?」

「親父……」

父親の巨体を抱え呆然とする轟の前に骸無が立つ。

ダメージはあるものの戦闘活動に支障はないらしく、次の一撃を放つ準備はできていた。

そして、その拳を骸無が振り下ろす。

瞬間。

骸無の視界が赤く染まり、後方へ体を吹き飛ばした。

「炎!」

「何一つ、まだ何一つ親父への気持ちに決着は着いていねえ。だが……考えるのもうやめた」



左から炎を吹き出し、骸無に叩きつける。

気持ちの整理はいまだつかずとも、なすべきことのため、わだかまりを今は忘れて炎を解き放った。

これからが轟焦凍の本当の本気。全力全開だ。

氷と炎。相反する力を持った恵まれた個性。

それは骸無、いや、緑谷出久のコンプレックスを刺激するものだった。

「氷に炎……？　今まで使えなかった？　いや、使わなかった？　使わなかった……使わなかっただって!?　ふざけるな!!」

激昂する緑谷出久。

元「無個性」の彼にとって、恵まれた「個性」を自ら封じていた轟の姿勢は許しがたいものには映らない。

彼の事情も決意も覚悟もしらない。ただ、敵として倒す対象となった。

怒りに身を任せ、轟の炎を振り払って右腕を突き出す。

「バーナー・フィンガー!!」

指先から噴出した熱線が、炎の壁を貫き轟に直撃。爆発が巻き起こり、蒸気で周りが見えなくなった。

視界がゼロになった中、骸無の動体センサーが反応する。

「くたばれ!!」

鳴り響く爆音。

2体の身無を倒し、会場へと戻って来た爆豪だ。

すでに一つ戦闘を終え、十分体の温まった状態から放つ最大出力で一直線に骸無を狙う。

「来たか、かつちゃん。でも、動きは見えてるんだよ」

灼熱した右腕で迎撃の構えをとる骸無。だが――

「俺を忘れてんじゃねえよ」

「右腕が!?　くっ、轟焦凍オ！」

右半身に冷気がぶつかり、急激に体温が冷やされる。

先ほどの攻撃をとっさに氷で防いだ轟が右足を踏み出した姿勢で骸無に向き合っているのが見えた。

急激な温度変化にさすがの骸無も動きが鈍る。

その瞬間を爆豪が狙った。

両手の爆破で体の回転を加速し、その勢いで最大火力をぶつける爆

豪の必殺技。

《榴弾砲着弾!!》  
ハウザーインパクト

特大の人間榴弾が直撃する。

ヒーロー科生徒の中でも高火力の2人の攻撃に、骸無も傷を負う。

その姿に、爆豪と轟は息をのんだ。

「デク……てめえ、その腕……」

「ぐうう、《先生》がくれた身体によくも傷を」

上半身の戦闘服はほとんど吹き飛び、マスクの半分が焼け焦げた無残な姿。

だが、なにより目についたのは攻撃を繰り返し、または受け続けた右腕の惨状だ。

あらゆる方向にひしゃげ曲り、肉は裂けて骨が見えている。

しかし、その骨は白ではなく銀色の金属光沢が光を反射していた。

「機械の……腕だ?!」

改人・骸無の身体能力の秘密に轟は絶句する。

腕だけでなく、露わになった上半身にはあちこちに手術痕が残されている。

身体の機械化。それが骸無という改人の秘密の一端であった。

緑谷出久は五体を切り刻まれ、骨を鋼に。

筋肉を、肺を、心臓を、皮膚を、体のあらゆるところを強靱な人工物に造り変えられた。

その体は、もはや兵器だった。

すべては、《オールマイトを超えるため》に……

骸無が傷を負い、生徒側が反撃に出たところでさらに事態は変化する。

ヒーローは遅れてくるものだ。

「私が来た!」

コマンドー・身無たちを倒し、オールマイトがその場に姿を現したのだ。

「オールマイト……特殊改造・訓練をした身無が向かったはずなのに」「ハツハツハ、なめてもらっちゃ困るよ少年。多少苦戦はしたが、全員ちやんとぶつとばしてきたさ」

「チィ、所詮はミスクリエーションか」

高らかに笑うオールマイトに骸無は負けた味方を吐き捨てた。

オールマイトはその様子に苦言を呈して言う。

「仲間のことをそういう風に言うのは感心しないな。事実、彼らは強かった」

「ハハツ、仲間？ 身無なんて成功体ポツという結果から造り出された試作品に過ぎないですよ。我々の技術力は日々進歩しているのだから」  
骸無の言い放つ言葉の中に傲慢さが見て取れ、かつての緑谷出久を思い出してオールマイトは眉をひそめた。

同時に彼をここまで歪めた存在に怒りを抱く。

なんにせよ、この場で彼を取り押さえないことにははじまらない。

「緑谷少年、今日、ここで君を救ける！」

「救ける？ ボクを救けてくれたのはあなたじゃない！」

お互いに拳を構える二人。

そうして踏み出そうとしたタイミングにまた横やりが入った。

「YEAHHH！ オールマイト、民間人の避難と暴れていた化け物たちの鎮圧が完了したぜ」

ヒーロー『プレゼント・マイク』が会場をすでに鎮圧したことを告げた。

その声の後に、次々と手の空いたヒーローたちが応援に駆け付ける。

すでに形勢は逆転。骸無はヒーローに取り囲まれてしまっている。「さあ、少年。諦めておとなしくしたまえ」

「まだ勝った気になるには早いですよ、オールマイト。ボクの力は知っているでしょう？ あなたとボクが本気で戦えばここにいるヒーローの半数は倒せる」

数は不利。身体も右腕が使い物にならない状況でなお、骸無の戦意は衰えない。

被害を出す前に自分が前に出るしかない。

そう、オールマイトが覚悟を決めようとしたとき、一人の生徒が前に躍り出た。

「おい、おまえ！」

「誰？ 雑魚は——」

一言返事をした瞬間に骸無の動きが止まる。

生徒の名前は心操人使<sup>しんそうひとし</sup>。個性は返事をした相手を操る『洗脳』だ。

「オールマイト、あいつを洗脳しました。今のうちに拘束を」

「よくやった、心操少年！」

「ありがとうございます。あ、強い衝撃を与えると洗脳が解けるので気をつけてください」

心操の注意を聞き、ヒーロー数人が特殊な個性を封じる拘束具を取り付けようとそつと骸無に近づく。

ヒーローの一人が骸無に触れようとした瞬間。

周りのヒーロー全員が血をまき散らしながら地面を転がっていた。

「な、なにいい!？」

「そんな、個性は解いてないはずなのに」

驚きの声をあげるオールマイトと心操。

ほかのヒーローたちも突然の惨劇に動けずにいた。

誰もが動けないなか、惨劇を作り出した張本人が口を開く。

『やれやれ。洗脳』とはよい個性を持った生徒がいるね。こんなところで骸無を失うわけにはいかないからな。

さてと。やあ、オールマイト。久しぶりだねえ』

先ほどまでとは明らかに口調の違う骸無。

その正体をオールマイトは直感で感じ取った。

「まさか、貴様は——」

『フッフッフ、そうさ、お察しの通りここには僕がいる。それだけ伝えたら分かるだろう？ それじゃ、ここらへんで失礼するよ。ヒーローの諸君』

「待て！ 貴様は——」

オールマイトの制止を振り切り、暴風の結界でヒーローたちを釘づけにして大跳躍で逃走する骸無。

暴風が晴れた時にはその姿は見えなくなっていた。

こうして波乱の雄英体育祭は幕を閉じた。

ヴィラン連合の鎮圧には成功したものの、その様子は全国に放送されていた。

かくして『脅威を見せつける』というヴィラン連合の目的は達成されたのである。

この事件により、ヴィランの動きは活性化。世間に不安の影を落とすこととなったのである。

## 雄英高校体育祭襲撃事件 アフター

体育祭の襲撃から一週間後。

雄英高校の教師陣が会議室に集まり、警察の塚内警部より事件後の報告を受けていた。

普段ならば当事者の高校教師といえど、機密の保護の観点からわざわざ警察から報告がいくことなどない。

だが、雄英の教師たちは全員がヒーローの資格をもったプロであること。また、状況の悪化から今後協力の必要性が予測されるため報告会の開催となった。

「さあ、報告会をはじめようか」

根津校長の校長の号令により報告会が始まる。

最初の発言者は相澤だ。

「では、私の方から生徒の状況について報告を」

包帯だらけの体でよろよろと立ちあがり、クリップボード片手に報告を始める。

語られる内容は予想通り、あまり良いとは言えない内容であった。

「体育祭の襲撃事件、および前回のUSJと二度に渡る襲撃事件を許してしまった失態から保護者より不安の声があがっています。

すでに一部では転校の手続きを申請してきた親御さんもおられます。

早急に対策をとる姿勢を見せなければ、雄英高校ひいてはヒーローに対する信頼がなくなることにつながりかねません」

「そうだね。この件に関しては警備のシステムの更新に加えて、以前から計画していた全寮制の導入を早めることとしよう。

先生たちみんなには負担がかかるけれど、各クラスの家庭訪問も頼むよ」

相澤の報告を受けて、保護者と生徒の不安を減らすための対策を告げる根津校長。

その言葉に教師陣は頷き、次の議題に移る。

「えー、生徒の不安ということに関してなんです、ヒーロー科の1年

生は職場体験を控えています」

1―B担任のブラドキングが職場体験について発言する。

例年、体育祭の活躍をかんがみてヒーロー事務所より指名が入る職場体験。

しかしながら、襲撃事件の影響を受けて前年に比べて遅れが生じてしまっている。

というのも、ヴィラン活性化によるヒーロー事務所の受け入れ先の減少。また、事務所側が受け入れを許可しても、状況が悪化している状態ではおいそれと大切な生徒を預けることはできない。

そんな事情もあって、職場体験の生徒の希望と事務所の希望両方を学校側で考慮しマッチングを済ませるといいう手間に時間がかかったのだった。

その作業もようやく終わり、職場体験を次週から開始できることを告げてブラドキングの報告は終わった。

去年にはなかった作業が終わり、一段落ついたと教師陣には少し安堵の表情が灯る。

「まったく、ハードでシヴィーなスケジュールだったよな。ヒーローが過労死とか冗談じゃないぜ」

「おまえはラジオの仕事を減らせばいくらか余裕だったろうが。こんな時に合理性に欠ける」

「Hey Hey Hey！ イレイザーヘッド、それは無理ってもんさ。なんせ俺の番組を楽しみにしてくれているリスナーがいるからな！」

ため息を吐く相澤にプレゼントマイクがハイテンションで応えるいつもの風景に穏やかな空気が流れる。

だが、そんな暖かな空気も塚内警部による報告が始まった時から重い空気に変わり始めた。

「それでは、警察を代表して私から捜査結果の報告を。」

まずは会場を襲撃していた改人二種についてですが、脳無と呼ばれた複数個性を持つ異形の改人を身元を判明させるためにDNA検査を行いました」

「それで、結果はどうだったのでしょうか？」

脳無をDNA検査したことを告げる塚内に未だ頭から包帯の取れない痛々しい姿のミッドナイトが尋ねる。

彼女は骸無に倒されてしまったこともあって、対ヒーロー用の改人について強い興味を示していた。

彼女の視線を受け、塚内が詳細を語る。

「はい。彼らを調べた結果、素姓は街の裏路地にいる、いわゆるチンピラと呼ばれているような奴らでした。

しかし、彼らの体から複数の別人のDNAが検出されたことが確認されています。個体によっては4つ以上検出されたものもあります」

「それ、本当に人間なのか？」

「少なくとも人間性は完全に失っています。いろいろ試しましたが、彼らは口がきけないなんてレベルではなく、完全な思考停止状態。無反応でした」

異常な検査結果にオールマイトが思わずつぶやく。

彼だけでなく、他の教師たちも顔をしかめて報告を聞いていた。

「ううむ、やはり複数の個性を使っていたことと関係があるのだろうか」

「その可能性が高いです。脳無の体は全身薬物等でいじくりまわされていることが分かりました。

安っぽい言い方をすれば『複数の“個性”にみあう身体にされた改造人間』といったところでしょうか」

「umm……他人に複数の個性を与えるなんてどんな方法を使ったのか考えたくもないぜ」

行われた非人道的な所業を想像し、全員が顔をしかめる。

一部のワン・フォー・オール機密を知るメンバーたちは、ある存在の影をとらえていた。

なにより、オールマイトは体育祭の時に骸無を通して“ヤツ”と言葉を交わしている。

巨悪の関与は決定的であった。

脳無の報告は終わり、身無の報告に移る。

その内容もまた身の毛のよだつようなおぞましい物だった。



「続いて身無と呼ばれる改人についてですが、彼らの全員が身体の機械化による改造……つまり、サイボーグ化が行われていました」

「サイボーグウ!? そりゃアンビリバーボーだな」

「にわかには信じられませんね。いえ、現実に目の前で起きたことではあるのですが、サイボーグだなんてSFの世界のようです」

サイボーグ化という言葉にマイクと13号は戸惑ったような声をあげた。

人の身体を機械に置き換える手術というものが想像できず、どうにも現実に思えなかったのだ。

「それを言ったらいまや常識となっている『個性』だって昔は空想の産物だったさ。これからは先入観は捨てていかない跟前には進めないよ」

根津校長が場をまとめたことで、浮ついた空気を引き締めた。

常識の通用しない相手なのだ。これから敵対するであろう人物・組織は。

場の雰囲気切り替わったのを見計らって、ケガから復帰したばかりのセメントスが質問を投げかけた。

「それで、彼ら身無の素姓もわかったのですか？ やはりチンピラのような犯罪者でしょうか？」

「いえ、それが……彼らの素姓は行方不明になっていた『無個性』の人ばかりでした。全員ここ2年以内に失踪した方ばかりです」

「行方不明になっていた『無個性』だって？」

身無たちの素姓を聞き、驚きを隠せない教師たち。

オールマイトはとっさに骸無となってしまう緑谷出久のことが思い浮かんだ。

彼らの性別・年齢・地域はバラバラで共通点は『無個性』であること。

骸無のように『複数個性』とサイボーグ化の両立が不可能だったからか、はたまた、単純にサイボーグ化のみでどこまで戦力化できるかの実験だったのか……

その目的は推測するしかないが、骸無のミスクリエーションという

発言からいまだ発展途上であることが予想される。

今後、さらに強力な戦力が投入されることを考えれば実験体にされる犠牲者は増えると思われる。

この日本において一年の行方不明者の数は約10万人にもなると言われている。

果たして、このうちのどれだけがこの件の犠牲者となっているのだろうか……

身無に關しての報告は続く。

「身無ですが、洗脳系の個性を受けた形跡があつたため、同じく洗脳系・心理系の個性持ちに洗脳解除を依頼しました」

「それで、何か情報は得られたのかい？」

「いえ、不可能でした。洗脳を解除した途端、身無は死亡しています」  
死人に口なし。

命よりも情報漏えいが大切という命を軽視した思想が見て取れる処置に、今日何度目かわからない怖気を感じる。

塚内警部からの報告では、洗脳を解除された途端に苦痛に狂って死んだという。

『痛い、体中が痛い！』

『ワタシの身体じゃない。無くなった身体が痛い！』

洗脳を解除された身無はそう言つて死んだという。

“元の身体は既に無い”

話を聞いたヒーローたちには、改人『身無』という名前にはそんな皮肉が込められているような気がしてならなかった。

姿形を異形に変えられ、精神の人間性さえも失つた『脳無』

姿形は人のまま、身体の中身を別物に置き換えられた『身無』

この先新たな改人の出現が予想され、ヴィラン連合の脅威が強まつていく。

ヒーロー側も何か対策が必要だった。

この会議の中で、オールマイトが一つの提案を示すこととなる。

これがヒーロー側の戦力を整えるものとなると同時に、ヴィラン連合との壮絶な戦いが避けられなくなるものとなつていくのだった。

=====  
次章予告(っぽいもの)

「爆豪少年、轟少年、ひとつ提案があるんだが……」

——オールマイト

「兄さんが……ヴィラン連合の改人に殺された

!？」

——飯田天哉

「ハア……徒に力を振りまく犯罪者は粛清する……」

——ステイン

「あなたは邪魔だ。ここで死ね、ヴィラン殺

し！」

——骸無(緑谷出久)

「おまえのやりたいことは本当にそれか？」

——轟焦凍

「てめえじゃねえ！ てめえが人を殺せるはず

がねえ！ デクウウウ！」

——爆豪勝己

〈次章 『ヴィラン紛争・保須三勢力乱戦』編〉

## とある研究員の手記2

G O 1 が来てからというものの、驚きの発見ばかりである。彼の「個性」というものは非常に研究しがいがある。

研究を進める中、彼の「個性」は『引き受ける』ということの副次的なものなのか、薬物や外科手術に対する拒絶反応を抑える効果があることが分かった。

以前の彼のデータには、そのような現象は見受けられなかったことから、「先生から」個性を与えられたことで『引き受ける』個性が強まったか、あるいは個性の与奪を繰り返す中で個性が変質したか……いずれにせよ、この事実は新たな改造人間の計画に役立ったのだ。その計画については以下の通り。

### 『サイボーグ型改人計画』

以前計画されたものの技術的問題から凍結された改造人間計画だ。

技術的問題の大部分は、手術による被検体の拒絶反応リジエクシヨンを抑えることができなかったことにある。

そのため、今回のG O 1の個性の特性を研究することでこの技術的問題を解決できる可能性が見えたことから計画の再始動が決まったわけだ。

この計画の最大のメリットは、以前にも記した通り「戦闘力と思考力の両立」を目指せるほか、強力な改人を作り出すのに「先生」の手を煩わせることがないという点だ。

脳無では、強力な個体にするには先生に個性を複数与えてもらう必要があるため、実質的に量産には「先生」の手が必要不可欠であった。

だが、この計画では強化を外科手術に頼るため、たとえ個性が一つだけだったとしても増強型の個性と同じ力を持った改人を生み出せるのだ。

ヒーローとの戦いにおいて質だけでなく量の確保もこの計画の目的の一つと言える。

計画の試作品第 The First 一号にG O 1を素体として使うこととなった

る。

果たしてうまくいくとよいのだが……

|||||

実験、いや、手術は成功だ。

G01は拒絶反応リジエクシオンを起こすことなくサイボーグ化を果たした。

新たな改人の誕生だ。

この新たな型の改人タイプに“先生”は「骸無」と名付けられた。

「骸無」

この名前にはいったいどのような意味を込められたのか。

『骸むくろは無い』

この改人が敵の前で骸を晒すことは無いという、最強の改人を表しているのだろうか。

私にはどちらかと言えば「死んだとて残る骸は人で無い」という悲しみが先立つような気がする。

既にG01の身体の大部分は機械となっている。

あのような体で、“人間の身体”だといえるのだろうか？

いや、よそう。こんなことを考えたところで益は無い。

今後の計画では、骸無のデータをもとに拒絶反応リジエクシオンを抑える方法を探っていくこととなる。

個性との併用がどれくらい影響を及ぼすかはまだデータ不足であるため、しばらくの間は無個性相手に実験を重ねることとなりそうだ。

ちょうど、以前までの実験で廃人となった無個性は残っている。

素体として再利用するほうが資源の無駄にならずに済むだろう。

ゆくゆくは個性との両立もしていきたいところだ。

## 保須市三勢力乱戦編

### 緑谷出久は保須市にきました プロローグ

雄英体育祭襲撃事件。

ヴィラン連合によって引き起こされたこの事件が世間に与えた影響は非常に大きかった。

組織化したヴィランによるヒーローの祭典襲撃という成功例は、いままでバラバラに動いていたヴィラン達が手を結び集団を作る動きに繋がった。

ある者は力で、ある者は利害で、ある者は思想で。

どんな目的であれ、人は集団になればそれなりに力となる。当然、規模が大きくなればなるほど強大となる。

この動きを受け、ヒーロー側は後れを取ることになってしまった。いままでは少数のヴィランを多数のヒーローが相手にしていたものが、逆に少数で多くのヴィランを相手取らねばならない状況が多くなったのだ。

これはヒーローたちの能力が低いというわけではなく、ヒーロー社会のシステム的な問題が原因だった。

ヒーローたちは基本的に協力しあうものだが、所属事務所が違うため統一された組織にいるわけではない。

必然、連絡を密に取り合うわけではなく、ヴィランの組織的動きに対して遅れをとることになってしまったのだった。

事務所同士の交流を計っているところは当然あるものの、ヒーロー事務所が乱立するヒーロー飽和社会でいったいどれほど事務所同士の連携というものを意識していただろうか。

こうしてヴィランによって壊滅した小さなヒーロー事務所やフリーのヒーローのニュースが世間を煽り、多くのヒーローを抱える大手の事務所に期待と負担が寄せられることとなった。

『インゲニウム ヒーロー事務所』

この街一番の規模を誇る、大手のヒーロー事務所だ。

情勢の悪化を受けていち早く相棒サイドキックの人数を増員し、ヴィランたちへの対応をした事務所の一つだ。

雄英体育祭襲撃事件から一週間と少しばかりしか経っていないが、すでに30名近くの相棒サイドキックを増員している。

インゲニウム所属のヒーローたちによるマンパワーによって組織化したヴィランと戦う日々。

今日もヴィランが暴れていると通報があり、『インゲニウム』自ら出陣して指揮を執っていたのだが――

「嘘だろ……」

サイドキック  
相棒の一人が呆然とつぶやく。

人気の無い路地裏。

アスファルトに広がる血溜り。

むせ返るような鉄錆に似た血の匂い。

暴れていたヴィランたちを鎮圧し、その報告のためにインゲニウムを探していた彼が見つけたのは、血を流し、倒れ伏したインゲニウムの姿だった。

致命傷を受けているのは明らかで、速やかに治療を受けねば危険だ。

であるにも関わらず、彼は動くことができなかった。

なぜなら――

「おまえは、ヴィラン連合の!?!」

目の前には、拳を血で濡らした改人・骸無が立っていたのだから。

先日、その脅威を世間に見せつけた改人を前にしてうかつに行動はできない。

彼は震えそうになる声を必死で張り上げて言葉を投げかける。

「インゲニウムさんをやったのはおまえか?」

対して骸無は問いに答えることなく、背を向けて立ち去っていった。

脅威が目の前からいなくなり、ホツとするのも束の間、慌ててインゲニウムを病院へ運ぶ手配をする。

そうして病院へ運ばれたインゲニウムはそのまま緊急手術に移る。数時間にも及ぶ手術。

その甲斐なく……インゲニウムは死亡した。

そしてその結果は、ちょうど職場体験で兄・インゲニウムの元に来ていた飯田天哉にも知られることとなる。

「兄さんが……ヴィラン連合の改人に殺された!？」

別の場所でパトロールに出ていた飯田は兄の死亡を知らされ愕然とする。

憧れの兄の死亡。

その悲しみにくれた心に次に灯ったのは暗い復讐の炎。

「ヴィラン連合、改人・骸無……おまえは、僕が……殺してやる！」

|||||

——山梨県 某市 グラントリノ事務所 地下トレーニングルーム

「クソジジイがあ……ッ！」

「強<sup>っえ</sup>えな、やっぱり」

息も荒く膝をつく爆豪と轟。

「どうした、限界か受精卵小僧ども」

見下ろすのは古豪『グラントリノ』

特別製のトレーニングルームで二人の修行を見ていたグラントリノはフェーズを次に移行することに決めた。

「まあ、だいぶ基礎もできたことだし、そろそろフェーズ2に移行するとするか」

「フェーズ2? なんでもこいや! 次こそブツ殺してやる!」

グラントリノの言葉に爆豪が吠える。

『やる気は充分。結構、結構。威勢のいい小僧は嫌いじゃねえ』

爆豪の様子にグラントリノはにやりと笑って言う。

「せっかくの職場体験だ。ヴィラン退治くらいやらんともったいないだろう」



「ハッ、上等！」

「ああ、望むところだ」

コスチュームを纏い、ヴィラン退治へ東京へ向かう3人。  
偶然か、必然か。

彼らは事件への渦中へと足を踏み入れることとなる。

|||||

「ギヤアアア！」

断末魔をあげて倒れ伏す身無。

刃を振るい、改人である身無を斬殺してのけたのは、覆面の男・ステイン。

背中の鞘に刃を収めながら彼は苛立ち気につぶやく。

「ハア……徒に力を振りまく犯罪者は肅清する……だが、最近はバカが多すぎて困りものだな……ハア」

ヴィランを殺した彼にまた新たな来客が。

「またおまえか、改人」

音もなく現れた骸無に向き合い、再び柄に手をかけるステイン。

臨戦態勢の彼に骸無はなんの感慨も見せることなく、ただ宣告した。

「あなたは邪魔だ。ここで死ね、ヴィラン殺し」

「信念無き操り人形が、俺を殺せるものか！」  
拳と刃が交差する。

保須市という舞台に役者たちは集う。

ヒーロー、ヴィラン、第三勢力。

三つ巴の戦いが幕を開く。

## 緑谷出久は保須市にきました 前編

雄英体育祭を終えてから一週間。

襲撃後の混乱はあったものの、誰一人欠けることなくI—Aの生徒たちは日々の生活を取り戻していた。

さすがはヒーローの卵といったところであろうか。

そんな彼らに新たなイベントが待ち構えていた。

「えー、社会の状況は混乱しているが、君たちには職場体験をしてもらう」

「職場体験……ヤベ、俺どこなんだろ」

「ウチ、そんなにアピールできなかつたしなあ」

「先生！ 体験先はどうやって決めるのですか？」

相澤から告げられた職場体験の連絡にどよめきが起こる。

ヒーローを目指す生徒にとって、憧れのヒーローと仮とはいえ一緒に働ける職場体験は待ち望んだイベントだ。

むろん、現実的な面でも、職場体験の経験が今後のヒーローとしての活動に大きく影響を与えることも、関心事の一つだろう。

「おまえら、静かにしろ。説明ができん。非合理的だ」

とはいえ、相澤がざわついた教室を許すはずもなく。

ひと睨みして生徒たちを黙らせた。

それだけで静まり返るのは相澤が優秀な教師だからだろう。けっして恐怖政治などではない……はず。

「例年であれば体育祭の活躍や成績でヒーロー事務所から指名が入るところだが、知ってのとおり今年は事情が異なる」

毎年行われる職場体験は、体育祭の様子を見たヒーローたちが自分が良いと思った生徒を指名し、生徒がその中から行き先を決める。

しかし、今年は体育祭がヴィランの襲撃で途中で中止になってしまっている。

そこで雄英教師陣は特別な対応をとることとなった。

「今年は一年生の指名はなしだ。全員あらかじめこちらがオフアールした受け入れ先の事務所から選んでもらう」

「えー、せっかく頑張ったのにー！」

「おい、俺に指名が来てねーはずねーだろ！ ふざけんな！」

「私の希望に合った事務所はあるのかしら？」

全員指名なし。

学校側の思い切った判断に1—Aの生徒たちからは不満と不安の声があがる。

また騒がしくなる教室に相澤がキレそうになったとき、ドアが勢いよく開けられて注目がそちらに集まる。

「はいはい、それぞれ言いたいことはあるでしょうけど、対策はしたから安心しなさい」

ピシッと鞭を鳴らして18禁ヒーロー「ミッドナイト」が入室してきた。

呆氣にとられる皆をよそに、ミッドナイトは教壇に上がって説明を始めた。

「昨年は学校からオフアーをかける事務所は指名が入らなかった生徒用だったけれど、今年は全員ということで大幅にオフアーの数を増やしたわ。

その数、なんと400事務所よ！」

「400!? やっぱ、すげえな英雄高校」

切島がその数に驚き、感心した声を上げる。

その様子に、ミッドナイトは少し報われた気持ちになる。

なにせ昨年はオフアーをかけた受け入れ先は40件。

今年はその10倍もの事務所を用意することになったのだ。その苦労は10倍どころではない。

指名を出した事務所一つ一つに事情を説明し、受け入れ可能か条件を確認し、生徒の体験先の判断のために簡単な説明文を作る。

指名を出した事務所は4ケタを超えており、この作業をしかも時間の限られた中で行うのは殺人的なスケジュールだった。「過労死」の三文字が頭をよぎるくらいには。

ちなみに、彼女の隣にいる合理主義者は学校に愛用寝袋で泊まりこむという手段で乗り越えている。

たしかに効率的だったが、真似したくないと思った教師は彼女だけではなかったが。

「というわけで、『コードネーム』、ヒーロー名を決めてもらおうよー！」

「二胸ふくらむヤツきたああああ!!」

ヒーローネーム考案に湧き上がる。

ヴィランの襲撃があれど、ここには平和な時間がまだ流れていたのだった。

|||||

授業後、受け入れ先の事務所のリストを片手に職場体験の話題で盛り上がる生徒たち。

そんな騒がしい教室を後にする爆豪と轟がいた。

向かった先は仮眠室。

オールマイトがよく利用する、いや、ほぼオールマイト専用に使われた部屋だ。

そう、二人はオールマイトに呼び出されていた。

「やあ、よく来たね。二人とも」

「ウス」

「何の用だよ、オールマイト」

マッスルフォームで出迎えるオールマイトに返事をする轟と爆豪。

席を進められ、真正面から向かい合う。

「君たちを呼び出した理由は職場体験に関わることでね。爆豪少年、轟少年、ひとつ提案があるんだが……」

職場体験先を私の師匠のところで受けてみないか？」

「オールマイトの師匠!？」

オールマイトからの提案に二人そろって驚く。

そのハモリっぷりに爆豪が少しイラツとしたが、なんとか抑えて言葉をつづけた。

「で、どんなヤツなんだ？ あんたの師匠ってのは」

「かつて雄英で一年間だけ教師をしていた、私の担任だった方だ」

「雄英の？ さすがオールマイトの師匠ってところか。だが、なんで

俺たちにそんな提案を？」

轟が疑問を向ける。

オールマイトの師匠に指導を受けるのは願ってもないことだが、なぜ自分たちなのか分からなかったのだ。

その疑問はもつともだと、オールマイトが理由を告げる。

体育祭で活躍し、注目をあびたというのもある。

が、一番の理由は骸無——ヴィラン連合の改造人間と深く関わっていることだ。

USJ襲撃、体育祭襲撃。二度にわたって骸無と戦い生き残った。

そして状況が重なったとはいえ骸無の右腕を破壊して撃退した実績がある。

すぐに脅威となるわけではない、だが、将来性を危険視して狙われる可能性が否定できないのだ。

ついでに言えば、轟はNo. 2ヒーローの息子というネームバリューがあり、現在エンデヴァーが意識不明の重体の今、彼が後継者と目されている。

爆豪は骸無の正体——緑谷出久と浅からぬ因縁があり、骸無本人から個人的に敵意を向けられている。

つまりは、事件に関わった生徒の中で最も狙われる可能性の高い二人を思つての対応である。

「ついでに言えば、私の師匠が君たち二人の活躍を見て言い出したことでもあつてね。ぶっちゃけると、断りきれなかったんだけどね！」

H A H A H A

と、笑うオールマイトであつたが、冷や汗が止まらない様子。

いかにNo. 1ヒーローと言えど、師匠には逆らえないらしい。

「ですが、今回は全員が指名なしで職場体験を受けるということになつています。これは、実質指名を貰つたのと同じではないですか？」

「細げえことはいいだろうが！俺は乗ったぜ。……アイツに勝つにはもつと強くならなきゃならねえんだ」

疑問を口にする轟だったが、爆豪がそれを無視して提案を受け入れ

る。

その様子に轟も、爆豪の「嫌ならてめえは降りろ」という言葉にすぐさま承諾の返事をした。

二人の意思を聞いたオールマイトは満足そうに頷き、

「分かった。師匠にはよろしく言っておこう。」

せつかくのご指名だ……存分にしごかれてくるく……るといいいいい」

『オールマイトが怯えているだ?! いったいどんな人間だ!』

震えながら告げるオールマイトに不安がよぎり、二人は思わず顔を見合わせてしまった。

オールマイトが怯える人物が想像できなかった。

その二人を気にした様子もなく、オールマイトが頼みごとを口にする。

「さて、さきほど轟少年が言った通り、本来なら教師が特定の生徒をひいきするようなことはご法度だ。

だから、私がこの話を持つてきたことは秘密にしておいてくれないか」

二人は即座に承諾。

憧れのオールマイトが自分たちのために骨を折ってくれたのだ。たとえ、拷問を受けたとしても口にすることはないだろう。

墓まで持つていく秘密だった。

……もつとも、「グラントリノ」というマイナーな事務所を二人が同時に選んだことを不審に思った相澤によって、オールマイトは締め上げられ、お説教をくらうのだが。

教室では生徒たちが思い思いに職場体験への希望を語り、笑い合っている。

仲の良い麗日・蛙吹・飯田の三人もまた、希望に満ちた未来を描いて語り合っていた。

「しかし、意外だったな。麗日君がバトラーヒーローのところへ職場

体験とは。だが、その考えは理解できる。いや、むしろ立派な考えだろう」

「そうね。しっかり考えて出した結論なもの。すごいわ、お茶子ちゃん」

「そんな、照れるわあ」

二人からの賛辞に顔を赤くする麗日。照れくささに思わず、話題を変えた。

「私よりも飯田君のほうがすごいと思うよ。『インゲニウムヒーロー事務所』って、本当に大手だもん。お兄さんなんだっけ？」

「そうさ。混乱の続く今の情勢を受けて事務所の規模も拡大しているらしい。うむ、弟として誇らしいな」

自慢の兄について語る飯田はいつもより輝いて見えて、女子二人は思わず笑ってしまった。

「飯田ちゃん、本当に好きなのね。お兄さんのこと」

「ああ、僕の誇りさー」

蛙吹の言葉に飯田は胸を張って言う。

——その後待つ、兄の運命を、その時はまだ知らなかった。

|||||

職場体験当日。

飯田は兄「インゲニウム」と共に東京保須市にてパトロールに出かけていた。

兄と共に仕事ができるということもあつて気になることがあればすぐに質問を投げかける飯田。

その勉強熱心な弟に、兄インゲニウムもはりきって答えてやることにした。

「よし、熱心なお前のためにちよつと詳しく解説してやろう。

基本的にヒーローは依頼が来るのを待てることが多いんだが、こうしてパトロールに出ることも仕事の一つだ。なぜだかわかるか？」

「ヒーローがパトロールすることで犯罪の抑止になるからではないのか？ ヒーローの目の前でわざわざ犯罪を犯そうとするものなどないだろう」

「その通りだ」

弟の返事に満足そうに頷くインゲンウム。

ついでに実際に現場に出ている身としての意見を交えて解説を続ける。

「パトロールが犯罪の抑止につながるのはいま言った通りだ。それに、最近はいらんが活発化してきたことからその重要性が上がってきたからなあ」

「なるほど。事務所でスケジュールを確認したときにいつも誰かがパトロールに出ていることになっていたのはそういうわけか」

ポンと手を打って納得した様子の弟に、兄は仮面の下で笑みを浮かべた。

『自分のスケジュールだけでなく、他人のスケジュールまでしっかりみているとは、我が弟ながら生真面目な奴だ』

そんな弟のために、ますます詳しく解説をしてやりたくなった。

「ああ、だがいらんが活発化してパトロールも危険が上がった。一人でパトロールをしていたヒーローが集団のいらんにもまれてやられたって話も出てきてなあ」

「なに、ヒーローが!? しかし、パトロールは大切だ。なくすわけにはいかない」

「そう、だからうちの事務所ではツーマンセル以上でチームを組んで行動させている。まあ、自分で言うのもなんだが、大手の事務所だからできることだな」

チームで動くことで、複数人の敵に対処する。

当たり前と言えば当たり前前の考えだが、それだけに有効に違いない。

二人以上ならば、最悪片方が援軍を呼びに行くという手段も取れる。

なんだかんだといつても、やはり数は力なのだ。



「しかし、少人数の事務所やフリーのヒーローはどうするのだ？」  
「んー、各ヒーローによつて様々だけど、もっぱら事務所同士での連携が多いな。ただ、最近では事務所の合併・吸収もでてきたよ。」

フリーもどこかに所属しようとする動きが多いな。うちに新しく入った相棒サイドキックも必要があるからだけでなく、相手から問い合わせがきて採用したものもあるくらいだ」

急に雇用が増えたせいで、一時期は総務が死にそうになっていたなあ。履歴書の山に埋もれて。」

面接地獄を思い出して遠い目になるインゲニウム。

面接はする方もされる方も大変だったりするのだ。受ける方は一度だけだが、面接官は何度も面接を行うのだ。

ついでに言うのと、下手なことを聞くと圧迫とか言われる時代だからして。」

「そうか。そこまでヒーローが危機感を持つほどヴィランが活発化しているのか。いや、それだけなのか？」

兄の解説に理解を示しつつも、どこか納得しきれない飯田。

その様子にインゲニウムは解説を追加する。

「鋭いな、天哉。ヒーローが逆に襲われて困るのは市民の皆さんだ。それは分かるな？」

治安を守るヒーローが負ける姿は市民に不安を与える、だからヒーローは負けるわけにはいかない。で、集団化したヴィランに負けないためにはどうするかっていうと……」

「実力はすぐにはつかないが、結束はすぐできる……ということか」

「そういうことさ。まあ、それでも市民の不安はなくならなくてね。」

ヒーローが頼りにならないー、って、ことで『自警団』ヴィンランテとして動き出す人もいて大変なのさ」

自警団……超常黎明期、個性を使った犯罪者に対し、同じく個性を使い無償で戦った人々。ヒーローの源流。ルーツ

“ヒーロー”が国家によって制度化された今では、れっきとした犯罪者であり、少数しかいない化石のような存在であった。

「ヒーローが頼りないから自分たちが、という考えは分からなくもな

いいし、ヒーローを目指すものとして反省しなければならない。だが、法を犯していることは違くないから止めなければならない」

「ヒーローと違って行動の規範となる法が存在しないからね。刑法も無視して個人の判断基準で活動するから、その行動が過激化しやすいのも怖いところさ。」

ぶつちやけ、法を無視して犯罪者を裁くのは私刑リンチ以外の何物でもないよ」

自警団とヴィランの争いは、あくまで逮捕を目的とするヒーローと違い、容易く殺し合いに発展するのだ。

裏社会で鉄火場を渡り歩くヴィランはもちろん、自警団側も実は戦える人物が多い。

このヒーロー飽和社会、ヒーロー科を卒業してもヒーローになれなかった“卒業生”たちは多く、また、そもそもヒーロー科の厳しさに諦めて転科する人も多くいる。

これらの人々は普通の一般人として生活していたり、ヴィランになつてしまつていたりするわけだ。

「そんなわけで、自警団が改めて注目され始めてきているのさ。有名どころで言えば……『ナツクルダスター』とか『苦労マン』が有名かなあ。あ、最近だと『ヴィラン殺し』なんかも名前がよく挙がるね」「『ヴィラン殺し』!? ずいぶん物騒な名前だな」

聞くからに危険そうな異名『ヴィラン殺し』に、飯田は眉をひそめる。

兄に詳しく聞けば、名の通りヴィランを殺して回っている自警団だという。

聞くところによると、刃物を複数扱う覆面の男で、個性は不明。『ステイン』を名乗っている。

戦闘能力も高く、複数のヴィラン相手に無傷で勝利したとの情報もあり、ステインによるものと思われる“身無”の斬殺死体も発見されている。

分かっていることを並べただけでも、普通の自警団とは一線を画すことができる。

殺害という過激な手段で容赦なく犯罪者を断罪する姿が、ヒーロー不信の一部の人々から支持を受けている自警団。

それが『ヴィラン殺し』『ステイン』だという。

飯田はその話を聞き、仮面の下で顔をしかめた。

『たとえ相手が犯罪者であろうとも、殺害や私刑は犯罪だ。それが一部とはいえ市民に支持されるなど……いや、それもヒーローへの不信が招いたこと。皆が信じられるヒーローを目指し頑張らねば』

そうやる気を燃やす飯田の耳のインカムに通信が入る。

『二丁目の商店街で複数のヴィランによる集団強盗事件発生。近くに  
いるヒーローは至急現場に向かってください』

「了解。インゲニウム、すぐに現場に向かう。さあ、天哉、事件だ！」

ついてこられるか？」

「もちろんだ、兄さん！」

「いい返事だな。だが、無理はするなよ！」

事件現場へ、自慢の個性を使って駆け出す二人。

この後、ヴィランとの戦いの中で兄と別れた飯田。

彼が兄と再び会えたのは病院の中。物言わぬ亡骸となった姿であつた。

インゲニウムの殺害現場で目撃された容疑者は、改人・骸無。

「骸無……おまえは、俺が殺してやる！」

飯田の胸に、骸無への復讐の火が燃える。

## 緑谷出久は保須市にきました 後編

—— グラントリノヒーロー事務所 地下

「どうした？ それで終わりか、受精卵小僧ども」

壁に張り付き見下ろす熟練のヒーロー、グラントリノ。

「くっ、強<sup>っえ</sup>えな」

「チツ、クソが！」

見下ろした先には息も絶え絶えに膝をつく轟と爆豪の姿があった。

現在、職業体験三日目。

事務所地下にある特別訓練ルームにて実戦形式の訓練を受け続けていた二人は、過去に戻って職業体験初日の自分たちを殴りたい気持ちでいっぱいだった。

なんで見た目で判断なんかしてしまったのか。

『ああ？ なんだこのじじい』

『誰だ君たちは!?!』

『なあ、大丈夫なのか、これ』

ファーストコンタクトの会話がこれだ。

認知症の老人にしか見えなかったグラントリノだったが、その後に案内された地下訓練ルームに入ってから人は人が変わったようだった。

スパルタ訓練である。

身体も個性の使い方も拙いものならともかく、爆豪・轟の二人は技術・身体ともに才能に溢れているため必然的に訓練は厳しいものになった。

奇しくも憧れのオールマイトと同じく「ひたすら実践訓練でゲロを吐かせられる」羽目になっていた。

こんなことが共通の体験になったからといって喜べるのはバカがつくほどのオールマイトファンくらいのもだろう。

「まだだ。とっとと続けんぞ！ ブツ殺してやる！」

「このくらいで止まってられねえ。もう一本お願いします」  
戦意を露わにする二人。

グラントリノはそれをいったんたしなめた。

「いいや、これ以上同じ戦法の奴と戦うと変なクセがつく。フェーズ2に移行だ」

「フェーズ2?」

「つてことは?」

「職場体験……つーわけで、いざ敵退治だ!」

ニヤリと笑うグラントリノ。

彼らが向かう先は東京。

その途中には、保須市が……波乱の舞台が待ち構えていた。

|||||

——保須市

兄の葬儀を終えた飯田は職業体験先、保須市に舞い戻っていた。

インゲニウムの事務所はサイドキックたちによって何とか運営されており、飯田の面倒も事務所のNO.1サイドキックに見てもらっている。

街のパトロール中にサイドキック筆頭「ランドスピナー」が飯田に話しかける。

「天哉くん。君が戻って来た理由はなんとなく察している」

「……はい」

「そのうえで言わなければならない。骸無への復讐を考えているのならやめろ」

兄の仇のため、復讐のために戻って来た飯田に真っ向から反対する言葉を告げる。

ヒーローは私怨で動いてはならない。

ヒーローには逮捕や刑罰を執行する権限はない。

ヒーローの活動が私刑となってはならない。

もしそれを行動に移すならば、重い罪となる。

だが、そんな言葉は飯田にとってはとうに理解している言葉だ。

それでも、気持ちを抑えることができない。

復讐、敵討ち。

このふつつつと湧き上がる憎悪の気持ちはどこにぶつけるのか?

そんなもの、決まっている！  
そして、その機会はすぐ訪れた。

|||||

ビルの上から保須市を見下ろす骸無。

彼に与えられた任務は一つ。

「ヴィラン殺し」ステインの抹殺だ。

『「ヴィラン殺し」。ヤツは連合の邪魔になる。

あいつのカリスマは必ずほかの奴らに影響を与えるはずだ。俺たちの影響力を邪魔する存在は消しておくにかぎる。

いいか、いまの世の中のはぐれモノたちにとって俺たちが一番の存在なんだ。そんな状況でほかのカリスマなんか邪魔でしかないだろう？

だから消せ！ ヤツを抹殺しろ、骸無』

死柄杓からの指令を思い出し、顔を上げる。

任務開始だ。

手を振り上げ、脳無たちに指示を送る。

6体の脳無が街に放たれ、無差別に破壊活動を開始する。

騒ぎが起こればヤツはそれに乗じて活動をするはず。

その機を逃さず、ステインを抹殺する。それが今回の任務だ。

・

・

・

・

——江向通り4—2—10 細道

街の一角で炎が上がる。

ステインと骸無がその場で対峙していた。

「またおまえか、人形」

「任務だ。覚悟しろ、『ヴィラン殺し』」

臨戦態勢の二人。

その間に新たな影が飛び出してきた。

「うおおおー！」

「チッ、誰だ!？」

エンジン音を響かせ飛び蹴りを骸無に浴びせる。

が、改造人間として常人離れした反射神経を持つ骸無は容易く反応して、逆にカウンターの一撃をくらわす。

「ぐううー!」

「その顔、君は……雄英の」

ヘルメットが外れ、素顔が露わになる。

飛び込んできたのは飯田天哉。骸無へ隠すことなく敵意を向ける。

「見つけたぞ改人! こんなに早く見つかるとはな!!」

「学生が……なぜボクを?」

雄英の生徒がなぜこの場にいるのかわからず疑問を投げかける骸無。

「僕は……! おまえにやられたヒーローの弟だ!! 最高に立派な兄ヒーローさんの弟だ!!」

全霊を込めた叫び。

そのの応対は冷淡なものだった。

「ボクが倒したヒーロー? そんなものいちいち覚えていないよ」

敬愛する兄を路傍の石のように扱われ、悔しさと怒りで唇をかみしめる飯田。

兄は、覚えるまでもないということか。

兄は、ヤツの中でこんなにも軽い存在だったのか!

「では聞け、犯罪者。僕の名を生涯忘れるな!!」

『インゲニウム』

おまえを倒すヒーローの名だ!!」

怒りの表情で告げる飯田。

そして骸無と向かい合ったまま背後にいるステインに声をかける。

「ヴィラン殺しだな。アイツを倒すのを手伝ってくれ。あいつは許しておけない!」

ステインに共闘をもちかける。

ヒーローではない者と共に戦う。

本来ならばヒーローとしてありえざる選択。憎しみに染まった飯

田はそれを選んでしまった。

そして、その姿を見たステインは――

「ハア……贗物……」

怖気を感じて本能的に身をひねる飯田。

次の瞬間に左肩に熱を感じ苦痛に呻く。刃が突き刺さっている。

「な、なにを!？」

「目先の憎しみに捉われ私欲を満たそうなどと……ヒーローから最も程遠い行為だ。ハア……」

思わぬ攻撃に目を見開く。

そのあとに続けられたステインの言葉にさらに驚愕する。

「兄と同じだ。ヒーローを歪める贗物……社会のガンだ」

「兄さんど？ 何を言っている……まさか、まさか!？」

ステインの言葉から一つの事実にとどり着く。

そう、兄を殺したのは……

「死イねえええ!!」

膠着した一瞬に新たな乱入者が爆発音と共に現れた。

一直線に骸無へ向かう人影。

「しつこいなあ、かつちゃん。また?」

「スカしてんじゃねえぞ! クソナード!!」

「今はキミを相手してる暇はないんだよ」

接触直後から戦闘になる爆豪と骸無。

爆豪の相手をしつつもステインを狙う骸無だが、グラントリノとの特訓を経て動きがさらに洗練された爆豪を引き離すことができず苦戦する。

同時にステインと飯田の間に氷壁が出現し、さらにステインを骸無と爆豪のほうへと追いやった。

「おい、大丈夫か。委員長」

「轟くん、なんでここに!？」

いったん飯田の安全を確保した轟が声をかけ、質問に答え始めた。

「東京に移動中に巻き込まれたんだ。ここに来たのは爆豪が骸無あいつの炎を見つけたからだ。……ほとんど、あいつの勘みてえなものだけど



な」

新幹線で移動中に脳無の襲撃に遭遇。

脳無の姿をみた爆豪が、「骸無あいつがいる」と飛び出して今に至るとい  
う。

もはや超常染みた幼馴染の因縁だが、結果的にこの場に間に合った  
のだから文句を言うものではないだろう。

それに……と、轟が告げた言葉に飯田はさらに驚かされた。

「爆豪あいつは分かってたみたいだぞ。ヒーロー殺しの正体が」

「それは、どういうことなんだ？」

体育祭以来、爆豪はヴィラン連合が起こしたと思われる事件の  
ニュースを集めていたという。

特に骸無の関わる事件を重点的に集めていた中で、爆豪が気になっ  
たのがいくつかのヒーローの殺害事件。

それらの被害者たちの特徴に気になったのだ。

「相変わらず似合わねえ恰好だなア、デクウ！」

「またその名前で！ なめるなよ！ ボクはもうヴィラン連合の一員  
だ！」

戦いながら叫ぶ二人。

二人だけでなくステインも交えた三つ巴の戦いはめまぐるしく状  
況が入れ替わる。

そんななかで二人は会話を続けていた。

「ハッ、人殺しもできないようなチキンが一端の悪党気取りかよ！」

「かつちゃん、ニュースを見てないの？ ボクが何してきたか知って  
いるだろ？」

暗に人殺しの経験をほのめかす骸無。

だが、爆豪は確信をもってそれを否定する。

「てめえじゃねえ！ てめえが人を殺せるはずがねえ！ デクウウウ  
！」

事件の情報を集めていた爆豪が注目したのは死亡したヒーローの  
死因だ。

ヴィラン連合に殺されたと思われるヒーローたちの死因は皆刃物による失血死だった。

だが、骸無との交戦経験のある爆豪は骸無が武器を使ったということが疑問だったのだ。

骸無自身も気が付いているか分からないが、複数の個性を使いながらも戦いのスタイルはオールマイトを意識したもの、拳を使ったスタイルだ。

狂がつくほどのオールマイトのフォローだった緑谷出久が、いままら戦い方を変えるとは爆豪は信じられなかった。

そうして疑問を持った爆豪が調べた結果、犯人として拳がったのは殺害方法が似ている「ヴィラン殺し」、ステインだった。

「つてのが爆豪から聞いたことなんだが。なんだかんだで頭いいよなあいつ」

爆豪の推理を語った轟は飯田に視線を向ける。

「そうか……奴が兄さんを……ッ！」

飯田の様子に危うさを、かつて復讐しか頭になかった自分と同じものを感じた轟は思わず声をかけた。

「なあ、委員長。何をするつもりなんだ？」

「何を？ 決まっているだろう！ ステインを、ヤツを殺して兄さんの仇をとる！」

復讐を口にする飯田。その目を見た轟は思う。

これは、だめだな、と。

「そうか。なあ、おまえがやりたいことは本当にそれか？」

「どういう意味だ？ 轟くん！」

轟の言葉の意味するところが分からず、聞き返す。

自分でも言葉が足りないと思ったのだろう、一言謝ってから言い直して聞いた。

「それ、おまえがヒーローとしてやりたいことなのか？ インゲニウムの名前を使ってやりたいことなのか？」

「ッ!! それは……」

兄の名を出され、動揺が走る飯田。

立ち尽くす飯田を離れ、轟は爆豪の援護に向かう。

「見失うなよ。おまえがなりたい『ヒーロー』の姿を」

去り際に忠告をしていく。

父への復讐心で理想を見失った自分を思い出してか少し寂しげに告げた。

父への確執を抱えながらも、ヒーローとしての義務を果たした父にならって左を使うことを決めた轟からのアドバイスだった。

「兄の名を使つての……復讐……」

兄から受け継いだ名で、兄の仇を殺害して復讐を遂げる。

それは、兄の望んだ姿だろうか？ 自分が憧れたヒーローの姿だろうか？

その答えは――

・

・

・

・

爆豪、骸無、ステインの三つ巴の戦いは一進一退を続けていた。

互いが互いを牽制し、決定打を打ち込めない状況。

そんな膠着が崩れたのは爆豪からだ。

改造人間となりその身を兵器と化した骸無。

自身の思想のために殺人技術を磨いたステイン。

この両者に比べれば、いくら才能があるとはいえまだ高校一年生でしかない爆豪が致命的な隙を晒してしまうのは当然だった。

「ハア……集中を切らすな。動きに無駄ができたぞ」

「チツ、クソがあー！」

つい大振りとなつてしまった攻撃の隙間にステインの刃が迫る。

刃が爆豪に届くかと思ったその瞬間に、ステインは危険を感じて飛びのいた。

一拍あとに炎が通り過ぎる。

轟の援護が間に合ったのだ。

「大丈夫か、爆豪?」

「遅え! 何してやがった!!」

悪態をつきながらも即座に連携をとる爆豪。

グラントリノの元での二日間の訓練がそこに見て取れた。

「3対1……ハア……甘くはないな」

「轟焦凍。厄介だな」

ヒーローサイドの援軍に警戒を強める骸無とステイン。

その時に骸無へ何者かが武器を投げて攻撃を仕掛けてきた。

即座に反応して躲す骸無。

「誰だ!？」

「そこまでにしてもらおうか、改人。我々は自警団『ファースト・オー

ダー』。墮落したヒーローに代わり悪を裁く者だ」

「自警団? 化石みたいな連中がいまさら何を!!」

統一されたマスクをかぶり、それぞれ武器を持つファースト・オー

ダーのメンバーたち。

そのうちの一人がステインに近づき、頭を垂れる。

「『ヴィラン殺し』ステイン様。お助けに参りました」

「ハア……なんだ、貴様らは?」

「我々はあなたの思想に賛同するものです。あなたの様に悪を排除し、墮落したヒーローを裁くために集まった者たちです」

自警団『ファースト・オーダー』

「『ヴィラン殺し』として名が広まったステインを調べるうちにそ

の思想に染まり、信奉者となったのが彼らだ。

彼らはヒーローたちとヴィラン連合が争う今が世に出る好機と、姿

を現したのだった。

「ハッ、ヴィランだろうがヴィジランテだろうが、ブツ殺すことには変

わりねえだろうが!」

「だが、人数に差がありすぎる。一旦引くべきだ」

「バカかてめえは! すんなり引かせてもらえそうに見えんのか?」

「ああ!？」

悪くなる状況にヒーローサイドの二人は覚悟を決めた。

最悪、囲まれて袋にされるかもしれない。

そんな状況を変えたのは、先ほどまで復讐に捉われていたはずの飯田だった。

「待たせた、二人とも。ヒーローの応援を連れてきた！」

「全員動くな！　『インゲニウムヒーロー事務所』だ！　おとなしくしろお！」

冷静さを取り戻した飯田が、あの後、やったことは応援のヒーローを呼ぶことだった。

そしてその判断はまさに爆豪と轟を救ったのだ。

ヒーローと自警団の二つの勢力に挟まれた骸無。

自分の戦闘力なら相手できないこともないが……

判断に迷っていると、ヘルメットに備え付けられた機器に通信が入った。

『骸無、タイムオーバーだ。撤退しろ』

「了解。死柄木クン」

死柄木からの撤退命令に従い、即座に離脱する骸無。

タイミングを同じくして、ファースト・オーダーも離脱を開始。

骸無との戦闘をして疲弊していたヒーロー側も追撃を断念。

こうして保須市で起こった、ヒーロー・ヴィラン・自警団の三つ巴の戦いは幕を閉じた。

だが、それぞれ指導者<sup>カリスマ</sup>を得た各勢力は抗争を激しくしていく。

<sup>オールマイト</sup>平和の時代……その終わりの始まりが見えてきたのだった。

緑谷出久は保須市にきました アフター

く爆豪

朝のトレーニングでかいた汗をシャワーで洗い流し、一息つく爆豪。

グラントリノに課せられたトレーニングはハードであったものの、もともとストイックな爆豪にとって苦痛に感じることはなかった。

むしろ、直接指導を受けて厳しくしてもらった方がありがたいくらいだ。

保須市での事件に関わった結果、無資格で個性使用による戦闘行為を行った責任を問われて、指導者であるグラントリノに半年の教育権の剥奪が言い渡された。

その結果、爆豪はグラントリノの指導を受けられなくなり、こうして与えられたメニューをこなす自主トレーニングをして職場体験の期間を過ごすこととなったのだ。

ある種の謹慎に近い措置だが、かなり温情をかけられたものといえる。もともと、当の本人には不満しかないようであるが。

朝食を撮りつつ眺めるテレビのニュース番組。

話題が切り替わり、保須市の事件が取り上げられた。

『……故人はすべて逮捕され、事件は収拾を迎えました。いやあ、物的な被害は大きかったですが、人的被害がほとんど無かったのは不幸中の幸いですね。宮城さん』

『そうですね。今回の事件は死者がでてもおかしくないところをヒーローたちがよくやったと思います。』

ただ、この裏には自警団ウイザランテの活躍があったことも忘れてはいけません。』

女子アナのフリを受けて片角の熟練キャスター宮城がコメントをつなぐ。

『今回、同時多発的に起きた無差別襲撃事件にヒーローたちは後手にまわってしまいました。その手の回らなかつた部分を市民による自発的な治安活動によって補われた……という事実があります』

テレビの画面にはオールマイトをモチーフにしたパーカーを着た青年と、露出の多い衣装を身に纏った少女が市民の避難誘導をしている姿が映っていた。

そのほかにも個性を使い脳無の攻撃を防ぐ者や増強型の個性なのか殴りかかる者などヒーローではない者たちがヒーローのように活動する姿がテロップとともに流れた。

映像が終わり、コメンテーターたちが意見を交わしあう。

『いやー、素晴らしい！ 危険を顧みずに人のために活動する。資格はありませんがまさにヒーローでしょ、これは』

『いやいや、個性の無許可使用は違法でしょ？ 手放して褒められることじゃないですよ』

『あなたねえ、悪いことしてるならともかく、人助けだよ？ 人助け。良いことをして責められるのはどうかと思うよ、僕は！』

『いやいや、そうですね！ 問題なのはその“良いこと”が法律違反ってことでしてね。どうせなら彼らの行動を合法化するべきじゃないですかね？』

『いいねー！ そうなったらヒーローより活躍しそうじゃない』

最近ヒーローって頼りないし！

という、ハットをかぶったコメンテーターの言葉に画面の向こうで笑い声がおきる。

「……ブツ殺すぞ、この野郎」

現場のヒーローの苦勞も知らずにいい加減なコメントをするコメンテーターに苛立つ爆豪。

本人が目の前にいたら爆破してやるといわんばかりのヴィラン顔でテレビを睨みつける。

そんな爆豪の溜飲を下げたのが宮城キャスターのコメントだ。

『みなさん、自警団ヴィジランテの良い面だけ取り上げていますが、悪い面も注目しなければなりません』

『どんな問題があるのでしょうか？』

『はい、彼らはヒーローと違い法律ではなく彼らの“正義感”、つまり、独自のルールの下で活動しているわけです。法律と違い明確な基

準がないわけですから、彼らの活動は容易く過激化します。

最悪、犯罪者の殺害を正当化して動きかねません』

『殺害……穏やかじゃないですね』

『そうです。彼らの考えだけで殺すかどうかの判断が決まるわけですから、その攻撃性がいつ我々に向かうかわからない怖さがあります』

『そもそもヒーロー制度は——』

テレビの向こうで白熱した議論が続けられる。

それを横目に爆豪はぼそりとつぶやいた。

「ヴィンランテ自警団なんぞ関係ねえ。俺が強くなればいいだけだ」

どんな状況になろうとも爆豪の芯はブレない。目指すものはいつも一つだ。

誰にも負けない、最高のヒーローだ。

そしていつか……あの幼馴染を……

く飯田く

兄の遺影の前で手を合わせる飯田。

その心中で思うのは兄への謝罪の言葉だった。

『すまない兄さん。俺は危うく兄さんの名を汚すところだった』

兄の仇を討つために復讐を志す。

そんな物語は多くの人の共感を得ることだろう。

だが、ヒーローを、兄の名を継ぐことを目指す自分が選んではいけない道だった。

その方法も、ヒーローとして兄を殺した犯人を捕まえるというならともかく、人殺しヴィラン殺しと協力しようとしたのは完全にアウトだ。

法を守らねばならないヒーローが、法律よりも復讐心を優先する。

その姿は憧れる「ヒーロー」とはまったくかけ離れてしまっていた。

「今はまだ兄さんのヒーローネームを継ぐことはできない。だが、いつか……その時まで見守っていてくれ、兄さん」

自分の未熟さを痛感した今回の事件。

だからここから、改めて自分の憧れたヒーローを目指す。

そう、兄に誓うのだった。



く轟く

病院のエレベーターのボタンを押す。

入院している家族のお見舞いのために、轟は病院を訪れていた。

お見舞いの品は特になく手ぶらで。

入院している家族は花を愛でるような性格でもなく、かといって食べ物も今は受け付けない状態だ。

そもそもとして、入院しているその家族へ物を贈りたいと轟本人が思えないのが一番の理由だったりするのだが。

病室に着き、ノックをする。

中から意外にも女性の返事が聞こえて驚いてドアを開ける。

声の主は入院服姿の女性。自身の母親だった。

「……来てたんだな」

「ええ。私はいまはすることもないから」

見舞客用の丸椅子に座る母に話しかける轟。

長年の確執を感じさせない穏やかな会話だ。

「そうか。体は大丈夫なのか？ 無理してないよな？」

「大丈夫よ。私より心配ならこの人にしてあげて」

そう言つて視線を向ける先には夫のエンデヴァーに向けられていた。

No. 2 ヒーロー「エンデヴァー」

事件解決数史上最多を誇る偉大なヒーローは雄英体育祭で重傷を負つて以来、意識不明のままであった。

「親父は相変わらずなのか？」

「全然目を覚まさないわ。あんなに元気だったあの人がこんな風になるなんて……夢を見てるんじゃないかと思つてしまふわね」

父の様子を問えば、悲しそうに返事をする母。

その姿を見て轟は複雑な感情を抱く。

あれだけ酷い扱いを受けていながら、いまだに母は父のことを愛している。

その様子を肌で感じて、轟は自分が父親に向けていた怒りや憎悪が本当に正しかったのかわからなくなる。

父と母の間の、自分のわからない絆が存在していて、その二人の関係は自分が考えられないような形だったのかもしれない。

そんな考えがよぎる轟だった。

だからと言ってエンデヴァーが自分と母にしたことを許せるかと言えば別問題で、相変わらずエンデヴァーの人格は有体に言っていてクズだと思っっているし軽蔑している。

しかし、前とは違った部分がある。

人格が認められないからといって、エンデヴァーのすべてを否定することはやめたのだ。

『本当のヒーローは好き嫌い物事を判断しない』

轟が最近気が付いた事実だ。

クズな人格のエンデヴァーも、大嫌いだと公言してはばからないオールマイトとも仕事の場では全力で協力していた。

そこに一切の手抜きはない。いつでも全力で事件にあたるのがエンデヴァーだった。

ヴィランが相手だろうと、救助者を前にしても、事務所の運営にしても、すべてに対して全力だった。

ともすれば、そのエンデヴァーの全力をもつてしても越せない壁がオールマイトだったのではないだろうか。

その結果、自分の息子にオールマイトを超えさせることに全力を注いだのだとしたら……

『俺も人のことは言えねえが、随分と不器用な生き方だな』

父親の気持ちを想像して心の中でため息を吐く。

この男、家族にも自分の心の内を語ったことなどなかった気がする。

受け入れてくれるか分からないが、目が覚めたら会話が必要だと轟はしみじみと思うのだった。

「ねえ、焦凍。この前の職場体験で事件に巻き込まれたというのは本

当なの？」

父について思いをはせていると、母が心配そうに前回の事件について尋ねてきた。

本当のところ、巻き込まれたというよりは自分から関わりに入ったのだが、わざわざそれを告げて心労を増やすこともないだろうとぼやかして返事をする。

「本当だ。だが、周りにヒーローも多くいたからそこまで危険でもなかったな」

「でも……おまえの側にいつもヒーローがいるとは限らないでしょう？」

「心配しすぎだ、母さん。雄英でも訓練は毎日受けているし、腹立たしいが親父にガキの頃からしごかれた分だけ同年代より経験も積んでいる。だからそう簡単にやられねえよ……腹立たしいが」

心配する母を安心させるため、嫌いな父親のことも持ち出す轟。

よっほど嫌だったのか二回も「腹立たしい」を使っているところが轟の本心が見て取れるが。

「そうね。おまえがヒーローになるために頑張っているのは知っているわ。でもね、それでも心配になるのが母親なの」

エンデヴァーに向けていた目を轟に合わせ、真剣な表情で言う。

「私と同じ病棟の階にいるお母さんなんですけど、息子さんが一年前くらいに急に行方不明になってしまったそうなんですって。

いなくなってしまった息子さんのことが心配で心配で、不安で不安で心が病気になってしまったの」

子供への想いだけで、心が壊れる。それが母親なのだと訴える。だからね、と言葉を続ける。

「何があっても無事に帰って来て、焦凍」

不安に揺れる母の目を見て轟は強く頷く。

「ああ、約束する。絶対に無事に母さんのところに帰ってくるさ」  
幼少のころ守れなかった母親の心を守るように。

そう誓う轟だった。

緑谷出久は保須市にきました アフター ダークサイド

——ヴィラン連合 アジトの一つ

革張りのクッションのきいたチェアにゆったりと腰掛けるオール・フォー・ワン。

その目の前にはヘルメットを外した骸無——緑谷出久が膝をついて頭を垂れていた。

「また失敗したね、骸無。また君は出来なかった」

「……申し訳ございません」

静かな声で叱責するオール・フォー・ワン。

その声には慈悲や容赦といったものは含まれていない。

「雄英高校、体育祭、そして、今度の保須市……3回だ。3回も機会を与えられておきながら一つも目的を達成できていない。

いいかい、骸無。君の役割は僕たちの敵を排除する殺人機械だ。

その殺人機械がまだ一人も殺害していないというのは、僕も考えなければならぬね？」

「そ、それは……」

そう、骸無は未だ誰も殺していない。

USJ襲撃でも、体育祭襲撃でも、そして今回の保須市でも。

そしてその結果はオール・フォー・ワンにとって望むものではない。

「あれだけ個性を与えてあげたというのにこの結果なら……その個性、別の人間にあげた方が良かったかな？」

結果の出ない骸無から個性を奪うことをほのめかす。

その言葉は、骸無にとって、*“無個性”*だった緑谷出久にとって最も効果のある言葉だった。

「それだけは！ それだけは許してください！ ボク、頑張りますからー！」

「頑張る……ねえ？ いままで頑張ってこなかったのかな？ そうじゃなかったとしても頑張ってこの結果なら失望したとしか言いよ

うがないんだけどねえ」

「もつと頑張りますから。　先生” のために、ヴィラン連合のために頑張りますから！」

「頑張ります」「許してください」を繰り返す骸無にオール・フォー・ワンは嗜虐的な笑みを浮かべて言葉を投げかける。

「なにをそんなに怖がるんだい？　僕が君から個性を取り上げたところでもとに戻るだけだろう？　元の “無個性” に」

「 “無個性” ……いやだ、嫌だ、イヤだ！　 “無個性” に戻るの嫌だ！　あんな、力もなく、ただただ虐げられるだけのあのころに戻るの…」

「そうかそうか。僕が与えた個性がそんなに大切か」

「だって、だってだってだって！　ようやく手に入れた “個性” だ。あれだけ欲しくて欲しくてたまらなかった “個性” だ！

僕の、僕の “個性” だ！」

涙を流して取り乱す骸無。

“無個性” だった過去。弱者として虐げられ続けた10年間。

それこそが緑谷出久を『悪』に堕とした『闇』である。

そして、そうした人の暗い部分を操ることなど、裏社会の伝説であるこの男にとって容易い。

「なら何をすればいいのかわかるね？　僕が何を望むのか？」

「はい！　倒します。あなたの、 “先生” の敵を！」

「よろしい。その言葉を忘れないようにね。今日はもう疲れただろう。休んでいいよ」

骸無の言葉を聞き、退室させるオール・フォー・ワン。

部屋を出ていく骸無を見送って、おもわずと言った様子でため息を吐いた。

「やれやれ、『倒す』か…50点だな。そこは『殺す』と言ってほしかったんだけどねえ」

骸無への教育洗脳の結果はあまりよろしくない。

骸無には “無個性” だった過去、そして “個性” への執着という、彼に有ったまたは作り出した心の負の部分に刺激・肥大化させて操っ

ている。

だが、彼の心にはまだ正義の心というものが残っているように見て取れた。

正義感や良心。

そんな部分が殺意を無意識に鈍らせ、殺害に及んでいないのだろう。

オール・フォー・ワンは長年の経験からそう断ずる。

でなければオールマイトはともかくたかだかヒーロー候補の生徒すら殺せないのは、骸無のスペックを考えるとおかしいのだ。

結論を言えば、骸無にはヴィランたるための精神的才能が足りていない。

悪意や憎悪、敵意、怒り。

そういった「漆黒の意思」とでも言うべき邪悪さが備わっていない。それこそが骸無の明確な欠点だった。

それゆえ、「個性」を引き受ける個性」というオール・フォー・ワンを継ぐに最適な個性を持ちながら後継者候補になることはない。

「吐き気を催す邪悪」になりえる死柄木こそ、自身の後継者にふさわしい。

それがオール・フォー・ワンの考えだ。

意図的に植え付けているヒーローへの憎悪が本物になるかどうか。

それが骸無が真に悪になるかどうかの分かれ目だろう。

「さて、はやくこちら側において。骸無」

裏社会の支配者は怪しげに笑う。

## 番外編

### エイプリルフル企画 I F B A D E N D

——雄英高校 USJ 火災エリア

火の粉舞う火災の街を再現した一角で、オールマイトと骸無、いや、緑谷出久は向かい合っていた。

「緑谷少年。君がここまで悪の道に堕ちるとは思わなかった」

拳を握り、何かに耐えるようにオールマイトは言葉を絞り出す。

そんなオールマイトの言葉に出久はそれを嘲笑をもって答えた。

「あなたにボクの何が分かるか？ ボクを分かってくれたのは『先生』だけだ」

「少年！ ヤツは邪悪な男だ！」

「黙れ！ ボクにとっては『個性』<sup>チカラ</sup>をくれた恩人だ！」

もはや決定的なまでにすれ違ってしまった二人の道<sup>正義と悪</sup>。

オールマイトはここに彼を倒すことを決めた。

「少年、君は道を見失った。ここで終わりにしよう」

「終わるのはあなただ。オールマイト」

言葉はもう要らない。

あとは拳を交えるだけだった。

・  
・  
・  
・

激しい打撃音が響き渡る。

戦闘が始まってわずか5分。

その短い間に火災エリアは半壊してしまっている。

彼らの攻撃の余波でビルは崩れ、道路はクレーターができている。

そんな熾烈な戦いも、もうじき終わりを見せようとしていた。

「少年、これで決めるぞ」

「バカにしているんですか、オールマイト。そんな腕だけの強化でボクを倒すだつて!?!」

出久との戦いで限界を迎えたオールマイトは、トウルーフフォームを晒し、最後の力で左腕のみのマッスルフォームになっていた。

「ボクの力を……見くびるな!」

怒りに任せ、出久は右のスマッシュを放つ。

迎え撃つオールマイト。

〃〃SMASH〃〃

かつてUSJで戦った時と同じように拳と拳がぶつかり合い、衝撃波をまき散らす。

だが、その結果は前回とは異なりオールマイトの左腕を粉碎したのだった。

『勝った!』

そう思った出久だったが、その一瞬の後目を見開いて驚愕した。

右腕だけのマッスルフォーム。

左は囷。本命は右!

『そういえば、オールマイトの利き腕は右だったな……』

昔、オールマイトを追いかけていた時のデータがふと頭をよぎる出久。

かつての自分だったらきつと忘れなかったことなのに……

そんな場違いな感想を思う出久の顔に。

〃〃UNITED STATES OF SMASH〃〃

オールマイトの本気の一撃が突き刺さる。

「さらばだ、少年」

出久の身体は錐もみしながら吹き飛び、壊れかけのビルにぶつかって崩壊に巻き込まれたのだった。

ボロボロの身体を引きずり、出久の元へ向かうオールマイト。

出久は下半身を瓦礫に潰され、炎に焼かれながらもまだ生きていた。

苦痛にうめき声をあげながら、オールマイトに視線を向ける。



「オールマイト……」

「緑谷少年……」

その無残な姿にオールマイトは思わず慟哭の声をあげた。

「君は……君は平和の象徴になれる男だった！ 私の後継者となって次世代のヒーローとなるはずだったのに、悪の道に染まるとは！

どうして、ヒーローを、ヒーローの卵たちを殺したんだ！」

ただただ、悲痛な叫びだった。

だが、その叫びは出久には届かない。

「ボクは、あなたが憎い！ ボクを絶望させておいて救いもしなかったあなたが！」

ただ憎しみを、恨みをぶつける出久。

その憎しみは正当ではない。どこまでも自己中心的な自分勝手な怒りだろう。

「そうだな。君を私は救えなかった。私は、間に合わなかった。

もしかしたら、君は私の教え子になっていたかもしれないなかったのに」

とうとう残っていたビルが崩れ、完全に瓦礫と埋もれ、炎につつまれる出久。

オールマイトはそれをただ見ているだけしかできなかった。

|||||

——— ヴイラン連合アジト

AFOは報告を聞いて笑みを浮かべた。

「そうか。雄英高校は壊滅。オールマイトは生存するも力を使い果たしたか。骸無は良い仕事をしてくれたよ」

もはやOFAを引き継ぐ者はいない。

候補者たちはすべて息絶えた。

ならばもはやOFAは脅威ではない。AFOの宿敵は存在しないも同然だった。

「ああ、そうだ。骸無の死体は回収しておいてくれたまえ。アレから僕が与えた個性を回収しないとね」

部下に骸無の回収を指示する。

まだまだ骸無には働いてもらう必要があるのだ。

「これからも頼むよ、骸無」

そういつて振り返るAFOの視線の先には、培養液に浮かぶ緑谷出久の姿が。

いや、正確には緑谷出久のクローン体が並んでいた。

彼は死ぬことすらもはや自由ではなかった。

運命のシヨツピングモール　くルート分岐1く  
緑谷出久はシヨツピングモールにお出かけしました  
プロローグ

——雄英高校　会議室

雄英高校で行われる週一回の定期会議。

今回の議題は先日行われた期末試験の結果と、その後に行われる合宿訓練についてだ。

「さて、結果は様々だったけれど無事に期末試験を終えられてなによりだったね」

根津校長の開始の言葉は無事に試験を終えたねぎらいの言葉だった。

USJ、体育祭と襲撃があったことから、定期試験の際もヴィランの襲撃を警戒していたのだが、問題もなく終わり、ホツと安堵の吐息を漏らしたものだ。

「ですが無事に終わったと喜んでばかりはいられませんよ」

緩みかけた雰囲気を引き締めるように相澤が発言する。

試験の次には合宿が控えているのだ。

「そうねえ。なにかと今は騒がしいから、合宿の危機管理は嚴重にしないといけないわね」

「まったく、ヴィランといいヴィジランテ自警団といい厄介にもほどがあるつてもんだ!!」

ミッドナイトが相槌を打ち、プレゼント・マイクが愚痴をこぼす。

プレゼント・マイクの言う通り状況はあまり良くはない。

ヴィランの活性化は相変わらずだが、そこに加えてヴィジランテ自警団が台頭してきたのだ。

保須市の事件で表面化した

ヴィランとの戦闘が頻発し、ヒーローや警察は被害を増やさぬよう難しい介入を余儀なくされている。

そうした問題の対処に追われて肝心のヴィラン連合への捜査が

滞っているなど、問題は山積みだ。

オールマイトがヴィラン連合について尋ねる。

「ヴィラン連合の動きはどこまで追えているのですか？」

「残念ながらヒーローからも警察からも有力な情報は来ていないね。

保須以来、不気味なことに彼らの動きが途絶えているんだ。何かの準備段階なのか、それともすでに水面下で動き出しているのか……」

「シット、死柄木め。何を考えている」

先に述べた状況もあるが、ヴィラン連合は表立った動きを見せていないのだ。

不穏な空気を感じ取り、爪を噛むオールマイト。

相澤がさらに懸念材料について質問をする。

「ヴィランもそうです。過激派自警団——とくに組織化されたものは脅威です。彼らの中には今のヒーロー制度に不満を感じてヒーローたちに対して敵意を抱いているものも多い。

英雄高校は良くも悪くもヒーローの象徴の一つです。彼らから狙われる可能性もあるのでは？」

新たな懸念材料、ヴィンランテ自警団の調査状況を聞く相澤に根津校長が返事をする。

「彼らに関しては私の特別な伝手を使って調べているよ。あるヒーローに応援を頼んでおいたのさ」

「あるヒーロー？ それはいったい？」

「変装ヒーロー『アンダーカバー』さ。変装の名人の彼にはランカル・ヴィンランテ過激派自警団の一つ、『ファースト・オーダー』にすでに潜入してもらっているよ」

「チェイス君か！ アメリカのヒーローの彼なら実力者だ」

「彼ですか……実力は確かなんだが」

根津校長の協力者の名前を聞いて喜んだのがオールマイト。反対にげんなりした様子なのが相澤だ。

陽気な性格の彼とオールマイトは気が合うが、どうも合理的に思えない方法で事件を解決するらしいアンダーカバーとは相澤は相性が悪いらしい。

かつて偶然いつしよに仕事をした相澤は当時のことを思い出す。  
ヴィランの下っ端を捕まえ、アジトを尋問していた時のことだ。

『さあ、お前たちのアジトを吐いてもらおうか!』

『誰が言うもんか!』

『なら仕方ないな。ほらよっ』

『うっ、やめてくれ! 頭が割れそうだ』

『ならさっさと吐くんだ。いまなら好きな味を選ばせてやろう』

『……マスクメロンはあるか?』

『あるとも! なんならチョコレートミントもつけてダブルにしてや  
ろう』

『トリプルだ! ラムレーズンもつけてくれ』

『よし、いいぞ! さあ、アジトの場所は?』

『あ、ああ、アジトは3丁目の——』

アイスクリームディッシャーを片手に尋問する姿を思い出し、頭が  
痛くなる相澤。

あんな尋問をするほうもするほうだが、答える方もどうかしてい  
る。

あいつがいるとアクション映画を見ていたはずがギャグ漫画の世  
界に変わっているのでついていけない。

相澤はため息を吐いた。

それでも実力は確かなのだ。

「彼の情報によると、いまは地固めをしているらしく、地域に影響力を  
伸ばしているところらしいね。」

おそらくだけど、彼らが当てにしていたステインが脱退したのが影  
響しているみたいだ。脱退した理由が思想面で対立したかららしい  
が、詳しくは分かっていないんだ」

「ラジカル・ヴィジランテ過激派自警団の最大手が動かないなら大丈夫かしら?」

「それは分からねえぜ! 小さくともビッグな野心を抱いているとこ  
ろなんざたくさんあるんだ。警戒は必要だろうぜ」

「むしろ一匹狼のような存在が行動を起こすのが厄介だ。調べようが

ありません」

次々と意見が交わされる会議室。

だが、状況を劇的に変える策は出てこないままだった。

|||||

——ヴィラン連合 アジト

「ようこそ。悪の親玉ども」

死柄木が笑って告げる。

部屋に置かれた大きな円卓。

その円卓には死柄木をはじめとしたヴィラン組織の長たちが席を並べていた。

「俺たちを呼び出したんだ。さぞ価値ある話をしてくれるんだろう？」

オーバーホール。ヤクザ『死穢八斎會』しえはっさいかいの若頭が死柄木を興味深そうに観察する。

「もうけ話ならなんでもいいぜ。ここにいるのは俺のお得意さんばかりだ」

義爛。ぎらん闇のサポートアイテム、違法薬品の販売、ヴィランの紹介など多くの悪事に手を染める大物ブローカーがニヤついた笑みを浮かべる。

「さっさと話してくれないかな。僕も暇じゃないんだ」

「こんな場所での会合とは下の下ですね」

「我々に有益ならば話は聞く。そうでなければつぶすだけだ」

『ギアス饗団』、『スマートブレイン』、『ギルド』などなど。

ヴィラン連合が密かに接触を凶った悪の組織がここに集まっている。

それらを集めた理由を死柄木が語りだした。

「せっかちななあ。まあ、実際仲良くおしゃべりなんてキャラでもないからさっさと本題に入ろう。」

あんたらをここに呼んだ理由は一つだ。

「ヴィランの組織をまとめあげろ」

「これが俺たちからの提案さ」

「それはつまり……俺たちに傘下に入れと言っているわけか？」

死柄木の言葉を受けてヴィランたちが殺気立つ。

好き勝手したくてヴィランをやっている連中ばかりだ。誰かの下につくなど考えたくもない。

いまにも飛びかからんばかりの彼らを死柄木が手を出して抑える。

「まあ待て。誰も傘下に入れなんて言っていないだろ。話は最後まで聞くものだ。」

俺たちがやるのは、ネームバリユーを使わせたり、資金を提供する。兵器の供給に戦力の派遣をする。

代わりに、ある程度こちらの都合に合わせてもらったり、協力を要請させてもらう」

「つまり、ヴィラン同士で同盟を組もうというわけか」

ヴィラン連合の名のもとに相互の不可侵条約と協力関係を結ぶ。

また、利害関係の調整なども行うなど、これまで一枚岩でなかったヴィランをひとつにまとめあげようというのだ。

この提案を受けて、各組織の長は考え込む。

受け入れるメリット・デメリット。

提案の裏があるのか、ないのか。

その中でいち早く意思表示をしたのは、オーバーホールだ。

「その提案を受けよう。裏社会の中で今一番ネームが売れているのはヴィラン連合だ。そこに協力してもらえら俺たちもやりたいことがしやすくなる」

もはや過去の遺物と化しているヤクザにとって、状況を変える千載一遇のチャンスだ。

逃す理由がない。

彼の答えを受けて次々と参加の意思を示すヴィランたち。

まさしくヴィラン「連合」が結成されたのだ。

「死柄木弔、参加するにはこれからの展望を教えてください。計画の正しい目標は妄想と言う。俺たちを集めたからには計画は立てるのだから」

うが、その目標を聞きたい」

オーバーホールの質問に死柄木は笑って答えた。

「目標はヒーロー社会の終焉と俺たち日陰者による支配だ。そのため  
に……オールマイトと雄英高校には消えてもらわないとな」



緑谷出久はシヨツピングモールにお出かけしました

「まったく、あいつらゴネすぎなんだよ。さっさと領いておけばいいものを」

「仕方ありません、死柄木弔。彼らにも面子というものがあるのですから」

悪態をつく死柄木を黒霧がなだめる。

「ヴィラン『連合』の結成のための交渉を終えた死柄木は、その疲れもあつてイラついていた。

もともと気の長い性格をしているわけではない死柄木にとって、一癖も二癖もある悪人どもの会談はよほどストレスのたまるものであつたらしい。

「あー、気分が悪い。少し出かけて来るぞ、黒霧」

「待ちなさい、死柄木弔。一人で出かけては危険です。護衛を連れていかねば」

気分転換に外出しようとする死柄木を黒霧が呼び止める。

既に死柄木の存在は世間に知れ渡っているのだ。

さすがに一般市民まで顔が割れているとはいえないが、警察やヒーロー関係者には重要人物として知れ渡っていることは間違いない。

そんな状況で死柄木を一人で放り出すなど常識人である黒霧にはできなかつた。

もしヒーローに見つかるうものならと考えると、胃がキリキリとする黒霧であつた。

「ハア？ おいおい、ガキじゃないんだぞ。大の大人が出かけるのに付き添いなんかいるか」

「以前とは状況もあなたの立場も違うのですよ！そこは自覚してもらわねば困ります」

「いちいち口うるさいやつだな、黒霧は」

黒霧の心配も知つたことではないと、死柄木は面倒臭そうにため息をつく。

その様子を隣で見ていた骸無は、

『この間見てた時代劇の若殿様と爺やみたいだ』

と、呑気に考えていたりする。

その間にもいくつか死柄木と黒霧の間でやり取りがあったらしく、気がつけば骸無が死柄木の護衛として着いていくことになっていた。あまりぞろぞろと人数を連れていきたくない死柄木と、連合でもトップクラスの戦闘能力を誇る骸無なら護衛として十分だろうと考える黒霧との妥協点らしい。

死柄木のがままに巻き込まれたようだが、いつものことと諦めて立ち上がる骸無。

「それで、死柄木くん。行き先は？」

「ショッピングモール。木塚区にあるショッピングモールだ」

死柄木の返事を聞いて、後続く。

人混みに紛れれば目立たないだろうが、逸れないよう気をつけよう。

と、護衛方法を考える骸無であった。

|||||

——木塚区ショッピングモール

「さて、どうしたものかな」

骸無は一人ショッピングモールの広場で思案に暮れていた。

結論から言うと、死柄木と別行動をするはめになっている。

いろいろと護衛のシミュレーションをしていたが、まさかおいていかれるとは……と、骸無はため息とともに髪をくしやりと撫で上げた。

物事はつい数分前のこと。

~~~~~

『骸無、俺は一人でブラついてくるからどこかで時間をつぶしてろ』

ショッピングモールに着いた途端に、単独行動を宣言する死柄木。

骸無は思わず呆れた口調で言う。

『死柄木くん、護衛の意味分かってる？』

『おまえ、俺のことバカにしてるだろ。護衛ってのは要は何かあったらすぐ駆けつけるようになってればいいものだろう？』

なら、俺の近くでべったりくっついてる必要はないはずだ』

『いや、近くにいないと何かあった時に……』

死柄木の持論に反論しようとするが、死柄木は強引に意見を押し通す。

『ほら、これを渡しておくから、何かあったらすぐにそれで連絡するよ。それでいいだろ』

『……これは？』

そういつて投げ渡されたのは7インチのタブレット。

画面をスライドさせてロックを解除すると、いくつかアプリが入っている。

『それに俺のスイッチ一つで俺のGPS情報が送られてくるアプリが入ってる。緊急時にはそれを使って呼び出すさ』

自分のスマホをひらひらと見せつける死柄木。

該当のアプリを開いてみれば、こちらからも位置情報を確認できるようになっていた。

どうやら外出するにあたって用意していたらしい。

随分と準備がよくなったものだと感心する骸無。

本人が準備したこともあり、その意思に従うことにした。

もとより「先生」からは死柄木の意見を尊重するように言いつけられている。

自分のスペックならばこのショッピングモールくらいならすぐ駆けつけられるだろう。

そう思い、死柄木の背中を見送った骸無だった。

『あつ、おい。中にある電子書籍は読んでもいいが、しおりの場所は変えるなよ。あとから続きを読むからな』

……本当に、準備がいい。

~~~~~

こうして一人になったわけだが、このまま広場に突っ立っているわけにもいかない。

そう思って、時間をつぶす方法を探して歩き始めた骸無。ちやうど、手にはタブレットもある。

思いついたのは喫茶店で過ごすことだった。

|||||

雄英高校1-Aのメンバーで合宿前にシヨツピングへ。

そんな期末試験後のささやかなひと時になるはずが、麗日お茶子は思わぬ危機に直面していた。

各自欲しいものを買いに別行動となり、いくつか店を回って目的の品を手に入れたお茶子。

待ち合わせの時間まで、少しばかり余裕があったので気になっていた喫茶店に入ることを決めたのだが、そのことを今猛烈に後悔している。

夏休みの期間に入っているということもあって、店内は混み合っており、店側から相席をお願いされて快く引き受けた。

せっかくの機会だから相席くらい……などと考えたのが運のつき。案内された席で、相手の顔を見た瞬間に表情が凍りついたのを自覚した。

「すみません、相席お願いします……すう!？」

「ええ、どう……ぞ?」

お互いに顔を見合わせる。

ヴィラン連合対ヒーロー用改造人間「骸無」こと、緑谷出久。

雄英高校ヒーロー科、麗日お茶子。

予期せぬ出会いであった。

『うわあああ、どうしよう。警察!?! でもこんなところで通報したら周りの人たちが……』

パニックになりかけながらも、頭の中で対応を考えるお茶子。

場合によってはその身を犠牲にしても……と、覚悟を決める。

「……今日は戦いに来たわけじゃない。できれば騒ぎは起こしたくないからそちらが何もしなければこちらは何もしないよ」

だが、お茶子の懸念に反して骸無は落ち着いた反応を返してきた。その意思をお茶子は念を押すように確認する。

「私が黙ってるなら何もしいってことだよ」

「そう。騒がず、何事もない顔をして過ぐす。それがお互いのためだよ」

頷く骸無を見てお茶子も席に座る。

どこまでその言葉を信用できるかわからないが、いまは他に選択肢はなかったからだ。

さりげない顔で店員にコーヒを注文してから目の前の骸無に目を向ける。

タブレット片手にカップに口をつける骸無は、お茶子のことなど全く気にしていないようだった。

曲がりなりにもヒーロー科の生徒である自分を前にして視線も寄越さないとは、全然脅威だと思われていないらしい。

その慢心とも言えるような余裕さに対抗心が沸き上がったお茶子は一つしかけてみることにした。

『ウチのこと、侮ってくれてるならもしかしたら油断して情報を漏らしてくれるかもしれない!』

会話の中から情報を引き出す。

そんな訓練は受けたこともないし、経験もないのだが、ヒーローの卵としてヴィランを前に何もしないということは選べなかったのだ。恐る恐るという様子で、話しかけるお茶子。

「さ、さつきから熱心になにか読んどるけど、何を讀んでるの?」

「……○ジャンプの漫画」

「ま、漫画?! 意外だ!」

ヴィランが読んでいるものは何か? もしや犯罪の計画か?

と、身構えたところで答えは漫画。それも夢溢れる少年誌だ。つい驚いてしまうのも無理はないだろう。

ヴィランが少年漫画って、と思うお茶子の視線に、骸無は少し拗ねたように言う。

「……ボクだって漫画くらい読むさ」

「そ、そうだよね。別に読んでたっておかしくないよね！ ……えっと、漫画好きなの？」

「別に」

機嫌が急降下したらしい骸無は言葉少なく返事をする。

とてもじゃないが円滑なコミュニケーションができる状況とは言えない場の雰囲気にお茶子は心の中で頭を抱えていた。

『あかん。全然だめだ。これ、どうしたら…いや、諦めちゃだめだ。もっと話題を投げかけないと』

「そ、それにしてもタブレットで漫画読むってことは紙より電子書籍派なの？ 私の周りで使ってる人少ないから気になって」

「別に。タブレット、ボクのじゃないから。渡されたから使っているだけだしね」

「え、ヴィラン連合じゃ漫画入りのタブレットが支給されるん？」

「まさか。これは死柄木クンの私物さ」

「死柄木って、ヴィラン連合の首領の？」

「そうだけど」

……………

今、最も勢力を誇るヴィラン組織の首領が少年誌を購入しているという風景が想像できなくて、お茶子思わずフリーズ。

こんな役に立ちそうもない情報を得てどうしろというのか。

「ちなみに購入履歴は『T O l o v e r』『いち〇100%』『ゆらぎ荘の〇奈さん』とかだね。

なんか死柄木クンの趣味が窺い知れるな」

「えーっと、なんとというか男の子だね」

ヴィラン連合の首領の漫画の趣味をお茶子は知った。

『どうしてくれるん!?。次に死柄木が登場したときにシリアスに見られないー!』

もうお茶子の中では死柄木は「エロス漫画好き」の人である。

どんな顔をして彼を見ればよいのだろうか。

これ以上この方面の話題で話を続けても収穫は得られそうにない。

そこで、お茶子は思いきって話題転換を試みることにした。

「そういえば自己紹介してなかったね。私、麗日お茶子です」

「……知ってるよ。こんなことをして、敵同士で仲良くなる必要はないと思うんだけど」

改めて自己紹介から始めてみたものの、見事な塩対応。

が、いまさらなのでその程度でめげるお茶子じゃない。

「でも、なんて呼んだらいいのかわからないじゃん。骸無ってこんなところで呼ぶわけにもいかないでしょ」

周囲の目がある状況で改人名ヴァイランネームを呼ぶリスクを上げて反論する。

その言葉に一理あると思ったのか、骸無は少し嫌そうな顔をして答えた。

「なら、骸無以外で好きに呼べばいいよ。どう呼ばれたって気にしないさ」

あくまで冷淡な骸無。

そこにお茶子は爆弾を投下する。

「じゃあ、デク君って呼ぶね！」

「やめて。その呼び方だけは絶対嫌だ」

即前言撤回。

物凄い拒絶感をあらわにする骸無に、お茶子はようやく少し優位を引き出せたと感じて笑顔になった。

「だって、爆豪君がそう呼んどのの聞いたし……それが名前かと思っただけ」

「そんなわけないから！ 蔑称だから！ くそう、かつちゃんめ。今度会ったらただじゃおかないぞ」

心底嫌そうに顔を歪めて爆豪への恨み言を言う骸無。

その様子がさきほどまでのどこか怖いイメージから親しみのある印象を受けて、つい気を緩めたお茶子はなんとも当たり前前のことを口に出した。

「デクって呼び名、本当に嫌なんやね」

「あたりまえじゃないか。『何もできない木偶の坊』だから『デク』なんて呼ばれて嬉しい人なんていないさ」

怒りを隠さずに返事をする出久の様子に場の空気がまた悪くなる。

話し辛くなってしまう状況にお茶子はなんとかしよう、そのまま思ったことを口にしてしまった。

「でも、『デク』って……『頑張れ!!』って感じでなんか響きが好きな、私」

「……なんだって?」

お茶子の言葉に驚きで目を見開く出久。

しばしの間呆然としたあと、クツクツと笑い始めた。

「クツクツクツ、『デク』の響きが頑張れ? ハハツ、面白いことを言うね」

「そ、そんな笑うことないやん」

何がツボったのか分からず少し戸惑うものの、ようやく出久の笑い声が聞けた。

これで多少は場の雰囲気になごむと一安心したお茶子だったが――

「ああ、おかしいな。あまりに可笑しくて……腸はらわたが煮えくり返りそう  
だ」

「ひうー!」

彼の目を見た瞬間、自分が失言してしまったことに気が付いた。

怒りに歪む濁った緑の瞳。

逆鱗に触れてしまった。

彼女の言葉は緑谷出久の心の負の面を刺激してしまったのだ。

「『頑張れ』だって?」

どんなに努力しても、どんなに結果を出しても誰も認めようとしなかったのに!

頑張ろうと、努力しようとする意思すら『無個性』で何もできないデク』だって笑われてきたのに!」

「え、無個性』って……どういう」

明確な怒りを見せる出久。

聞こえてきた単語に思わず聞き返すお茶子だったが、出久にはもう聞こえていない。

「『デク』が『頑張れ』だって? これ以上、何を頑張ればよかったん



だよ。頑張っても頑張っても「個性」がなければだれも僕を認めてくれないくせに！」

声を絞り出すように吐き出す出久にお茶子は何も言えなくなる。

出久の頭の中に過去に浴びせられた言葉たちが浮かび上がる。

『勉強ができるだけじゃヒーロー科は入れねんだぞー』

ー僕が頑張って勉強したことは無駄なんだろうか……

『「無個性」のくせに、私より成績がいいなんて』

ー成績と無個性は関係ないじゃないか……

『体力作り？ 「無個性」が頑張ったところで「個性」なけりや無駄だろ？』

ーまだ初めてもないのにどうして「無個性」だからと否定されなければいけないんだろう……

『来世は個性が宿ると信じて……屋上からのワンチャンダイブ!!』

ー「無個性」は生きている価値すらないのか……

『ごめんねえ出久、ごめんね……!!』

ー僕が「無個性」だから母をこんな悲しませたんだ……

理不尽な侮蔑を受けても、泣きながら僕を抱きしめて謝り続けた母を思っただけで耐えてきた。

一度でも表に出せば母に八つ当たりをしてみたいそうだったから。

『どうして「無個性」に産んだの？』って。

だから見ないふりをしてきた。

だが、もう無理だ。

緑谷出久は気が付いてしまった。

人を救うヒーローに憧れる一方で「個性」を自由に使うヒーローへ、個性を当たり前のように使う人たちへの嫉妬があることを。

「個性」前提の超人社会において「無個性」の緑谷出久はどうやってたて社会の爪弾き者だ。

世界総人口の8割が特異体質というものの、世代別にみれば年が若いほど「無個性」の比率は下がっていく。

ましてや十代の出久ともなれば、僅かなマイノリティでしかない。出久の中で何かが壊れる音がした。

「ありがとう。君のおかげで出久は骸無ボクになる決心がついたよ」  
何も言えないお茶子にお礼を述べて席を立つ。

「ボクの居場所はヴェイランあっちだって気が付いたから」  
笑って去っていく骸無。

緑谷出久は……もう戻れない。

緑谷出久はショッピングモールにお出かけしました  
アフター

——ヴィラン連合 アジト

「やあ、骸無。仕事は無事に終わったようだね」

「はい、〃先生〃。こちらに反抗してきたヴィラン組織は壊滅させました」

「任務の結果を報告する骸無。」

今回はヴィラン〃連合〃に属さないヴィラン組織をつぶすことだった。

報告内容にオール・フォー・ワンは満足げに笑う。

「けっこうけっこう。それで、相手はどうしたかな？」

「……皆殺しです。討ち漏らした者はいないでしょう」

逆らった愚か者は全員あの世行きにした。

そう語る骸無の表情は平然としており、罪の意識などない。

ようやく完成した……。

オール・フォー・ワンは自分が手掛けてきた怪物がついに完全になったことに思わず笑い出しそうになる。

改造された強靱な肉体に多くの個性を受け入れる器。

与えられた個性を十全に活かす知性と技術。

そして、ようやく手に入れた、機械のごとき非情の心。

これこそ、オール・フォー・ワンが求めた最高のヒーロー<sup>オールマイト</sup>を殺すための最凶のヴィラン、骸無の姿だ。

「そうか。それで、ほかに報告は？」

「組織の殲滅中に3人組の自警団<sup>ヴィランテ</sup>に妨害を受けました。

うち中年男一人は重傷を負わせましたが、地面を滑走する男と飛び跳ねる少女が中年男を抱えて逃走。

「茶毘」を名乗る炎の個性を持つ男の邪魔もあり、逃がしました」「ふむ。君から逃げるとは彼らもなかなか強運らしい。

まあ、問題はないさ。たいした勢力でもなさそうだ。それに、目的

は達成してるだろう？」

「はい。組織の使っていた『トリガー』は回収。バイヤーもテスターも殺害リストの人物は全員殺しています」

骸無の言葉を受け、手元の書類に目を通す。

殺害リストに添付された顔写真には全員バツ印がついている。

左目に眼帯をつけた少女の書類を最後に、一通り目を通したオール・フォー・ワンは報告の出来事を些末事だと一笑する。

最高戦力とも呼べる骸無は完成し、愛弟子の死柄木はまだ慣れないながらも問題なく協力組織と交渉を進めている。

ならばステージを進めるだけだ。

そう、オール・フォー・ワンは断じて宣言する。

「骸無。例の計画を開始しよう。ついに時が来たようだ」

「『先生』、それでは？」

「ああ、世界をひっくり返す時だ」

計画は練りに練った。

奴らを食い殺すための牙も爪も砥ぎ終えた。

かつて憧れ、一度潰えた「魔王の座」

そこに再び返り咲くときがきたのだ。

「今度、雄英のヒーロー科が合宿をするそうだね。君もそこに参加してくるといい。」

……幼馴染の彼とも積もる話もあるだろう」

「……フフツ、ありがとうございます。成果をお待ちください」

骸無の喜色に満ちた歪んだ笑みは、十年來の幼馴染への殺意を隠せていない。

次に会った時には、いままでのようにその拳を止めることはないだろう。

もはや、緑谷出久として生きるよりも改人・骸無として生きる道を選んではまったのだから。

対『平和の象徴』

オール・フォー・ワンの要求を満たす存在となった骸無。

だが、万能ともいえるオール・フォー・ワンですらこのときはまだ気が付いていなかった。

骸無の中で、オール・フォー・ワンが意図せずして植えた種子が芽吹いていたことを。

それは、超人社会が生み出した“化け物”である。  
そう知るのには遠い未来ではない。

|| || || || || || || || || ||

オマケ 次章予告（つぽいもの）

「決着をつけようか。かつちゃん」

——  
骸無

「出久、俺は、おまえに……」

——  
爆豪勝己

「くそ、やられた！」

——  
相澤消太

「虎あ！ ピクシーボブが！ ラグドールが！」

——  
マンダレイ

「襲撃に、雄英が何も対策してないと思ったかヴィランども！  
ヒーローをナメるな!!」

——  
ブラドキング

次回、『雄英合宿攻防戦』編

## NG・小ネタ

??くタブレットが死んだ! ①く

『ほら、これを渡しておくから、何かあったらすぐにそれで連絡するよ。それでいいだろ』

『これは?』

そう言っつて投げ渡されたのは7インチのタブレット。

画面はボロボロと崩れており、使い物にならない。

もはやスクラップだ。

『死柄木クン、五指で触ったね?』

『買った……ばかりだったのに……』

ガツクリと膝をつく死柄木。

ちなみにこのタブレット、既に8代目である。

くタブレットが死んだ! ②く

『ほら、これを渡しておくから、何かあったらすぐにそれで連絡するよ。それでいいだろ』

そう言っつて投げ渡されたのは7インチのタブレット。

放物線を描いて宙を舞うそれは、骸無の手をすり抜けて重力に従い地面に落下した。

「……………」

「……………」

恐る恐る骸無が拾い上げたそれには、見事な蜘蛛の巣が画面に出来上がっていた。

電源ボタンを押す。

反応無し。

『大事な物を投げるのが悪いよね。ボクは悪くない』

「いや、悪いだろ。謝れよ。カツコつけて言ってもなかったことにはならないからな!」

くタブレットが死んだ! ③く

『ほら、これを渡しておくから、何かあったらすぐにそれで連絡するよ。それでいいだろ』

そう言っただけ渡された7インチのタブレット。

宙でキャッチした骸無は落とさないよう手に力を込めた。

改造人間である骸無の握力は鉄さえもねじ曲げる力を持っている。

そんな力で握られたタブレットは……あわれ、骸無の手の中でコナゴナに砕け散る。

「ボクは……もう、普通の身体じゃないんだな……」

「シリアスぶってるってこ悪いが、ごまかされないぞ?」

く洗脳失敗?く

時間をつぶす方法を探して歩きはじめた骸無。

自然と足が向かった先は……

『オールマイト新作パーカー発売中! ヒーローピンバッジにトレイディングカード、ヒーローコラボ商品など、ヒーローグッズはなんでもそろろう!』

ヒーローグッズ専門店「オールマイティ」、キャンペーン実施中です!』

「うわあああ、オールマイトの新作パーカー! し、しかもシルバーエディションの復刻まで!!」

………ハッ! ボクは何を?」

気がつけばオールマイトグッズを手にしていた骸無。

洗脳されたくらいでオタクの購買意欲が消えるものか!!

くヒロイン力MAXだったらく

「でも、『デク』って……『頑張れ!!』って感じでなんか響きが好きだな、私」

「デクです!!」

敗因: 相手が麗らかすぎた。

く悪党に著作権も肖像権も無え!く

シヨツピングモールを歩く死柄木。

自分がその気になれば一面惨劇の舞台に変えられるというのなら誰かがヒーローが平和を守ってくれと疑っていいない。

そんな風景にイライラする。

「おいおい、これヤバくね?」

「なになに、って、マジやべえ!」

なにやらグッズを手にはしやぐガキども。

よくもまあこんなくならないことで騒げるとは、と、呆れていた死柄木だが、手にしていた物を見て驚きに目を見開いた。

「じゃーん! おれ、ヴィラン!」

「ヤバい、似合う!」

ガキがつけて遊んでいるのは骸無の仮面をモチーフにしたマスクだ。

なんでそんなものが売られているのか!?

よく見れば骸無だけでなく、身無や脳無のマスクまであった。

シリーズ化までしてあるとは、制作会社は馬鹿なのか!?

てか、シリーズ化するほど売れるのか!?

ヴィラン、社会の嫌われ者とは一体……。

「あつ、これヴィラン連合のボスのじゃね?」

「ホントだ、ヤベエ!」

待て待て、俺のマスクだど!?

誰の許可を得て作ってやがる!

お父さんを量産すんな!

「じゃーん、たくさんつけてみた。腕とか」

「ヤベエ、センス悪ッ!」

「だよな! やっぱ、ないわー」

お前らに俺のセンスが分かってたまるか!

てか、もう一人さつきから『ヤベエ』ばかりじゃねえか! もつと語彙力増やせ!!

こうして死柄木の社会への憎しみは積もっていくのであった。



## 雄英合宿攻防編

緑谷出久は合宿に来ました プロローグ

「音楽流そうぜ！ 夏っぽいの！ チューブだチューブ！」

「席は立つべからず！ べからずなんだ皆」

「ポツキーちょうだい」

「バツカ夏といえばキャロルの夏の終わりだぜ」

「終わるのかよ」

「しろとりのり！ りそな銀行！ う！」

「ウン十万円！」

「ねえ、ポツキーをちょうだいよ」

合宿へ向かうバスの中は生徒たちの声でざわざわと騒がしい。

『チツ、のんきにはしゃいでんじやねえよ。バカども』

そんななか爆豪は一人、外の景色を眺めながら物思いにふけていた。

考えることは、悪に堕ちた幼馴染のこと。

先日、その幼馴染と会ったという麗日の話を聞いて以来、彼の頭から幼馴染——緑谷出久のことが離れなかった。

~~~~~

——数日前。雄英の校舎にて

「なんだよ、丸顔。話って」

放課後、空き教室に麗日に呼び出された爆豪はイライラした様子で現れた。

そんな爆豪に麗日は真剣な表情で言う。

「私、この間、骸無と会ったよ」

「なっ、あいつと!?! どこで!?!」

「爆豪君が来なかった、みんなでいったショッピングモールで」

「はあ!? なにしとんじや、あいつ」

思いがけないところでの遭遇に驚くと同時に行っておけばよかつ

たと後悔する。

だが、過ぎてしまったことは仕方がないとその時の様子を聞くことにした。

「で？ それでなんか話したのか？」

「うん……私、少しだけあの子の気持ちを聞いた。すごい、苦しんでた！」

顔をクシャリと歪めて泣きそうになりながら話す麗日。

爆豪は、出久が苦しんでいたという言葉に少々怯む。そして、何かを言うこともなく黙って話の先を促した。

「彼、〃無個性〃ってことにすごい苦しんだ。バカにされて、否定されて、誰も自分のことを認めてくれないって……最後に、ヴィランこそが自分の居場所だって」

「あのデクが!？」

麗日の最後の言葉を聞いて爆豪は何かの間違いじゃないかと、とても信じられない気持ちだった。

あれほど一心にヒーローに憧れて、キラキラとオールマイトや多くのヒーローを見つめていたあいつが……。

十年近く近くでその姿を見ていた爆豪にとって、ヴィランであることを認める緑谷出久というものが理解できなかった。

呆然とする爆豪に向かって、麗日は言葉を投げかける。

「その 〃デク〃 って呼び名、すごい嫌ってた。 〃デク〃 って呼び名は『努力』や『頑張ろうとする意思』を否定される象徴みたいな言葉なんだって」

「あ、ああ……」

言葉をなくす爆豪。

麗日は涙を流しながら語る。

「私、知らなくて、彼のことを傷つけた。デクって言葉を聞いて笑いなから怒ってた。」

爆豪君、私、どうしたらいい？ 私じゃ助けられなかった。私のせいで、私のせいなのに何も言えへんかった……」

顔を覆ってすすり泣く麗日に爆豪はそつと肩に手を乗せる。

「おめえのせいじゃねえよ。悪いのは……」

「爆豪……くん？」

珍しく優しく声をかける爆豪に麗日は驚いて顔を上げる。そこには何か覚悟を決めたような表情をした爆豪がいた。

「あいつは俺が救ける。俺には責任があるからな」

~~~~~

自分がつけた「デク」というあだ名。

それが緑谷出久に与えていた影響を知った爆豪は、改めて自分の言動を省みる。

そして、あの幼馴染との決着を、悪の道に進ませてしまった彼を止めるのは自分の役目だと決意するのだった。

「そのためにも、この合宿で力をつけなきゃならねーんだ」

爆豪は、静かに闘志を燃やす。

~~~~~

雄英の合宿先から少し離れた崖の上。

骸無は雄英の合宿の様子を見下ろしていた。

「地獄の特訓ってところかな。ふうん、それぞれの個性を伸ばす訓練とおもしろいね。」

でも、あんなのまだまだ地獄の一丁目。これからが本当の地獄だ。そうだろ？ みんな？」

振り返る骸無。

十体の脳無が静かに並んでいる。

襲撃までのカウントダウンはもう始まっている。

## 緑谷出久は合宿に来ました 前編

雄英高校ヒーロー科 一年生 夏季強化合宿

木々の生い茂る自然豊かな人里離れた山の中。

雄英高校ヒーロー科一年生の合宿はすでに三日目を迎えていた。

初日から森を妨害を受けながら合宿所まで走破するという洗礼をうけ、一晩休めたと思っただのも束の間。

翌日の早朝より、各々の個性を伸ばすという名目のもとで行われるもはやかわいがりともいえる訓練。

日ごろから鍛えているヒーロー科の生徒を疲労困憊に追い込むには十分すぎる内容だった。

加えて補修組は睡眠時間を削って授業を受けるなど、生徒たちの思い描いていた楽しい合宿は夢と消え、地獄の一丁目と化していた。

苦しくとも自らの血肉に変えるための厳しい鍛錬の場。

しかし、そこはすでに血の流れる戦場へと姿を変えていた。

「虎あー！ ピクシーボブが！ ラグドールが！」

雄英の合宿に協力しているヒーローチーム、ワイルドワイルドプツシーキャッツの司令塔マンダレイが普段の冷静さをかなぐり捨て、個性を使うことも忘れて、傷ついた仲間を腕に抱え叫ぶ。

傷ついているのは彼らだけでなく、十体もの脳無によって生徒たちも負傷者がでていた。

「くう、ああ!!」

「マンダレイ！ 貴様ツ！」

マンダレイもまた倒れ伏した。

それを見てプツシーキャッツきつての武闘派『虎』は下手人を睨みつけ吠える。

プツシーキャッツたちを無力化した下手人。それは故人「骸無」であった。

骸無は最初の奇襲により脳無の能力を把握できるラグドールを狙い仕留めた。

これで複数の個性を持つ脳無の優位性を確保し、続いて地形の操作

をして有利な場を整えられる前にピクシーボブを倒した。

そして、全体に指示と情報を送り味方の連携を強化するマンダレイも倒す。

集団戦に於いて、厄介な個性を持つヒーローを優先的に仕留めることで、アウェイな場所で優位な状況を作り出し出した骸無。

生徒を除けば残っているのは直接戦闘に関わる個性ばかり。

多少戦闘能力が秀でた程度では、骸無にとって障害になりえない。

「バカな。私のキャットコンバットが通用しないだ」と！

現に骸無は虎をいとも簡単に無力化して見せた。

自身の技をすべていなされ、あっさりとかウンターをくらい膝をつく虎。

驚愕に顔を歪めていると、骸無は何でもなないように告げる。

「悪いけど、あなたの格闘術はもう攻略済みだよ。キャリアア12年のベテランのヒーロー。それだけに戦闘記録は多かったからね」

「我を研究し尽くしただど？ 短期間でそんなこと……が……」

意識を失う虎。

骸無は最後の言葉を聞いて不愉快そうにつぶやく。

「短期間じゃないさ。ボクは10年間ずっと見てきたんだ」

倒れたヒーローたちをあとに足を進める骸無。

戦況をみれば、雄英の生徒たちは二人の教師の指示のもと、なんとか脳無たちと渡り合っていた。

茨でできたバリケードを強固な盾で補強。補強の材料はテープだろうか？

巨大な氷結と炎上網で壁を作り、侵攻ルートを限定する。限定されたルートの地面はやわらかく沈み込む沼のような状態になっていて足の動きを奪う。ついでに、強酸と粘着質の球体が配置されてそれがまた足を止める。

即席の防御陣地を作り上げることで、負傷者を保護しながら応戦しているのはさすが雄英の生徒だ。

しかし、この程度の陣地など、骸無が参戦すれば崩れるもろい城ではない。

それをさせないためには誰かが骸無の相手をする必要がある。  
そして、その相手がだれになるのか、骸無はなんとなく予感していた。

「やっぱり来たね。かつちゃん」

「てめえ……！」

爆発音とともに現れた爆豪に骸無は仮面の下で目を細めた。

この場で自分を止めに来るのは彼しかない。

そんな予感めいた思いが現実になって現れた今、骸無はなぜか期待感で胸が溢れそうだった。

高ぶる気持ちのまま、言葉を放つ。

「決着をつけようか。かつちゃん。この忌々しい腐れ縁も今日でおしまいだ」

「俺はてめえを止めるぞ。この役目はほかのだれにも譲らねえ！」

互いの気持ちをぶつけるように、お互い攻撃を繰り出す。

拳圧と爆風がぶつかり、衝撃波と土煙をあたりにまき散らしている。

土煙から飛び出したのは骸無。続いて爆豪が飛び出してきた。

戦況は驚くことに爆豪が優勢で進む。

これは状況の後押しと、爆豪の気持ちが進んだ結果だ。

襲撃直前まで行われていた個性強化訓練は、生徒たちを限界まで追い込むため自然と疲労がたまっていた。

それが現在の雄英側の苦戦の原因でもあるのだが、爆豪にとって必ずしもマイナスな効果だけではなかったのだ。

汗を流せば流すほど威力が増す「爆破」の個性。

個性強化のため十分な汗をかいていたために、いきなり最大出力を出すことができる状態になっていた。つまり、今の状態がベストコンディションというわけだ。

そして、幼馴染を止めると決意した爆豪はリスクを無視し、最大出力を連続でぶつけることで故人骸無相手に一方的な戦いを演じている。

最大出力で放つたびに手が痺れ、痛みが走る。汗腺に確実にダメー

ジが蓄積されていく。

個性も身体機能の一部。酷使されれば当然疲弊する。

だが、爆豪にとって今はそんなものはどうでもよかった。

自分の痛みより、自分が痛みを与えた相手を救けたかった。

「出久、俺は、おまえに……」

渾身の思いをのせて最後の一撃を放とうとする爆豪。

「ガッー」

しかし、その一撃が放たれる前に骸無は掌打の一つで爆豪を吹き飛ばした。

地面を転がり、土を舐める爆豪は痛みにも呻きながら骸無がまったく本気でなかったことを思い知らされた。

「……なんだ。こんなものなのか」

地に伏した爆豪を見下ろし、骸無はつまらなさそうに言う。

「君と決着をつけるからにはボクも何かしら感じるものがあると思っていたんだ。僕が憧れ、憎んだ君だから。」

でも意外だね。いざ戦ってみたら何も感じなかった。何も」

「出久、おまえ……」

「正直、どうでもよくなったんだ。君のことは」

『愛情の反対は憎しみではなく無関心である』そういったのは誰の言葉だったか。

爆豪が出久を救おうと強く思う一方で、骸無は爆豪への興味や執着を失ってしまったのだ。

それはある意味当然だったのかもしれない。

この場に立つのは、爆豪を憧れ憎んだ『緑谷出久』ではなく、対平和の象徴として作り上げられた『骸無』なのだから。

「さあ、さっさと終わらせよう」

片腕で爆豪の首をつかみ宙に持ち上げる。

左腕を貫手の構えで後ろに引き絞る姿は、くしくもUSJ襲撃の際の焼き直しのようなだった。

だが、爆豪には抵抗の意思がない。彼の心は折れてしまっている。なすすべなく貫手が爆豪の心臓を貫く。

その寸前に銃声が森に木霊する。

「クツ、この攻撃は……」

銃弾に腕をはじかれ、爆豪を取り落す。

そして続けざまに大音量の音撃と木の鞭が迫りくる。

それらを回避した骸無は忌々しげに吐き捨てた。

「ようやく登場か、ヒーロー」

スナイプ、プレゼント・マイク、ミッドナイト、エクトプラズムといった雄英の教師陣にシンリンカムイやMt.レディ、ギャングオルカ、ベストジーニストといった実力派のヒーローたちが救援に駆け付けたのだ。

味方の登場に、雄英生徒たちから歓声が湧く。

「うおおお！ ありがてえ、助かった!!」

「想像以上に早い救援だ。まさか、この襲撃を予期していたというのか?! さすがは雄英高校だ」

鉄哲が歓喜の声を上げ、飯田が驚く。

それに答えるようにブラド・キングが吠えた。

「襲撃に、雄英が何も対策してないと思っただかヴィランども！ ヒーローをナメるな!!」

ブラド・キングが述べた通り、雄英高校は情報が漏れていることをすでに織り込んで合宿の計画を立てていたのだ。

万が一に襲撃が起こった場合、逆に襲撃者たちを返り討ちにできるような体制を整えていたのだ。

骸無のスペックと襲撃の規模が大きく、被害は出てしまったものの、雄英は万全の備えとして最高のカードを用意していた。

雄英の、いや、ヒーローの最高とは何か？

そんなもの、当然決まっている！

「もう大丈夫！ 何故って？ 私が来た!!」

最高のヒーロー、オールマイト以外にいないはずがない。

「さて、反撃の時間といこうか」



## 緑谷出久は合宿に来ました 後編

ヴィラン連合の改人・骸無。

対「平和の象徴」として造られたそのスペックは並のヒーロー程度ならば相手にならず、戦闘に秀でた実力派のヒーロー数人を相手にしても勝利を収めることができるだろう。

他者の追隨を許さない戦闘能力。

それこそが、骸無の神髄。求められた能力だ。

それゆえに、この場で骸無の相手は決まっている。

DETROIT SMASH !!

No. 1ヒーロー オールマイトだ。

「グッ！ このままでは」

オールマイトのスマッシュが骸無を吹き飛ばす。

彼は今、骸無を相手に一方的な展開へと持ち込んでいた。

劣勢の状況に骸無は焦りを見せる。

スペックだけならばいまのオールマイトを超える骸無が一方的にやられている理由。

それは、味方の存在に他ならない。

プレゼント・マイクの声の砲撃に吹き飛ばされ、Mt. レディの強力な一撃、スナイプによる狙撃で打倒される骸無。

ミッドナイトの個性で眠らされ、ギャングオルカの音波で麻痺させられる骸無。

バストジーニスト、シンリンカムイ、エクトプラズムらの拘束系の個性は瞬く間に骸無の動きを封じていく。

10体の骸無といえど、歴戦のヒーローたちにかかれば戦力としては不十分だ。

骸無が援護をせねば、全滅する未来は避けられない。

そして、その援護を許すほどオールマイトは甘くない。

「よそ見とは余裕だな、緑谷少年！」

「チッ、邪魔をするな。オールマイト!!」

脳無へ向かう進路をことごとく妨害され、舌打ちをする骸無。

身体能力の差を、戦闘経験の差で埋めてくるオールマイトに決定打を打てない。

ならばと、身に着けた炎熱系の個性で焼き殺そうと右手をあげた骸無。

S M A S H !!

「グフッ！」

何もできず直撃を受けて地面を何度もバウンドすることとなった。

ダメージをこらえて即座に立ち上がった骸無は忌々しげにそのヒーローの名を呼ぶ。

「イレイザー・ヘッド!! よくもボクの個性を!!」

「個性を複数持っていることは知っている。そう分かっている俺が好きにさせるわけではないだろう」

増援のヒーローが来たことで、余裕ができたイレイザー・ヘッドがオールマイトの援護にまわっていた。

例えどんなに個性を持っていようと、それが抹消されていれば意味はない。

そして骸無の身体能力についてこれるパートナーが、オールマイトがいればその役目は十全に発揮できる。

イレイザー・ヘッドとオールマイトのコンビ。

これこそ、骸無・脳無といった複数個性・身体強化という特徴を持った改造人間を封じる対策のひとつである。

『イレイザー・ヘッドの個性には制限時間がある。それまで耐えればこちらにも勝機があるはずだ』

そう思っただけでオールマイトに向き合う骸無であったが、強化服がコスチューム身体を締め付け動きを妨げる。

こんなことができるのは一人しかいない。

繊維を操るといって「人類が服を着ている以上有効」な個性を持ったNo.4ヒーロー、ベストジーニストだ。

「向こう側がおおかた片付いたから助けに来たが……なかなか手ごわい相手だな。ここまで拘束していてまだ動けるのか」

「ベスト……ジーニストオー！」

優雅ともいえる動作で現れたベストジーニストを睨みつける骸無。状況は刻一刻と悪い方向へ流れている。

仕切り直しのために動かせるだけ全力で跳躍するが――

タイタンクリフ

「ぐああー！」

「痛ったー！ 結構勢い強かったわよ、いま」

巨大化したMt.レディによって叩き落とされ、逃走失敗。

ヒーローたちに囲まれてしまう。

『クツ、ダメージが……そろそろダメだぞ。これは』

フラフラになりながらも立ち上がる骸無。

オールマイトはその前に立ち、降伏を勧告する。

「もう終わりだ緑谷少年。脳無たちはすべて無力化した。残るは君だけだ。おとなしく無駄な抵抗をやめたまえ！」

オールマイトの言葉に視線を移せば、脳無たちは鎮圧されてしまっていた。

「ボクが……負ける？」

孤立無援。四面楚歌。

そんな絶体絶命の状況で骸無は……ヒーローたちに嘲笑を投げかけた。

「ククツ、ハハハ、ギャハハハ！ 勝ったと思ってるだろ！ これで勝ったと、ボクと脳無を捕まえて終わりだ!! 笑っちゃうねホント」

ゲラゲラと下品に笑い声をあげる骸無に、ヒーローたちは警戒を露わにする。

この期に及んでまだ何かするつもりなのか。

いままでの経緯を見て骸無という改造人間は油断できない相手だった。

だが、その骸無の口から驚くべき言葉を聞くこととなる。

「ボクがここで勝とうが負けようがどうでもいいことだ！ オールマ

イト、そして雄英の教師がこんなにもここに来た時点でボクの目的は達成されてる！」

「ハア!? そりゃあ、どういう意味だオイ！」

プレゼント・マイクが言葉を荒げて詰問すると、骸無は割れた仮面から笑みを見せて言う。

「合宿の襲撃がうまくいけばそれはそれでよかった。その結果は雄英の、ヒーローの無力さを世間に証明した証だから。

でも、そうならなかった場合。つまり今みたいに襲撃を防衛できる戦力がここに集まっていた場合は作戦は第二段階に移る」

「戦力? 脳無と骸無……まさか!」

何かに気が付いたギャングオルカが拘束されている脳無に振り返る。

ヴィラン連合の改人は他にもいたはず。それがたった10体の脳無だけで襲撃は数が少なすぎる!!

つまり、こいつらは……

「そう、ボクたちは囷。本命はヒーローが出払い少なくなった雄英高校だ！」

「雄英高校だと!」

情報が漏れていることを踏まえて動いた雄英の合宿だったが、その裏をかいたつもりの作戦もヴィラン連合には予想の範囲内であった。

襲撃が上手くいけばそれでよし。うまくいかなければ次の手を。

謀略を仕掛けるのはヒーローではなくヴィランの得意とするところなのだから。

そして、ヴィランはさらに一手駒を進める。

「あら? どこか焦げ臭い匂いが……もしかして!」

ミッドナイトが異臭に気が付き、空を見上げる。

森から黒煙が上がっている。気がつけば周りは火の海となっていた。

増援に駆け付けたヒーローを逃がさぬための手段に、ヴィラン連合は森への放火を躊躇なく行ったのだ。

「一時の勝利おめでとうございます。オールマイト。次は雄英高校で

会いましょう」

「なにを言っているんだ……少年!？」

皮肉げな笑みを浮かべた骸無が、オールマイトの目の前でドロドロに溶けだして消えてしまった。

今まで目の前にいた骸無は贗物だった。

「くそ、やられた!」

イレイザー・ヘッドが悔しさに地面を叩く。

この場でヒーローが得た勝利は……あまりにも価値の少ないものでしかなかった。

|||||

———  
雄英高校

「あつ、とうとうおまえやられちゃまったみたいだぜ、骸無」

覆面のヴィラン、トウワイスが骸無に話しかける。

骸無は落ち着いた様子で答えた。

「そう、お疲れ様。よくやってくれたよ」

「ああ! 俺ががんばってたぜ」「めっちゃ暇だった!」

正反対なことを言うトウワイスの言葉を気にした様子もなく骸無は歩みを進める。

その足元には雄英教師のヒーロー「セメントス」が血まみれで倒れていた。

生徒たちを避難させるために立ちはだかったヒーローは彼が最後。

あととはまともな戦力はいないはず……そう思っていたのだが。

「君は誰だい?」

「俺は雄英高校ヒーロー科三年生。ヒーローネームは『ルミリオン』さ! ！ ！ここで止めるぞ、ヴィランども!」

通形ミリオ。雄英ビッグ3と称される将来有望のヒーロー候補。

その一人が骸無の前に立ちはだかる。

「邪魔するなら……消すだけだ」

「できる……ものならね!」

ぶつかり合う二人。

オールマイトの後継者候補であった二人が、立場を違えて対峙する。

それは、ありえた可能性からは考えられない悲しい出来事だった。

## 英雄失墜編（バッドエンド最終章）

緑谷出久は〇〇〇〇になりました

——雄英高校 職員室

普段は教師達が日々の職務を行うその部屋はひどく荒らされ、書類や教科書が無造作に撒き散らされている。

その場所で、死柄木と骸無は二人きりで向かい合っていた。

「話つてのは何だ、骸無。俺はこれでも忙しいんだぜ？」

作戦は既に大詰め、あとは人質を餌にオールマイトをおびき寄せ、血祭りに上げるだけの状況だ。

そんな大事な時間を、骸無によって呼び付けられた死柄木は苛立ちを隠さずに骸無へぶつける。

が、死柄木の苛立ちなど気にも留めない様子で骸無は用件をこともなげに言い放った。

「うん。悪いね、死柄木くん。でも大事な話が、いや、頼みごとかな？があるんだよ」

「頼み？ おまえが？ 冗談だろ。付き合ってられないね」

死柄木が呆れた口調で返事をしてさっさと出口へ向かい始める。

たとえヴィラン連合の最高戦力の一つとはいえ、骸無は一戦闘員にすぎない。

この大事な局面で一戦闘員の要望など聞いている暇などなかった。

その背に向かって、骸無はとんでもない一言を放つ。

「オールマイトを殺す手筈はボクに任せてほしい」

「……なんだと？」

骸無の言葉に思わず死柄木は振り返り、聞き直す。

その言葉は間違いではなく、骸無はもう一度同じことを告げた。

「オールマイトを、平和の象徴を殺す最終段階はボクに任せてほしいと言ってるんだ」

「ハア？ 正気で言ってるのか？」

「正気だよ。ボクにはオールマイトを殺す算段はもうできてるんだ」

オールマイト殺害に自信を持つ骸無に死柄木は不信の目を向ける。骸無は確かに対オールマイトを想定して造られた改造人間だ。スペックだけならオールマイトを超えることは間違いない。だが、それだけで勝てるほどオールマイトは甘くはないことを知っている。

過去の敗北。過去のデータ、経験。

それらを経て学習を重ね、成長を遂げた死柄木はそう簡単に博打に出るような真似はしない。

リスクを考え、目的の遂行に最適な手段を探る。

そんな集団を率いる者として当然の考えを身に着けつつあった死柄木にとって、骸無の提案は受け入れられるものではない。

「……そっか。ボクが勝てるか信じられないんだね。そりや当然だよね。失敗できないんだから。」

でも、ボクにはまだ誰にも知られていない切り札があるんだ」

「切り札？ 何のことだ？」

「それはね——」

死柄木の不信を感じ取り、自分の意見を通すために秘密をそつと耳打ちする骸無。

密かに伝えられた事実は、死柄木を驚かせ、かつ恐怖させるにふさわしい一言だった。

「おまえ、本当に？ そんなバカな!!」

「本当だよ。証拠をみせようか？」

驚愕に目を見開き、骸無をただただ見つめるしかない死柄木。

骸無は嗤う。己の力を見せびらかすように、誇るように。

骸無の告げた通りなら、ヴィラン連合に、いや、ヒーローにすら骸無を止められるものはいないだろう。

つまりそれは骸無がその気になればヴィラン連合を無視して行動に移せるという意味でもあった。

「死柄木くん、ボクも手荒なことはしたくないんだ。受け入れてくれないかな？」

「骸無、おまえッ！」



もはや頼みごとの体をした脅迫だった。

死柄木に選択肢などなく、答えは「Yes」か「はい」のどちらかしかない。

苦渋の表情に歪む死柄木の決断を促すために、骸無は甘い毒を流し込む。

「死柄木くん。これでもボクはキミたちに感謝してるんだ。こうして力を得ることができたのもキミたちのおかげだし。

だから、今回ボクの好きにさせてくれたなら、今までと変わりなくボクは力を振るうよ。ヴィラン連合のために」

履行の保証などない口約束。

だが、これは骸無の最大限の譲歩だ。死柄木はそれを信じて受け入れるしかなかった。

こうして、オールライト抹殺の采配は骸無の手に渡った。

かつてヒーローに憧れた少年が、嬉々としてNo. 1ヒーローの殺害を計画する。

悲劇だ。悪夢だ。残酷な運命だ。

しかし、もはや止められない結末だった。

「骸無。おまえは何のためにこんなことをするんだ？」

「ボクは……刻み付けたいんだ。オールライトを殺すことで、この個性社会に“ボク”という存在を」

|||||

『オールライトに告げる。雄英高校の生徒と教員は我々が預かっている。

我々はオールライトとの決闘を要求する。

場所は雄英高校の大運動場。時刻は明日の正午。一人で来ることだ。

もし、条件を破るならば人質の命は保証しない』

TVの電波をジャックして犯行声明を出すヴィラン連合。

画面には気絶した根津校長と磔にされた教師たちが映し出されている。

オールライトは拳を握りしめ、覚悟を決める。

「いいだろう。その挑戦受けてやる。何があろうと、平和の象徴は倒れないことを教えてやる！」

決戦まで、あとわずか。

## 緑谷出久は〇〇〇〇になりました 前編

—— 雄英高校 大運動場

以前、雄英体育祭の会場となったその場所で、骸無は一人静かにオールマイトを待っていた。

会場にはテレビカメラが設置され、オールマイトとの戦いを全国に映し出す算段となっている。

オールマイトが、『平和の象徴』が殺害される場面を見せつけることで世間に絶望を与える作戦だが、この作戦は骸無が負けてしまえば意味のなくなるもろ刃の剣。

つまりは、それだけ骸無の戦闘能力に自信を持っているということだ。

時刻はもうすぐ正午。約束の時間だ。

太陽がほぼ真上に位置し、夏の日差しが強く照りつける中、オールマイトがついに姿を現す。

「来ましたね。オールマイト」

「ああ、私が出来た！ 人質は無事だろうか？」

ゆつくりと会場中央へ歩み寄りながら人質の安否を気遣うオールマイト。

骸無は返事を返さず、ただ片手で合図を出す。

会場のモニターの1つが切り替わり、人質となっている教師と生徒たちが映し出された。

「ご覧のとおり、一部を除いて命に別状はありませんよ」

「一部を除いて？ 全員の無事を約束したはずだろう!？」

骸無の言葉に不穏なものを感じ取り、オールマイトは声を荒げる。対して、骸無はため息を吐きながら首を横に振って答えた。

「残念ながら学校に残っていた教師とヒーロー科の生徒は抵抗してきただのでやむなく戦闘になりました。」

さすがは、雄英高校ですね。手加減ができずに殺してしまった生徒がいたのは想定外でした」

悔やむ言葉を口にしながらもその口調は微塵も後悔を感じさせない白々しいもの。

その悪びれない姿に、オールマイトは悲しみと怒りで奥歯をギリツと軋ませて骸無を睨みつける。

「緑谷少年、君は……」

「約束は破っていませんよ。『人質』には手を出していません。まあ、人質になる前は知りませんが」

と、嗤う骸無の姿は完全に悪党サイランそのもので。

この少年は悪の道に染まってしまったのだと、オールマイトに感じさせるには充分であった。

「少年。私は君を救ってみせる。本当は悪の道なんか進むべき人間じゃない！」

「救う？ ハハッ！ 何をいまさら。既にボクは救われている。かつては無かった個性カを得て！」

「やつの力は邪悪なものだぞ！ いつか身を滅ぼす力だ!!」

「違う！ これはボクのカだ!!」

オールマイトの悲痛な説得もはや心に届かない。

最後の説得は平行線をたどり、あとはお互いの拳を交えるしかない。

互いに踏み出したその瞬間に、運動場はまさに戦場と化した。

音を置き去りにした打撃が飛び交い、目まぐるしく位置を変えて破壊の後を増やしていく。

次々と移り変わる攻防の行方は、次第に骸無の優勢へと傾いていった。

二人の身体能力はほぼ互角。ならば持っている手札・戦術の数が戦闘に有利に働くことは想像に難くない。

「個性の数が違う！ あなたの『ワン・フォー・オール』一つではボクに勝てない！」

「まだまだ！ 多少個性が多いくらいで私を倒せるとは思わないことだ、少年!!」

数々の個性に翻弄されようと、これまでの経験が、矜持が、自負がオールマイトを奮い立たせる。

平和の象徴としてヒーローのトップに君臨してきた矜持は、劣勢になつてなお強気の姿勢を支える力となつていた。

その強さを、オールマイトの黄金の精神がもたらす強さを十分骸無は知っている。

ゆえに、切り札の一つを切る判断を下した。

「やっぱりすごいなあ、オールマイトは。」

でも、その姿は虚飾まみれだ。嘘つき、偽善者、世間をだますペテン……その虚飾、引っpegがして本当の姿を晒し出してやる！」

右手に何か個性を発動させて突進してくる骸無。

突き出された右手に危険を感じて回避を選択するオールマイトであつたが、かする程度にわずかにその右手に触れてしまった。

そして、その効果は……絶大だった。

「グッ、これは!？」

やせ細り幽鬼のように貧弱な姿、トゥルーフォーム強制的に戻されてしまった。

これが骸無のもつ切り札の一つ。

「触れた相手の個性を無力化する個性」その名を『個性殺し』パワーストリーブレイカー

「すごいでしょう？ オールマイト。触れただけで個性を一定時間無効化できるなんて。ただ、強力過ぎて一度使うとしばらく使えないのが難点ですけどね」

余裕の表れか、自らの個性を嬉々として語りだす骸無に、オールマイトはなお強い意志を宿て眼光鋭くにらみつける。

「私はこの衰えた姿を世間に隠してきた。市民の皆さんを不安にさせないため、平和の象徴が健在だと知らしめるために。」

それをこうして晒されたのは確かに今後を考えると頭が痛い問題だろう。しかしな！」

隠してきたみじめな姿を世間に晒されようと。

身体は朽ちて衰えようと。

「ここで諦めるようなことは絶対ないぞ！ 私の真の姿が晒されよ

うと、私が戦う意志を折ることなどない!!」

その心はいまだ平和の象徴。一点の曇りのない輝ける意志だった。姿は変われどその信念に揺らぎはなく、まっすぐに骸無へと視線が向けられている。

「……やっぱりこれくらいで折れるような人じゃない。ずっと見てきたから分かったことだ。

むしろ、こんなピンチの時こそあなたは笑って切り抜けてきた」

オールマイトについて、本人を目の前にして語りだす。

その言葉には、悪意が隠れている。

「まずはその笑顔を奪ってみせよう」

「できるかな、君に？」

不敵に笑うオールマイトに骸無は、致命傷となる毒の言葉を紡ぎだす。

「できますよ。さすがのオールマイトも恩人の家族がヴィランになっていたと知ったら傷つくでしょう？」

「な……に……う？ どういう意味だ!？」

意味ありげな骸無の言葉がオールマイトの不安を煽る。

その不安を見抜いているからか、骸無は結論をすぐ述べずに回りくどい話し方で語り始めた。

「先代 ヴン・フォー・オール」志村菜奈。彼女は夫を殺された際、また自らの持つワン・フォー・オールの運命に巻き込まれないよう子供を里子にだした。

わざわざ、ヒーローに関わらないよう遠ざけてね」

「それが、何だというんだ!」

「察しが悪いのか、それとも認めたくないのか……どちらでもいいか。これ以上焦らしてもしょうがない。結論を言おう。

ヴィラン連合の首魁死柄木甲は志村菜奈の孫だ」

朝食のメニューを言うような気軽さで告げられた事実。

それはオールマイトの心をくしゃくしゃにかき乱す。

「嘘を……」

「言うなっつて？ アハハ。オールマイト、ボクの『先生』のやり方は

良く知っているはずでは？ 分かっているはずだ、これは真実だつて」

師の家族が悪となり、自らが手に掛けそうになっていた。

その事実を伝える役目を与えられたのは、かつて自分の後継者に選ばうと思つたヒーローの輝きを持っていた少年。いまは悪に染められてしまった、後継者候補。

さすがのオールマイトと言えど、その笑顔を歪めるには十分すぎるほどのショックを与えていた。

「ギャハハ！ Why so serious？

ほら、笑つて、オールマイト。いつもの『恐れ知らずの笑顔』はどうしたんです？ いつものスマイルは！」

仮面の下で、骸無は愉悅に表情を歪めていた。

かつて憧れ、しかし真実を知らされ、現実を突き付けられた相手、オールマイトへの歪んだ感情を爆発させる。

昔の自分が大事にしていたものを無茶苦茶に汚す狂った悦びは言いようのない快樂に感じられたのだ。

「ハッ、所詮はこんなものだ、オールマイト。ヒーローの重圧と内に沸く恐怖から己を欺くための薄っぺらい笑顔なんてこうやって容易く奪えるんだから」

罵倒をする骸無。

オールマイトは何事かを小さくつぶやく。

「人々を…… 平和…… 決し…… 悪に……」

「何か言つた？」

途切れ途切れで聞き取れずに聞き返す骸無。

オールマイトは再び瞳に光を灯し、顔を上げる。

『人々を笑顔で救い出す 平和の象徴』は決して悪に屈してはいけない』

あの時、私はこうも言つたはずだ、少年。

悲しいことだ。師匠の家族のことを思えば悔やみきれない。

その事実を伝えたのが悪に染まった君だということに胸が痛む」  
右手で胸のあたりをギュツとつかみ、血を吐くように告げる。

だが言葉の力強さはまだ失われていない。

「しかし、ヒーローには守るものがほかにも多くあるんだ。

守るものが多くて、プレッシャーは常に隣にある。だからこそ、ヒーローは負けない。負けられない！」

「守りきれなかったあなたが、僕を救ってくれなかったあなたがそれを言うのか!! もう御託はたくさんだ。だいたい、そんな体で何が出るー！」

どんなに言葉を重ねようと、いまのオールマイトは力はない。

そう告げる骸無にオールマイトは再び不敵な笑みを浮かべる。

「少年、一つ教えてやろう。『ヒーローは助け合い』だ。平和の象徴は私だけだが、ヒーローは私だけじゃない！」

オールマイトの声にこたえるかのように校舎のどこかで騒音が響く。

骸無はその強化された聴力で場所を把握。事態を察知した。

「人質が……」

『オールマイト！ 人質の救出作戦は成功だ！』

映し出されていたモニターにブラドキングが映りこみ人質の救出を告げる。

それに合わせて運動場にも次々と人影が現れてきた。

「ここは雄英高校。我々の母校だ。映し出された背景からどの場所か特定することなど容易いものだ」

「こっちは現役の教師もいるんだ。地の利はこちらにあると言ってよかった」

ベストジーニストがヒーローたちを率いて現れ、イレイザー・ヘツドが捕縛布を構えながら個性を抹消する。

人質がいなくなればオールマイトが一騎打ちを受ける必要はなくなる。

そうなれば危険度の高い骸無を相手に戦力を増やすのは当然の判断だろう。

「まさか卑怯とはいわないだろうか？ 人質という卑劣な作戦をとったのはそちらなのだから。」



多少こちらの人数が多いくらいなんともないだろう」  
次々と武闘派のヒーローたちが会場に姿を現し、骸無を包囲して  
いく。

「さあ、覚悟しろ改人。ヒーローはオールマイイトだけじゃないと教え  
てやる」

イレイザー・ヘッドが告げる。

平和の象徴は一人でも、平和の守護者は一人ではない。  
彼らは各々の正義を胸に、骸無を追いつめる。

絶体絶命のピンチに、骸無は仮面の下で嗤っていた。

## 緑谷出久は〇〇〇〇になりました 後編

—— 雄英高校校舎

人質救出のための別動隊は、気絶している教師を抱えながら生徒たちの避難誘導をしていた。

「慌てないで、順番に指示に従って動きなさい」

「ミッドナイトが生徒たちを落ち着かせるように声をかける。

男性のセメントスを肩で支えながら移動するのは大変だろうに、そんな弱音を見せることは無い。

同じく救出班のブラドキングも根津校長を腕に抱えながら避難誘導を続けていた。

しばらくしているうちに、根津校長が目を覚ます。

「校長、お気づきになりましたか。ブラドキングです。大丈夫ですか？ お怪我は？」

「……………ヂュー!!」

「校長!? 落ち着いてください! 私です、ブラドキングです」

矢継ぎ早に質問を投げかけるものの、根津校長は暴れるだけでまったく会話にならない。

まるでただのネズミになってしまったかのような反応に違和感を感じるブラド。

このままではいけない。なにか重要なことを見逃している。

そんな漠然とした不安を覚えたブラドはミッドナイトに声をかけた。

「ミッドナイト! 緊急事態だ。校長が混乱して暴れているから個性で眠らせてくれ!」

「分かったわ。すぐ行くから待っててちょうだい」

すぐさま反応して駆けつけてきたミッドナイトによって根津校長は眠りにつく。

ホッと一息つく間もなく、ブラドはミッドナイトに用件を告げる。

「ミッドナイト、セメントスの容体は? 起こせるようなら起こしてくれ。ダメならほかの教師たちの中で誰か別の人を頼む」

「どうしたっていうの？ 特に理由がないのなら彼らに無理をさせるべきではないわ」

「そうだな。だが、いま確認せねば悪いことになるような気がするんだ」

長年ヒーローを続けてきた勘のようなものでしかないが、その勘が最警戒を告げている。

「とにかく、誰でもいいから話を聞かねば。嫌な予感がする」

|||||

—— 雄英高校 大運動場

ヒーローたちによって包囲され、イレイザー・ヘッドの『抹消』によって個性は使えず、ベストジーニストの『ファイバーマスター』によって身体の動きは制限された。

普通のヴィランならば詰みの状況。

前回の合宿場で戦った際の焼き直しのようなシチュエーション。いや、ヒーローの人数が多い今回はさらに有利と言っている。

もはや勝利は間違いないと確信するヒーローたちを骸無は嘲笑う。

「ボクの裏をかいて勝ったつもりになっている。滑稽だなア。全部ボクの想定通りだというのに」

「ハツタリをかますな。もう詰み、終わりだよ、おまえは」

骸無の言葉を戯言だと一蹴するイレイザー・ヘッド。

彼の捕縛布をはじめとした拘束系の個性を持つヒーローたちによつてがんじがらめに縛られた状態に、他の攻撃技をもつヒーローたちが必殺技を放つ用意をしている。

完全に骸無を気絶させるには全力で当たるしかないと分かっているからこそ、容赦のない全力攻撃の決断をしたのだ。

「ここまで予想通りだと楽しいな。やっぱり『ハイスペック』つてのはすげえ」

ヒーローたちの攻撃を前にして、ひとり呟く骸無。

この期に及んでまでまだ余裕を崩さない骸無からは不気味なプレッシャーを感じさせられた。

何かされる前にとどめを刺す。

ヒーローたちが攻撃を仕掛ける——その瞬間。

『みんな！ 逃げて、そいつは——』

救助班のマンダレイからテレパスが届く。

しかしそのメッセージが伝えきられる前に骸無は動いていた。

「だいたい、二度も同じ戦法が通用すると思っっているのが間違いだよ」  
仮面が外れ、地面に触れた瞬間に激しい閃光が発生してヒーローたちの目を焼く。

イレイザー・ヘッドの抹消がなければ拘束など個性を使っただけでも抜け出せる。

その一瞬で起こした行動目的は、当然厄介な個性を潰すことだ。

「ぐ、あああつ！」

「イレイザー!？」

視界が戻った際に見たのは、地面に組み伏せられ背中を骸無の指から伸びる個性によって突き刺され苦しむイレイザー・ヘッドの姿。

苦悶の表情を見せるイレイザー・ヘッド。

そこに遅れてテレパスの内容が届く。

『人の個性を奪う個性を持つているわ!』

「くっ、それはもう少し早く知りたかったな」

シンリンカムイが苦い表情でつぶやく。

他人の個性を奪う個性など、とてもじゃないが信じられないことだ。

だが、先ほどの骸無の言葉を聞いていた雄英のOBたちには納得できる部分があった。

自分の性能を自慢するような発言。あのときに言っていた『ハイスペック』とは、根津校長の「個性」のことだったのではないか？

その予想を証明するように、続けてテレパスが届く。

『根津校長と、セメントス、パワーローダー、13号。確認できたのはこの4人だけだけど、個性の発動ができなかった。彼らの個性も使える可能性があるわ、気をつけて!』

その報告に全員の表情が凍りつく。

この超常社会で個性が奪われるということがどれだけの恐怖なのか想像に難くない。

だが、その恐怖を乗り越えてこそヒーローだ。

「何を呆けたツラしてんだよ、オメーラ！ 早くイレイザー・ヘッドを救けるんだ!!」

呆然としているヒーローたちにプレゼント・マイクが檄を飛ばす。彼とイレイザー・ヘッドは長い付き合いの友人だ。その友人のピンチを黙って見えていられるマイクではない。

彼につられてほかのヒーローたちも骸無へと攻撃を仕掛ける。しかし――

「うわあー!」

「ぎゃあつ!!」

飛び出した彼らは骸無の触腕によって薙ぎ払われた。

「ソノ個性ハ!?!」

骸無の使った個性を見てエクトプラズムは驚愕に目を見開く。

それもそのはずだ。骸無が使ったのは雄英三年生のトップの成績を誇る、通称「ビッグ3」と呼ばれる生徒の一人、天喰環あまじきたまきの個性なのだから。

「彼ヲドウシタ!!」

「なかなかいい個性だったので貰ってしまいました。ああ、もちろん彼の命は無事です。」

お友達の、なんて言ったかな? ……たしかルミリオンがやられたらあつさり捕まってくれたので、大した怪我もしてません」

「通形マデ……彼ノ個性マデ奪ツタノカ!!」

生徒を傷つけられ、激昂するエクトプラズムに骸無は残念そうに首を横に振る。

「残念なことに、彼は強くて手加減できなかつた。手加減が許されなほどの強いヒーローだった……」

「マサカ、殺シタノカ?」

「ええ、実にもつたいなかつた。うまく使えば有効で、強力な個性だったのに」

「キ、貴様ツ!! 生徒ノ命ヲ何ダトオモツテイル!」

生徒の命を奪ったことではなく、個性を奪えなかったことを悔やむ姿にエクトプラズムは怒りを爆発させた。

「強制収容ジャイアントバイツ」

巨大な自身の分身で相手を呑み込み拘束するエクトプラズムの必殺技。

だが、それは発動することすらできなかった。

「ナンダト!? コレハイレイザー・ヘッドノ……グアア!」

個性を発動させ、髪を逆立てた骸無の目は赤く光っていた。

同僚の個性を敵に使われた動揺を突かれ、エクトプラズムはねじれた波動の直撃を受けて吹き飛ばされた。

あまりに常識の通用しない個性にヒーローたちに恐怖が伝播していく。

そのうちの一人が耐え切れずに叫ぶ。

「なんだよ、その個性は! 一体なんなんだよお!」

その叫びを受けて、骸無は朗々と芝居がかかったしぐさで語りだした。

「この個性は、ボクの心が形になったもの。ヒーローに憧れ、絶望した。個性を羨望して嫉妬に苛まれた心が生んだボクだけの個性だ」

実験という名目で何度も何度もオール・フォー・ワンを受けた緑谷出久の個性は、少しずつ少しずつ変質し、最後は全く別の何かに成り果てた。

「個性を引き受ける個性」から「個性を奪う個性」へと……

「無個性」であったことで苦しんだ緑谷出久の、「個性」を持つ人々への嫉妬の心が形になったかのような個性。

嫉妬に狂った少年の心は、他人の「個性」を喰らって成長する怪物を生み出した。

名付けるならば——

「Greenieyed Monster  
「緑の目をした怪物……」

ヒーローの誰かがおもわず呟く。

まさしくその名がふさわしいだろう。

この嫉妬の怪物は、超常社会の天敵。超常社会の闇が生んだ超常を喰らう化物だ。

「さてと。この場に来ているだけあってみーんな良い個性のヒーローばかりだ。残らず全部喰らえばどれだけの力になるのかなア？」

この場にいるヒーローたちは怪物の餌だった。

獲物を狙う捕食者の目は緑色に爛々と光り、ヒーローたちに狙いを定める。

この運動場は怪物の狩場。ゆえに入り込んだ獲物を逃す理由などない。

「出入り口が!？」

「急にコンクリが動いて……これはセメントスの!？」

「クソッ! 敵にまわるとこんなに厄介な能力だったのか」

退路を断たれ、袋のネズミとなったヒーローたち。

もはや窮鼠となって相手をかみ砕く他に道はなくなった。

たとえ、どれだけ絶望的な相手であったとしても……

骸無とヒーローたちの戦い。

それはまさに悪夢だった。

ベストジーニストが倒れ、プレゼント・マイクが、スナイプが、シンリンカムイが、ギャングオルカが、Mt.レデイが、武闘派のヒーローたちが次々と骸無によって打倒され、個性を奪われていく。

ヒーローが一人倒れるたびに骸無の能力が増え、またそれがほかのヒーローたちを苦しめるという悪循環。

先ほどまで仲間のものであった個性が敵の手に渡り、自分へと向けられる状況は否応なくヒーローたちの判断を狂わせていった。

気がつけば立っているのは二人だけ。

骸無とオールマイイトだけだ。

「ようやくあなたと二人だけになりました。オールマイイト」

「やはり、君はわざと私を残したんだな」

相変わらずトゥルーフォームのままのオールマイイト。

骸無はいつでも彼を殺せたのにこうして最後の一人になるまで手

を出さなかった。

その理由は当然一つだ。

「もうそろそろ個性が使えるようになっていくはずだ。さあ、変身して戦え。」

オールマイトを、〃平和の象徴〃を、かつての理想を、ボクが打ち砕く!!」

「少年……もうこうするしかないんだな」

拳を突き出す骸無にオールマイトはマッスルフォームとなって応じる。

だが、その表情は悲しみに彩られていた。

これから行うのは全力の一撃同士のぶつかり合いだ。

必殺技の打ち合いは今までも何度もしてきた。

だが、今回は以前とは違う。

次の一撃こそ決着の一撃だと二人とも確信していた。

お互い右手にすべてを集中し、必殺の準備を整える。

一拍、一秒。

タイミングを合わせたように二人は飛び出す。

〃United States of SMASH!!〃

〃Crimson SMASH!!〃

最強の技同士がぶつかり合い、一瞬視界を隠す。

立っていたのは、骸無だった。

「これで終わりです。オールマイト。ボクの勝ちだ!」

膝をつくオールマイトに勝利の宣言をする骸無。

オールマイトは、一歩も動くことはできなかった。

「最後に言い残すことはある?」

「言い残すこと、か。伝えたいことはたくさんある。ありすぎて困る

が……最後に一つだけ」

「なにか?」

「正義は、負けないぞ。悪党!」

そうやって最後まで不敵に笑うオールマイトの首を――



「さようなら。オールマイト」  
骸無は切り落とした。

“平和の象徴”は敗北した。  
ヒーローは敗れた。

骸無は、ヒーローに憧れていた緑谷出久は、こうして“恐怖の象徴”  
“となった。

## エピローグ

オールマイトを亡き者にした骸無は、オール・フォー・ワンに呼び出されていた。

「ご苦労だったね。骸無。よくぞオールマイトを殺してくれた」

「当然です。彼の存在は邪魔でしたから。これで懸念となるものはしばらくは現れないでしょう」

オール・フォー・ワンからの賛辞を受け取る骸無。

だが、オール・フォー・ワンの骸無を見つめる視線には不穏な色が混じっていた。

「いや、まだ懸念はある」

「……それは君だよ。骸無」

オール・フォー・ワンの言葉と共にトラップが作動し、骸無を拘束する。

オールマイトという宿敵がいなくなった今、ヴィラン連合を脅かす可能性があるのは皮肉なことに骸無であった。

「つまり、ボクが存在が脅威であり、邪魔になったと？」

「邪魔とまではいかないさ。ただ、君は強くなりすぎた。僕と同じ個性”を放置するなんてことはできないからねえ」

“オール・フォー・ワン”と同じく、他人の個性を奪う個性。

その有効性をよく知るがゆえに、敵となった時の脅威を身をもって実感しているのが“先生”だ。

この懸念材料は一刻も早く排除せねばならない。

「なあに、君を殺すことはしないさ。その厄介な君の個性を僕に渡してくれれば今まで通りだよ」

駒として身に余る個性を奪い、従順な兵士に戻す。

それは正しい判断だろう。

ただ、オール・フォー・ワンには一つ見落としがあった。

「これは……どういうことだ!？」

無抵抗の骸無に個性を使ったオール・フォー・ワンは、突如異変に苦しみます。

全身から力が抜けるような虚脱感。

ぽっかりと何かが無くなったような喪失感。

オール・フォー・ワンは、個性を奪うつもりが逆に持っていた個性の半分近くを奪われてしまっていた。

オール・フォー・ワンの失敗。

それは自らの “All for One” 個性 “Green Eyed Monster” が骸無の “Green Eyed Monster” 個性 “Green Eyed Monster” を

上回ると思い込んだことだ。

緑の目をした怪物は、かつての裏社会の支配者すら呑み込む化物だったのだ。

「ぐう、馬鹿な」

「アハハ！ ボクを侮りましたね？ “先生”。既にボクの力はあなたより上だ。そんなあなたがボクから個性を奪うことはできない。

でも、あなたには恩がある。だから全部は奪わないでおきました。

ああ、死柄木クンにも言ったけれど、これまで通りヴィラン連合のためには働きますよ」

見下したように、用件を一方的に告げる骸無。

「ただし、ボクを思い通りにできるだなんて、間違っても思わないでくださいね？ もしそうなった時には……」

警告をして立ち去る骸無。

それを見送ったオール・フォー・ワンは、一人つぶやいた。

「僕は、とんでもない化物を作り出してしまったようだ」

|||||

オールマイトの敗北後、社会は大きく変化した。

一つはヒーローの存在。

“平和の象徴” が敗北し、有力なヒーローたちが無力化されたあの事件以降、ヒーローたちの信頼は崩れ落ちていった。

ヴィランによる事件に徐々に対処できなくなっていったヒーローたちに、国はある決断を下す。

『ヒーロー制度の廃止』

各ヒーロー事務所ごとの方針に任せていた個性犯罪の対処を、強力

な権力の管理のもとで組織的に行うよう変更したのだ。

いままでのヒーローたちはその資格をなく奪われ、新しく出来た個性犯罪対策の組織に所属を強制された。

反対するヒーローは、危険分子として拘束されていく。

こうしてヒーローたちは社会から抹殺されていった。

新組織により表向きの秩序は取り戻されたが、実態はヴィラン連合の息のかかった組織でしかない。

表向きの平和とは裏腹に、ヴィラン連合による恐怖の支配がはじまっていたのだ。

これに対抗するため、かつてのヒーローたちは地下にもぐり、『レジスタンス』と名前を変える。

レジスタンスの中心は雄英高校のOBを中心とした元ヒーローたちだ。

そして、そのレジスタンスの一員に、爆豪の名前がある。

「デク……おまえは、俺が止めてやる」

のちに「正義の象徴」と呼ばれる爆豪と、「恐怖の象徴」となった骸無。

二人の戦いの決着はまだ終わっていないかった。

## あとがき＋アフター

昨年12月に投稿を始め、約半年と一か月。  
長いようであつという間でした。

投稿した最初は、原作主人公を悪堕ちさせるといふ暴挙に低評価の嵐かと内心ビクビクしていたのですが、意外にも皆さんから高評価をもらってびっくりしていました。

むしろ、「もつとやれ！」的な応援を貰って背中を押ししてもらえた感じです。

まあ、そもそもこの懸念は杞憂としか言いようがなかったみたいですが。

リアルの知人曰く、「こんな分かりやすいタイトルをつけておいて何言ってるの？」だそうで。

言われてみればごもつとも。悪堕ちが嫌いな人はタイトルの時点で察するよなあ、と気が付きました。

そんな経緯もあつて、終わってみれば初期プロットはどこに行ったのやら。皆さんの感想・ご意見が結構影響していたりします。

最初のUSJ編。

最初なので書きたい部分ははっきりしていて、個人的には気に入っています。

まだオールマイトへの気持ちを捨てきれない出久くんと、後継者候補がヴィランにいるというオールマイトの苦悩をかけたのは良かったです。

体育祭編。

ほかの人がやっていないことをやってみたいと、思い切って体育祭をぶっ壊してみました。

ヒロアカの二次創作も増えてきましたが、体育祭をぶっ壊したのはこの作品くらいじゃなかろうか？

まあ、騎馬戦だとかトーナメントだとか主人公が関われないならいつそのこと……という気持ちもありました。

保須市編。

思い切って先代インゲニウムを殺してみたりしましたが、正直いまいちな手ごたえでした。

いろんな要素を入れようとして、うまくまとめられなかった感じですね。自分の実力不足を実感したところですね。

実際、ここを更新しているときはお気に入りが入りがガクツと減ったりしていました。

シヨツピングモール編。

主人公悪堕ちのため、期末試験？なにそれおいしいの？ 状態だったため、シヨツピングモールでの話になりました。

自分としてはこの話が一番よく出来たシーンだと思ってます。

お茶子の「デク」呼びによって、完全に悪の道に堕ちるシチュエーションはずっとやりたいシーンの一つでした。

ヒロインは主人公に影響を与えてこそだと思っているので、お茶子さんには申し訳ないですが最後の一押しをしてもらいました。

このシーンを書けただけでも満足できたところがあります。

そして、この話を書いてから感想に愉悦部が出現するように……

合宿編。

この話は爆豪との決別を意識して書きました。

あれだけこだわっていた爆豪と決着をつけたら、あとはオールマイトだけ。

言い方は悪いですが、爆豪は咬ませ犬になってももらった感じです。

爆豪アンチの人には物足りなかったかもしれないですが、相手にされない屈辱を爆豪には味わってもらいました。

最終章。

オールマイトを殺害するエンドは決まっていました。

途中で思いついたのが、「個性を奪う個性」を骸無が得るという点です。

無個性で虐げられてきた主人公が最後に他人の個性を奪う能力を得るのは、皮肉も効いているし、話の展開としても面白いと思って取り入れました。

オリジナルの個性の名前は、出久くんの目の色と、シエイクスピア

のオセローのセリフから。

嫉妬の怪物というのもマッチしてましたからね。決してパルパルは言いませんが(笑)

全体を通して、よくかけたと思うのは出久の心理的な部分と話のテンポですね。

逆に駄目だったのは、テンポ重視すぎて描写を結構飛ばしたせいで物足りない部分があったところでしょうか。

あとは、戦闘描写はまだまだうまく描写できた気がしません。

これからも精進といったところですね。

一応、これでバッドエンドルートは完結ですが、別ルートを書いていく予定です。

これからもよろしくお願いいたします。

くオマケ バッドエンドアフターく

血の匂いが辺りに満ちている。

「逃げろ！ 奴だ!!」

「くそー！ なんであいつがここに」

「泣き言はいいから、足を動かせ！」

傷を負いながらも必死に逃走を図るレジスタンスたち。

「逃げられると思っているの?」

追いかけるのは「恐怖の象徴」、骸無。

「駄目だ。このままじゃ全滅だ。俺が足止めをする。ソレを仲間にならず届けろ！」

「お前だけじゃ無理だ！ オレも残る！」

「行け！ 振り返るな!!」

一人が仲間に従われ、唇を噛んで走り抜ける。

いま、彼の手の中には「最後の希望」が残されているのだから。

|| || || || || || || || || ||

オールマイトが死んでから早くも10年。

無個性の少年、赤谷海雲あかたにみくもには生きにくい世の中だ。

ヒーロー制度が無くなって、個性はより管理され抑圧されるような世の中になった。

そのくせ、個性を使えることは一種の特権的な扱いで、良い個性はまだ優遇されている。

むしろ、無個性は10年前よりもひどい扱いだ。

10年前に刑罰の一つとして“個性の剥奪”が認められて以来、“無個性”は犯罪者の証のような扱いだ。

海雲は生まれながらの無個性だが、差別に苦しんできた。

「クソツ、あいつら。自分たちだって個性の使用が禁止されてるくせに……！」

理不尽な世の中に憤る海雲。

そんな彼は今日、運命と出会う。

「おい、その少年。救ってくれ」

「えっ、ええっ!?!」

路地裏の薄暗い物陰から血まみれの人物が声をかけてくる。

戸惑いながらも放っておけなくて話を聞く。

それは海雲にとつて、後悔するもので。

それでいて、新たな道を示すものだった。

「頼む!・これをレジスタンスに、仲間に入れてくれ!」

「な、なんですかこれは!?! 一体なんなんです!?!」

わけもわからず叫ぶ海雲に、レジスタンスの男は叫ぶように言う。

「それは“最後の希望”。オールナイトが残してくれた、対抗手段の場所を示す大事なものなんだ! それをあいつらに渡すわけにはいかないんだ!!」

海雲はそれを……手に取った。

これは、新たなヒーローが生まれるまでの物語だ。



## バッドエンドアフター ダイジエスト

海雲、爆豪と出会う。

わけもわからず、受け取った『最後の希望』。

ヴィランたちの手を逃れ、必死に逃げるがとうとう追いつめられてしまう。

何度も危機を救ってくれたスタングレネードは品切れとなり、武器は特殊警棒のみ。

絶体絶命のピンチに爆発音が響き渡る。

「おいおい、楽しそうだな。俺も混ぜろや！」

あつという間にヴィランを蹴散らし、海雲に手を差し伸べる。

「あ、あなたは？」

「爆豪。爆豪勝己だ。で？ てめえは何で追われてた？」

レジスタンスの嫌われ者

爆豪の助力もあり、何とかレジスタンスのアジトにたどり着く海雲。

車いすの司令官、エンデヴァー率いるレジスタンスに保護され一息つく。

救けてくれた恩人の爆豪。しかし、レジスタンスのメンバーからはひどく嫌われていた。

ほかのレジスタンスが海雲が『無個性』だとしり、忠告する。

「やつにあまり近づくな。アイツは怪物を作り出した原因になったやつだ」

恩人の爆豪を信じたい海雲は爆豪を問い詰める。

不思議と出久に似通った姿の海雲に、爆豪は静かに己の罪を語りだす。

かつての幼馴染、『無個性』であることで虐げられ、誰にも認められなかった末に悪に堕ちた少年、緑谷出久のことを。

そして、彼を追いつめていた一人であったと、自らの罪を告白する。

無個性として虐げられたその半生はまるで自分の様だと戸惑いを隠せない海雲は、爆豪のことが分からなくなる。

爆豪は後悔を滲ませて言う。

「他人が何と言おうと、あいつを止めるのは俺の責任だ。あいつを止めるまで戦い続ける……」

謝罪も逃走も安易な自殺も自分には許されない。

そう語る爆豪だった。

アジト襲撃

アジトで突然の爆発。何者かが侵入したのだ。

皆が疑心暗鬼になる中、麗日に化けたトガを爆豪が見抜く。

「どうして気が付いたですか？」

「ハッ！ 俺がやつのことを『デク』って呼んで麗日が何も反応しないわけがねえだろ！」

エンデヴァアの暗殺を阻止するも、再度仕掛けられた爆弾でアジトが崩壊を始める。

レジスタンス逃亡。海雲、爆豪と脱出する。

『最後の希望』の正体は？

別のアジトへ何とか逃れた一行は、オールマイトの残した『最後の希望』の解析を始める。

ほどなくして分かった解析結果。

それは、希望でもなんでもない。絶望だった。

「これは、オールマイトの残した『希望』なんかじゃない！ こちらの居場所を知らせる発信機だ!!」

ヴィランが仕掛けた『オールマイト』の名をした罠。

ワン・フォー・オールの実相すらわざと広めたくて仕掛けられた悪意に満ちたものだった。

最凶 骸無 vs 最弱 無個性

アジトを襲撃する骸無。

「最後の希望？ そんなものあるわけじゃないか。夢を見るのいいけど同じくらい現実もみないとね」

皮肉たつぷりに嗤う骸無に、レジスタンスたちの間で絶望が広がっていく。

そんな中で、海雲が骸無にテイザーを打ち込んで啖呵を切る。

「個性を奪う」？ やれるものならやってみろ！ こちとら生まれながらの「無個性」だ！」

無個性でありながら真つ先に飛び出してきた海雲に興味を持った骸無は悪への誘惑を始めた。

「気に入ったよ。ボクの元へ来るといい。キミが望むのならどんな個性でも与えてあげよう」

悪への誘い。力への誘惑。

海雲の答えはNOだった。

「断る！ 個性なんかなくなつてなんだ！ 僕はおまえみたいにならない！」

「火が出せるからなんだ！ それより早く火を点けてやる!!」

「水が出せるからなんだ！ それより多く水を持ってきてやる!!」

「電気が操れるから、風を起こせるから、超パワーを持っているから……」

「だからなんだ！ 僕はその程度で諦めてやるもんか！」

「『無個性』だからってヒーローを諦めたおまえなんかに負けてやるものか!!」

おまえは無個性を理由に諦めた臆病者だ。

そう告げる海雲の言葉は骸無の心にわずかに残っていた緑谷出久コンプレックスを刺激した。

「キミは、絶対に、殺す!!」

骸無を誘い出し一騎打ちに持ち込む海雲。

武器、畏、地形、物資……

その場にあるものを何でも使つて骸無を翻弄する海雲。

マンホール下の下水道で決着がつく。

「下水の匂いで気が付かなかつただろ？」

「これは……ガスか!？」

「爆豪さんリスペクトの大爆発だ！」

「おまえエエエ!!」

「ハハッ! 地獄に堕ちろ、怪物!!」

爆発が起こり、ダメージを受けた骸無だけが立っている。

そこに海雲の姿はなかった。

反撃の爆豪

海雲のおかげで脱出した爆豪は、かつての雄英の同期たちの助けも借りて敵のアジトを乗っ取る。

休憩のために入った部屋で爆豪は何かを見つける。

〃イデオ・トリガー個性因子誘発物質〃

個性を無理やり強化する違法薬物を手に、爆豪はある作戦を思いつく。

助けられた海雲

目を覚ますとベッドの上。老人と初老の男性に助けられていた。

グラントリノとサー・ナイトアイと名乗る二人。

海雲に触れたサー・ナイトアイが驚く。

「君ならあの怪物を倒せるかもしれない」

骸無討伐作戦

雄英の同級生たちと、海雲によって負傷したという骸無を討ちにいく爆豪。

乗り込んだ敵のアジトの先では、無傷の骸無が待っていた。

改造人間の骸無は負傷など簡単に直せるのだ。

万全の骸無と戦うレジスタンスたち。

戦況は当然ながら劣勢へと追い込まれていく。

仲間が次々倒れる中、爆豪は捨て身の覚悟で骸無に肉薄。注射器を

骸無に打ち込んだ。

注射の中身はイデオ・トリガー。

数多くの個性を身に宿した骸無にとって猛毒となる劇薬だった。

複数の個性が暴走し、苦しむ骸無。

「どうして! ボクの、ボクの個性チカラが! アああアアア!」

「てめえの個性じゃねえ！ 人から奪った借り物の個性が、ピンチになつててめえの味方をするわけねえだろ！」

形勢逆転したかと思つたが、骸無は暴走した複数の個性を使って暴れ出し、手に負えなくなる。

まるで暴れる小型の嵐のような暴走に誰も手が出せない。

「大丈夫！ 僕がなんとかします!!」

再度訪れたピンチに、救けに現れた海雲は右手を大きく振りかぶり叫ぶ。

“SMASH!!”

グラントリノとサー・ナイトアイから密かに隠されていたワン・フォー・オールを受け継いでいた海雲。

右腕を犠牲に見事に骸無を討ちとる。

怪物のあがき

ついに骸無を倒した。

ホツとしたのも束の間。ボロボロの身体で骸無は海雲を組み伏せる。

「てめえ！ 海雲を離せ！」

「ハハハ、まさかオールマイトが本当にワン・フォー・オールを残していたとはね。これでボクの負けだ。でも、タダで負けてやるものか！」

何をする気だと怒鳴る爆豪たちに、骸無は嗤って“GEM”を海雲に突き立てた。

苦しむ海雲だったが、ほどなくして骸無が力尽き解放される。

海雲を抱き起す爆豪が何をしたか問い詰めると、

「ボクの個性を、Green-eyed Monster 緑の目をした怪物を海雲に与えたのさ」

平和の象徴の後継者が、ボクと同じ怪物になる呪いだという。

朦朧とした意識の中、海雲ははつきりと告げる。

「僕は、あんたにはならない！」

その言葉を聞いて、骸無は静かに息を引き取った。

課題提出の甘味処　くルート分岐2く  
緑谷出久は課題を出されました（プロローグ）

——雄英高校　会議室

期末試験を終え今後の対策を話し合う雄英教師のヒーローたち。

だが、その表情は決して明るいものではない。

ヴィラン連合の台頭。それに伴って活性化し始めたヴィランたち。

そして、それらに対処しきれないヒーローたちに対する不安から自警団ヴィジランテを組織する市民たち。

なかにはヒーローへの不信感が強く、ヒーローをも敵視する過激な集団も存在して社会問題となっている。

会議の報告でのぼるのは悪い話題ばかりだ。

そんな中、トップヒーローであるオールマイトは一つの提案を投げかけた。

「今こそヒーローが団結するときだ。事務所の垣根を越えて協力できるように努めていなければ、集団で動き始めたヴィランたちに対抗できない」

「その通りだね。そのための顔つなぎを出来るのは多くのヒーローのOBがいる我々学校だろう」

「それならば、OB・OGたちに声をかけるだけでなく、学校同士の連携も必要でしょう」

オールマイトの発言をきっかけに、雄英高校を中心としたヒーロー同士の協力体制を作り上げることが決まる。

これにより、ヒーローたちは協力体制を作ることによって今まで以上にヴィランたちと戦うことができるようになっていく。

だが、一つに集まろうとするのはヒーロー側だけの動きではなかった。

——某所　ヴィラン連合　アジト

「それじゃア、今後の我々の栄光とかわらぬ友好を願って……」  
死柄木の音頭でグラスを掲げる者たち。

ヤクザ、マフィア、闇ブローカーに窃盗団、闇金、殺し屋 e t c ……  
多種多様なヴィラン組織・犯罪組織の長達がここに集まっていた。  
ヴィラン連合を核とした闇組織間の不可侵協定・相互協力協定がこ  
こに結ばれたのだ。

お互いの利害が一致するただけに結ばれた砂の城のような関係  
だが、それでも悪は一つに束ねられたのだ。

いままでにならない巨悪の組織の誕生。

これにより、ヒーローたちはさらに苦しい立場に追い込まれてい  
く。

|||||

「フフツ、弔はうまくやったようだね」

隠しカメラで死柄木の様子を見ていた『先生』は、モニターに映る  
その姿を満足そうに見ていた。

自分勝手だった教え子が他者を引き込み、自分の力として利用する  
術を覚えたことは上々の成果であった。

「なら、次はキミの番だね。骸無」

「……はい」

そばに仕える骸無に振り向き、声をかける。

口調は穏やかながら、その言葉には叱責する意思が込められていて  
骸無は思わず震える。

先日も自分が任務を果たせていないことを責められたばかりなの  
だ。

これ以上、失点は許されない。

「なあ、君は誰だ？」

「はっ……はい？」

覚悟を決めて『先生』の言葉を待っていた骸無はどこかの認知症  
の老人のようなセリフを投げかけられて思わず面食らう。

驚く骸無の返事を待たずに「先生」は言葉が続けた。

「君は自分が何者なのか定まっていけない。先日君が仕留め損ねたステイン<sup>彼</sup>の言葉を借りるなら強い「信念」がないといったところか」  
出来の悪い生徒に優しく説明するように「先生」は語る。

「君が何者なのか定まらない理由はね、君の中に迷いがあるからだ。いまだにヒーローに憧れる「緑谷出久」を捨てていけない」

「違うかい？」と、尋ねる「先生」の言葉に表情が固くなる骸無。

両目を失ったその異形の顔は、光の代わりに人の心を見透かしているようで恐ろしく感じられた。

「無邪気にヒーローに憧れ、ヒーロー<sup>ヤツら</sup>の言う「正義」とやらを信じていた「緑谷出久」という存在をまだ君は捨ててきていない。

だが、いい加減気づくべきだ。そんなモノは君を救ってくれないのだと」

救われなかった。救ってくれなかった。だから君はここにいます。

ヤツらのいう「正義」は君を苦しめるばかりで、なんら救いにはならなかった。

その言葉を骸無は否定できない。緑谷出久が苦しんだ10年間は事実なのだから。

「君はヤツらの言う「正義」や「希望」なんていうタチの悪い病原菌に感染しているんだよ。だが、そのままじゃあ、ただただ苦しみ続けるだけだ」

「先生」……ボクは、どうすれば？」

縫りつくように言葉を発する骸無に「先生」は口角をあげて微笑み、告げる。

「簡単だ。「緑谷出久」であることに未練を感じているのなら、その未練をなくしてしまえばいい」

善良なる「緑谷出久」を壊しつくせ、と。

「さあ、君の手で、「緑谷出久」が一番大切にしていたモノを壊してくるんだ。

そうすれば、君はもう嘘まみれの「正義」とやらの誘惑に負けることはなくなるだろう」



裏社会の魔王はそう言って骸無を手招きして誘っている。

## 緑谷出久課題を出されました

たとえ悪の組織といえど、ある程度の礼儀は必要らしい。

無法者の言葉の通り、ヴィランたちは法に逆らう存在だが、それだけに相手の面子だとかプライドなんかは余計に大事にするものだ。

来客——招かれざる客以外だ——が来たら茶と菓子くらいは出してもてなす程度のこととはするわけだ。

それなりに大切なことなのは間違いないのだが、果たしてこのための茶菓子の買い出しに、ヴィラン連合の最高戦力の一つである骸無が駆り出されるといふのはいかなものだろうか？

「おかしい……人手は増えたはずなのに何故僕がこんなことを？」  
買い出しのため歩きながら骸無が愚痴る。

おっしゃることはごもつともだ。

戦闘用の改造人間を買い物に使うなど普通は思わない。

理性の無いバーサーカーに小さな乾電池を買わせに行かせるような発想のぶっ飛び方だ。

タイミングが悪く、買い出しに行ける人材が骸無しかいなかったというところが骸無の運の無さであろう。

ちなみにいうと、人がいないわけではないのだが、今までチンピラをやっていたようなヤツに高級な茶菓子を買わせに行かせるのは不安であるというのも骸無が選ばれた理由なわけだったり。

本人としては、先日「先生」より出された「課題」について悩んでいる最中であり、余計な雑務としか言いようがない。

まあ、断ることもできないのでやるしかないのだが。気分転換と割り切るしかないだろう。

「黒霧さんのおすすめのお店はここか……ふーん、葛餅が有名なんだ……」

スマホで店を検索し、HPを流し見る骸無。

特に和菓子に思い入れもない骸無はあっさりとその店にすることを決めた。

|||||

期末試験を終えた解放感の残る休日。

友人たちのショッピングの誘いを断り、轟は最近習慣となった両親へのお見舞いに行こうとしていた。

「母さん、何か欲しいものはあるか？」

『おまえが顔を見せてくれるだけでも嬉しいわ。でも、そうね。焦凍が良ければだけど、お父さんの好物を買ってきてくれないかしら』

好物があればあの人も目を覚ますかも。という母の頼みを電話で引き受ける轟。

父親に対するわだかまりが消えたわけではないが、前に比べれば落ち着いて対応できるようになった。

だから買ってくることに否はない。

どうせ買うならおいしいものをと、思い、有名なお店を調べる。そう遠くない場所に良いお店があったので、その場所に決めた。

有名和菓子店。

グルメサイトでもジャンルで上位に掲載されるだけあって、店内は混雑していた。

「申し訳ございません。只今、大変混み合っております、ご注文の品が出来るまでしばらくお待ちいただけますか？」

少し並んで品物を頼んだら、渡されるまで時間がかかるという。

仕方がないので注文番号を受けとり、待合室があるとのことなのでそちらへ足を向ける轟。

向かった先で思わぬ出会いがあるとも知らずに……

「おまえはっ!？」

「轟……焦凍?」

轟が待合室に入って目にしたのはヴィラン連合の故人・骸無。

お互いに予期せぬ遭遇で驚くばかりだ。

USJ、体育祭でさんざん苦戦させられた相手を前に警戒する轟であったが、骸無のほうが一手早く行動していた。

「やあ、久しぶりだね。轟くん。こんなところで会うとは思わなかつ

たよ。せつかくだから隣にきて話でもしようよ」

『騒ぎは起こしたくない。周りの一般人に被害を出したくなければおとなしくしてもらえるかな?』

「……ああ、そうだな」

表面上は笑顔で語りかける一方、テレパス系の個性で轟を脅す骸無。

周囲の民間人を盾にされては、逆らうこともできず、轟は骸無の隣に座り、小声で話し始めた。

「おまえ、こんなところで何してやがる」

「何って、お菓子を買いに来ただけだよ」

「聞いたところで正直に答えるはずもねえか。何が目的なんだ」

「……本当に買い出しなんだけどなあ」

目的を聞かれ、素直に答える骸無だったが、轟からの疑惑の目は消えず。

まあ、当然と言えば当然なのだが。

悪の組織の戦闘用改造人間が和菓子屋で茶菓子を買いに来てるなんて誰が信じるだろう。

「来客用に必要なんだってさ。安物を出せば組織の面子に関わるとかなんとか」

「それにしたって戦闘用の故人にやらせる仕事とは思えねえが?」

「そんなのボクに言わないでよ。命令なんだから」

どこかふてくされた様子の骸無について、「大変なんだな」と呟けば、

「うん、いろいろとね」と返事が返ってくる。

ヴィランとの会話ということもあって、もつとピリピリとした内容になるかと思えば、いたって普通の会話になってしまっている。

こうして話をしてみると、以前は化け物のような強さを誇っていた骸無も、まるで同年代の普通の少年みたいに感じる轟。

そんな骸無がどうしてヴィランなんかやっているのか?

そんな疑問が思わず口に出てしまっていた。

「なあ、なんでお前はヴィラン連合に?」

口に出してから無神経な質問だったと慌てたが、意外にも骸無はそ

の質問に怒ることなく静かに語り始めた。

「ボクは『無個性』だったんだ。そのせいで、昔からいじめられたり、苦しんだりしてきた」

ヒーローになる夢を周囲から否定されたこと。

ヴィラン連合に誘拐され、実験台になったこと。

そのときに眠っていた個性に価値を見出されて改造人間になったこと。

順番に、短くだが話していった。

「社会はボクを必要としてくれなかつたけど、ヴィラン連合ではボクを必要としてくれて、力もくれた。だからボクはヴィランになったんだ」

「それは必要とされているとは言わねえだろ。利用されてるだけだ」  
骸無の主張をキツパリと否定する轟。だが、骸無もすかさず反論する。

「初めから恵まれた個性をもって認められてきたキミには分からないよ。ボクがどれだけ他人から認められたいと望み続けてきたかなんて」

拒絶の感情を滲ませて吐き捨てるように言う。

周りの人間は自分を否定する人ばかりだったと告げる骸無に、轟は悲しいものを感じた。

自分が他人から羨ましがられる立場にいることは分かっていたつもりだったが、こうして何も持たなかったことで苦しみ、ヴィランになつてしまった人間を前にすると何も言えなくなりそうだった。

そしてふと、骸無と顔見知りであるというクラスメイトの顔が浮かぶ。

『あいつも、こいつのことを否定する一人だったのか?』

クラスメイトへの疑惑が頭をよぎるが、それよりも今は骸無を救けるほうが先決だと必死で言葉を探す。

「周りは否定する人間ばかりだつて言ったよな。本当にいなかったのか? お前を認めてくれる人は。逆におまえが大事にしてた人はいないのか?」

「ボクの大事な、人？」

自分の大事な人は誰か？

轟からの質問に骸無は考え込む。

かつての自分が大事にしていた人はいただろうか？

「分からない。大事にしていた人は……いた、ような気がする。でも、それが誰なのか、分からないよ」

「そう、か……」

顔をうつむかせてつぶやく骸無に、轟は小さく頷いた。

元来、口が達者というわけでもない轟にとつて、こうした状況でないと声をかければいいのかすぐには答えは出てこなかった。

悩んでいるうちに、逆に骸無から声をかけてきた。

「ねえ、轟焦凍。キミはどうしてヒーローを目指すの？ 大事な人はいるの？」

骸無が自分の中の答えを探すように投げかけた言葉を受けて、轟は少し考えてから言葉を紡ぎ始めた。

「ヒーローを目指した理由は、オールマイトに憧れて、その夢を家族が認めてくれたからだな」

「家族……エンデヴァーのこと？」

父親がヒーローだから目指したのか？ という問いに首を横に振って否定する。

「親父は俺をヒーローにさせたがってたが、それは理由じゃないな。正直今でも親父が何考えてたのか分からねえけど。」

俺がヒーローを目指したのは、母さんが親父とは関係なくなりたいものを目指していいと認めてくれた……たぶん、それが始まりだと思う」

そんな大事なことも最近まで忘れていたんだけどな。と、少し苦笑いをする轟の話に骸無は黙って耳を傾けていた。

轟の話は続く。

幼いころに父のせいで母が心を病んで自分に煮え湯を浴びせてきたこと。

入院して会えなくなってしまう母にショックを受け、その原因に

なった父を憎み、ヒーローを目指す目的が父を見返すことに入れ替わってしまっていたこと。

そして、最近、嫌われてしまったと思っていた母が自分のことを変わらず愛していてくれて、納得できないが、父も自分を大切に思っていてくれたこと。

先ほどとは逆に、轟が順番に過去を話していった。

「自分でも何を言いたいのかわ分からなくなってきたが、俺が大事にしてるのは家族なんだと思う」

「そうか……家族か」

骸無は自分の家族について思いを馳せる。

骸無、いや、緑谷出久にとって家族といえば、真っ先に思い浮かぶのは母親だ。

出久の母親は息子の夢を認めることは出来なかったが、それも出久のことを案じてのことだ。

その証拠に、単身赴任でずっと家に居ない夫の分まで息子の面倒を一心に見てきたのだから。

何より周囲が味方になってくれないなかで、自分のために本気で泣いて心配してくれる存在は大事な人といえるだろう。

骸無が考え込んでいるところへ、轟が言葉を重ねる。

「俺も最近まで、大事なことを忘れてた。だが、ちゃんと思いついて、こうして夢を目指している」

だから、おまえも同じように大事なことを思い出して『正しい道』に戻ってこられるはずだ。

そう主張する轟に骸無も同意する。

「そう、だね。きつとそうだ。ああ、やっとわかった。自分の大事なモノ」

満面の笑みで「ありがとう」と感謝を述べる骸無。

轟が何かを返事するタイミングで商品が準備できた呼び出しがかかり、骸無は立ち上がって去っていく。

それを見送った轟は、自分の言葉が骸無の心に少しでもよい影響を与えてくれることを願うばかり。

「〃先生〃、ようやく『課題』を終わらせられそうです」  
骸無が歪んだ笑みをしていたと知りもしないで。



緑谷出久は課題を出されました（アフター）

——某所 ヴイラン連合のアジトの一つにて

「おかえり、骸無。その様子なら僕の出した「課題」を達成してきたようだね」

「はい、ただいま戻りました「先生」」

複数のモニターが並び、多種多様な医療機器が存在感を主張する部屋で「先生」は骸無を迎えていた。

顔のほとんどを失ったその顔では、口元には愉悅の笑みがことさらに際立って見える。

『完成に一歩近づいた。最高の、いや、最凶の悪の器に』

善良であった緑谷出久が大事にしていたものを、この哀れな改人は言いつけどおり壊してきたのだろう。

それが自分にとつてどんなことになるのか考えもしないで。

かつての善良な「緑谷出久」など、兵器たる改人・骸無には必要ないのだ。

緑谷出久という少年を、

壊して、

壊して、

壊して、

壊しつくして。

その先に目的は達成されるのだ。

そして状況は「先生」の想定を超えていない。

むしろ順調に進みすぎて怖いほどだ。狡猾な悪の魔王は油断なく、そしてひそやかに物事を進めていく。

すべては掌の上なのだ……

自分の思惑通りにコトが進むのはいつだって気分がよい。

「先生」は愉しげに骸無へと問いかける。

「どうだい？ かつての自分への未練を断ち切った感想は？」

「これで迷いはもうありません。ボクはもう「正義」なんていうものになんて惑わされません」

はつきりと答えるに骸無に「先生」は嗤う。  
順調に骸無は壊れてきている。本人にその自覚もないままに。  
願わくばこのまま壊れつくしてほしい。

そのときこそ、この「先生」の計画は完成するのだ。  
哀れな哀れな少年は、邪悪な魔王に目をつけられて化物へと変えられていく。

いつか、緑谷少年の涙が枯れ果てて、化物に成り果てるまで。  
もう、時間は残っていないのかもしれない。

|||||

——爆豪家

「勝己、留守番頼んだわよ！」

「うっせーよ。言われんでも分つとるわ！」

外出する黒い服の母親を見送り、リビングに戻る爆豪。

テーブルに置いてあった新聞を開き、ある個所に目をとめる。

新聞の片隅の「おくやみ欄」

そこには爆豪の知った名前があった。

「緑谷インコ」

幼馴染の母親の名前だ。

「あのバカデク……どこで何してやがんだ」

母親が大変な時に何をしてやがる、と、ぐしやりと新聞を怒りと共に握りつぶす。

まだ、爆豪勝己は何も分かっていない。

自分の幼馴染がすでに取り返しつかないところまで来ていることも。

かつての自分の罪の重さも。

まだ、何も知らないのだ。

## 弾効非難の仮免試験

緑谷出久は試験会場に来ました。プロローグ

ヴィランとヒーローの戦いは膠着状態に陥っていた。

ヴィラン連合により組織的な活動を始めたヴィランによって、被害が拡大。

対してヒーロー側も雄英のOBを中心として協力体制を作り出し対抗している。

一進一退の状況。

ヴィランの勢力が強まり、強い次代のヒーローが求められている。

そんな期待を受けた雄英高校は、夏の強化合宿を経てヒーロー資格の仮免試験を受けていた。

ある種の慣例となっている『雄英潰し』を乗り越え、全員が二次試験に進んでいる。

先達のプロヒーローたちが力を尽くす現在、一刻も早く戦う資格を得ようと、全員が張り切っていた。

『ヴィランによる大規模破壊が発生！』

『規模は〇〇市全域。建物倒壊により傷病者多数！』

『道路の損壊が激しく、救急先着隊の到着に著しい遅れ！』

『到着するまでの救助活動は、その場にいるヒーローたちが指揮をとる』

けたたましいサイレンと共に、二次試験の開始が告げられる。

一次試験の戦闘試験とは違い、人を救う救助試験だ。

「チツ、救助か……誰もブツ殺せねえな」

「おい、爆豪。その言い方はねえだろ。救護も大事なヒーローの仕事だぜ？」

「そういう発言がまた敵を作るんだよなあ……」

救助試験に臨む爆豪は、一次試験と違い暴れられないことに不満を漏らす。

一緒についてきた切島と上鳴が苦言を呈するも、聞く耳をもたな

い。

これには訳がある。

彼のもともとの性格もあるが、今の彼は戦闘能力をつけることに焦っているのだ。

悪に墜ちてしまった幼馴染に対抗するために……

『ヴィランが姿を現し、追撃を開始！ 現場のヒーロー候補生はヴィランを制圧しつつ、救助を続行してください』

爆発音が響き渡り、演習条件の追加のアナウンスが流れる。

ヴィランの襲来という荒事の気配に爆豪は獰猛に笑みを浮かべた。

「ハッ！ 俺好みになってきたじゃねえか。全員ブツ殺す！」

アナウンスされた襲撃ポイントへ向かう爆豪。

変化する状況に、ヒーローの卵たちは今まで培ったものをぶつけていく。

|||||

「A地区にヴィランが出現。現場のヒーローは直ちに迎撃に向かってください」

マイクに向かってアナウンスをする戦闘服コスチュームを身にまとった人物。

その足元には血まみれのプロヒーローたちが倒れていた。

「クツ、貴様は、ヴィラン連合のツ！」

「寝ていなよ、ギャングオルカ。アナタたちの仕事はボクたちが代わりにやっておいてあげるからさ」

ただし、アナタと違って命の保証はしないけれどね。

そう言ってNo.10ヒーロー「ギャングオルカ」の意識を刈り取る人物。

緑色の光のない目で倒れたギャングオルカを見下ろすのは、ヴィラン連合の故人、骸無。

ヒーローの卵たちが自分たちの力を見せる仮免試験会場の裏側で、悪意が今、うごめき始めている……

## 緑谷出久は試験会場に来ました

ヴィラン連合によって乗っ取られた二次試験の会場は、混乱の中にいた。

悪意が牙をむき、次々と生徒たちに襲い掛かる。

『C地区にヴィラン出現。ヒーローは直ちに迎撃に向かってください』

「どうなってるんだ!? さつきとはまた違うところにヴィランが出現だど!」

「くそ、どれが本当の情報なんだ! これも試験の一つなのか!」

わざと流される誤った情報に、生徒たちは惑わされてパニックを起こしかけている。

そうして隙をさらしたヒーローの卵たちを狙って悪意が襲い掛かった。

「なんで、こいつらがこんなところに!」

「こいつら、ヴィラン連合の……」

「駄目、助けて! 誰か助けてよ!」

ヴィラン役を務めるプロヒーローの代わりに、生徒たちに襲い掛かるのは改人・脳無。

手心など全くない脳無たちによって、生徒たちは次々と傷ついていく。

『ヴィランの迎撃を行ってください。繰り返します、現場のヒーローはヴィランを迎撃してください』

「おい、嘘だろ。本部はこの状況見えてねえのかよ!」

「これが本当に試験だっていうの? そうなの?」

『C地区にヴィラン出現。ヒーローは直ちに迎撃に向かってください』

「違う! ヴィランがいるのはこっちだ。C地区は反対側だぞ!」

「嘘でしょ。誰も、助けに来てくれないの!」

脳無数体に追い詰められ、絶望に顔を染めるヒーロー候補生たち。

彼らの悲鳴に応えるものはいなかった。

『また後手にまわってしまった。生徒たちを危険にさらして、何度も何度も。もう終わりだ、なら……いつそのこと!!』

一次試験に落ちた生徒や引率の先生たちが待機する場所もまた地獄絵図と化していた。

ヴィランが乱入すると同時に生徒の一部が暴れだし、多くのけが人がでてくる。

その場に居合わせた相澤ことイレイザー・ヘッドも絶望感から破滅的な考えが頭をよぎり始めている。

「ブハッ！」

そんなイレイザーの黒い考えは、噴き出した笑いと共に吹き飛んだ。

「大丈夫か、イレイザー！」

「すまん、助かった。俺としたことが不覚をとった」

「ヴィランの中に精神汚染系の個性を持ったヤツがいる。油断するなよなー！」

M.S. ジョークの個性で正気を取り戻したイレイザー。

彼もプロヒーローだ。即座に気持ちを切り替えて、対処に当たる。

「しかし、まあ、ヴィランだけでなく暴走した生徒も鎮圧しないといけないかー。こりや時間かかりそうだ」

「弱音か？ ジョーク。嫌なら帰ってもいいんだが？」

「H A H A H A！ 笑えないジョークだ、イレイザー！」

笑ってるじゃねえか。と、軽口を叩きあいながら戦闘を開始する二人。

個性を消し、または爆笑させて一人一人行動を封じていく。

だが、この混乱の元凶となっている精神汚染系の個性のヴィランの位置が特定できない。

『クソ！ 事態の收拾には時間がかかるか！ プロヒーローが駆けつけるまで持たせろよ、タマゴども!!』

必死に動きながら生徒たちを案ずるイレイザー・ヘッド。

一方、そのころ。

雄英ヒーロー科A組の生徒たちは、担任の期待に応えるように奮戦していた。

「おっしやあ！ これで三体目エー！」

「氣イ抜いてんじゃねえぞ、クソ髪イ！！ 追撃、あんだろー！」

「耳郎さん、索敵を！」

「ちよつと待つて、ヤオモモ……駄目！ あちこちで戦闘しててノイズが多すぎる！」

襲い掛かってきた脳無を倒し、歓声を上げる切島を爆豪が荒い口調で叱りつける。

その会話を受けて八百万が耳郎に索敵を要請。

などなど、強化合宿を経て強化された個性や各自の連携・役割分担などをすることで、ヴィランの襲撃をしのいでいた。

他の高校の生徒と違い、過去の経験から彼らはすでにこの状況を作り上げたのが何者なのか確信していた。

そして、彼がこの場にいることを半ば直感していた。USJ、体育祭と二度に渡って、轟・飯田・爆豪に至っては三度も相對したヴィラン連合の改人の存在を。

「さすが、雄英高校ヒーロー科。中途半端な脳無じゃ相手にならないね」

ヴィラン連合の切り札の一つ。改人・骸無が再び雄英ヒーロー科の前に立ちはだかった。

「やっぱりきやがったな、クソデクが！」

「おい、挑発すんなって！」

「皆、氣を付けるんだ。油断できる相手じゃない！」

爆豪がその姿を見据えて獰猛に笑みを浮かべれば、瀬呂がそれを諫めながら隣に立って援護の構えをとる。

そのほかのメンバーは飯田の号令の下、骸無と真っ向から向かい合う。

対する骸無は無感動な様子で、静かに構えをとる。

「やつぱり士傑と並んで脅威度はワンランク上……優先的排除対象だ、ね」

「やらせねえー!」

目標を定め攻撃に移る骸無。それに応じるように切島が真っ先に前に出た。

もとより防御力が自慢の切島は、こうして強敵に出会った時のためにひたすら個性を磨いてきたのだ。

硬度MAX アンブレイカブル 安無嶺過武瑠

夏の強化合宿を乗り越え、身に着けた最高硬度。

その努力の成果はここにきて如実に現れた。

「倒れ……ねえ!」

「以前より成長してる。さすが英雄……!」

数か月前のUSJ襲撃では、骸無に逆に碎かれた切島だったが、今回は見事骸無の攻撃を受け切って耐えて見せた。

皆の盾としてひたすら前に出るその姿に勇気をもらい、A組のクラスメイトたちも攻撃をたたみかける。

峰田は骸無の動きを封じるべく頭部の個性を千切って全力で投げつけ、瀬呂は肘のテープを指で裂いて攻撃範囲を増やし逃げ道を塞ぐ。

そうして骸無の動ける範囲を狭めた上で、中遠距離の攻撃手段を持つメンバーが一斉に攻撃。

訓練を重ね、お互いの個性を熟知した上で行われる連携攻撃。当たれば大ダメージは確実だ。

だが――

「個性、選択。同時発動、開始」

“風力操作” “エアハンマー” “空気膨張” “空気を集める”

空気に関連する個性を同時に発動し、一瞬で骸無を中心とした暴風を作り出す。

瞬間的に生み出された嵐は何もかもを吹き飛ばしてしまった。



当然、骸無は無傷。

「成長した、みたいだけど、学習はしていないみたいだね。ボクに数は意味はないよ」

見下したように告げる骸無だが、A組の面々は今のダメージでうめくばかりで誰も応えられない。

「調子に乗ってんじゃねえぞ、クソが！」

いや、一人いる。常人以上のタフネスを持つ爆豪だ。

タフネスだけでなく、戦闘センスの才覚もあふれる彼は先ほどの暴風を自らの爆破で相殺してダメージを軽減していたのだ。

「かつちゃんか。なかなかキミもしつこいね」

「てめえ……」

一対一で向かい合う形となった骸無と爆豪。

だが、すぐに戦いを始めることはしなかった。意外にも会話を試みたのは爆豪だった。

「おまえ、こんなところで何してやがんだよ！ インコおばさんを放っておいて！」

「母さん？」

相手の母親を話題に出して注意を向ける爆豪。

その目的は時間稼ぎだ。

『俺の体力も回復してねえ。それに、ダメージ負ったやつらが退去できなきゃまともに戦えねえ』

先ほどの大規模攻撃をしのいだ際の消耗は激しく、なにより仲間のダメージも無視できない。

特に皆の盾となるべく一番前に出ていた切島の傷は深く、無視できそうになかった。

そつと横目で状況を窺えば、比較的傷の浅い者が重傷者を救って退避しようとしている。

状況をみて爆豪は性格に合わないと感じながらも、会話による時間稼ぎを行わざるを得なかった。

「おばさんが、おまえの母親がいまどうなってるのか知ってるのか!？」  
「……知ってるよ。死んだんでしょっ。」

「ッ!? テメエ!!」

自身の母親の死をなんでもないように語る姿に思わず激昂しそうになる。

グツと堪えて、さらに言葉を重ねる。

「おまえ、何も感じねえのかよ。母親が死んだ、いや、殺されたんだぞ!?!」

「だから、知ってるって言ってるだろ」

「まさか、おまえが……ッ!?!」

爆豪が口にはできなかつたその言葉の先。

骸無はいともたやすく肯定してみせた。

「そうだよ。ボクが殺した」

「クソがア!! なんてそんなことをしたア!!」

これには爆豪も黙っていられずに声を荒げてその蛮行の理由を問いたです。

その返事は爆豪には、いや、その場の誰もが理解できないものであった。

「そんなの邪魔だったからに決まってるじゃないか。ボクが『骸無』になるために、何の力もない『緑谷出久』を捨てて強くなる邪魔になつたから」

「ふぎげんな! ンなもん強きなんかじゃねえ! 悪人に自分を売り渡して手に入れた力の何が強さだ! アアン!?!」

骸無の理解できない殺人理由を否定する爆豪。

その怒りに任せた爆豪は、つい、骸無の逆鱗に触れるような言葉を口にしてしまう。

「今のてめえより、なにも出来ない『無個性』のデクの方がマシだ!」  
「なんだって?」

今まで無表情で聞いていた骸無は、その言葉に反応して顔をゆがめた。

目に怒りを滲ませながら、口元には冷笑を浮かべて爆豪に言葉をぶつける。

「おかしなことを言うね。ボクが骸無になつたのはキミのせいじゃない

いか」

「ハッ？ 何を言ってるんだよ、テメエは」

「だってそうでしょ？ “無個性” だった緑谷出久を決してキミは認めようとしなかった」

骸無はかつての爆豪の言動を、自身に対する悪行を糾弾する。

無個性であることを馬鹿にした。

ヒーローになるという夢を否定した。

その手段は暴言・暴力だった。

爆豪は……緑谷出久という存在を決して認めなかった。

「ボクは“無個性”で、社会では弱い立場だった。でも、ボクを積極的に否定したのはキミだった」

そうだろう？ と、睨むように尋ねる骸無。

口調は静かなのに、その言葉にはどうしようもない怒りが込められている。

「今でも覚えているよ。ボクの夢を綴ったノートを爆破して捨てた後の言葉を……」

「……やめろ」

爆豪が弱々しく制止しようとする。

その先を言われてしまえば何かが決定的に終わる予感がした。

「キミはボクにこう言ったよね、ヒーローになりたいなら、『来世は“個性”が宿ると信じて、屋上からのワンチャンダイブ』しろって」

自殺教唆としか言いようのない言葉。

ありえないその暴言に、爆豪だけでなく周りのヒーロー科の生徒たちすらも息を？む。

「なっ、それは!？」

「マジかよ、爆豪」

「そんな——」

信じられないというクラスメイトの視線を受け、爆豪は何も言うことができない。

過去の自分の発言の因果が、今、爆豪の背中に追いついたのだ。

「そんなキミが、おまえが！ “デク”の方がよかった？ マシだっ

た？ ……どの口が言うんだよ！ そっちこそフザけるな!!」

怒りを叩きつける骸無は、その感情に任せるままに拳を構えて走りだした。

罪を突きつけられた爆豪は呆然とした様子でそれを見ていた。

地を蹴る音を置き去りに拳が風を切る。そして、鈍く、肉を貫く嫌な音がした。

「グフツッ！」

「まさか、こうなるとは」

「おまえ……」

骸無の拳に腹を貫かれ、口から血を吐く轟。

ギリギリで爆豪を庇い骸無の攻撃を受けた轟は、骸無にしがみつくように息も絶え絶えに語りかける。

「悪い、俺の……せいだ」

「何を、言ってるの?」

「おまえが、母親を、殺し……たのは、俺の言葉が足りなかったからだ」  
苦しそうにしながら告げる轟の言葉に動揺を隠せない骸無。

以前、偶然出会ったときにもっとしつかりと考えを伝えられていれば、と後悔を口にする轟。

あの時、迷っていた骸無に、自分が言葉足らずだったせいで最後の  
一押しをしてしまったと。

「あの時なら、まだ後戻りできたかも、しんねえのに、俺が余計なこと  
言っちゃったせいで……悪い、ごめん、な」

最後に、謝罪の言葉を口にして倒れる轟。

その返り血に身を染めて、骸無は絶叫する。

「あ、ああ、あああああ!!」

どうしようもない罪悪感。

人の命を奪ってしまう感覚が手に蘇る。

『ごめんね。 出久……』

思い出すのは母親の最期の言葉。

今の彼と同じく、それは恨み辛みではなく、自分を思いやる謝罪の  
言葉だった。

封じていたはずの罪悪感がフラッシュバックし、パニックを起こす骸無。

そうなるのはもう周囲のことなど気にすることなどできはしない。

そうして選んだ手段は、逃走だった。

「おかえり、骸無。いい状態になって戻ってきたねえ。僕の想定通りの状態だ」

どうやったのか記憶もないまま、ヴィラン連合のアジトに戻ってきた骸無は精神崩壊寸前だった。

それを見て、「先生」は満足そうに笑う。

すべては、巨悪の計画のままに。

## 緑谷出久は試験会場に来ました エピローグ

ヒーロー資格仮免試験をヴィラン連合が襲った事件は一か所ではなかった。

全国の同日に行われた各地の試験会場が襲われたのだ。

この同時攻撃により、多くのヒーローの卵が犠牲になった。

天下の雄英高校も無傷ではない。

事件を乗り越えて学校に登校したヒーロー科1年A組は、暗い雰囲気  
気が教室に充満していた。

クラスメイトが、轟焦凍が意識不明の重体なのだから。

いつもなら朝の予鈴が鳴るまで楽しくおしゃべりをしているはず  
が、今は誰も口を開こうとはしない。

口を開けば、きつとよくないことを言ってしまう。そんな予感が  
あった。

だが、悪い空気の中、ただ黙っていることは耐え難いこともある。  
「ちつくしよー。あいつさえ、あの故人さえいなくてもこんなことにならなかつたのによー!」

だから、峰田が思わず不満を口にしてしまったのも無理はない。

今の惨状を誰かのせいにしてしまいたい。それはある種自然な感情だ。

そして、その矛先はその場にいない者よりも近くににいる者へ向かうもの。

「だいたい、元はといえば爆豪が悪いんだろお！ 中学んころに骸無<sup>アイツ</sup>を追いかけるようなことをしなけりや、今こんなことになってなかつたんだ!」

爆豪に怒りをぶつける峰田。

当の本人の爆豪はその言葉に対して反応することなく、チラリと視線をむけただけだった。

その様子が逆に峰田の怒りを煽り、再度口を開こうとした。

が、それをたしなめるように尾白が前が出る。

「やめなよ。誰かを責めたって虚しくなるだけじゃないか。責められ

るべきは僕らの力不足だろ」

「そうだ。今は仲間で団結するべき時だ。仲間同士で責任をなすりつけ合っている場合じゃない」

尾白と共に飯田にも諭される。

かといって、怒りが収まるはずもないが。

「うるせえ！ いい子ぶってんじゃねえよ。おまえらだって爆豪がヒデえこと言っただって思ってるんだろ!？」

「そ、それは……」

峰田の荒い口調で突きつけられた言葉に思わず口ごもる飯田。

それははつきりと口にしていないが、答えを言っているようなものだ。

『来世には “個性” が宿ると信じて、屋上からのワンチャンダイブ』

この言葉は、どう言い繕ったところで決して褒められる言葉ではない。

その意見に賛同する人がいるのは当然だった。

「たしかに。元から口がワリイのは知ってたけどよ。さすがにアレはないと思うぜ」

「まったく輝いてない言葉だよね★ 美しくない」

瀬呂が何気ない口調で、しかしどこか呆れを滲ませるように呟く。続いて青山も彼独特の言葉で同意する。

さらに、不信感をハッキリと表に出したのは耳郎だ。

「この際だから言わせてもらうけど、ハッキリ言って自殺教唆でしょ。あの言葉。そんなコトを口にできるヤツとウチは一緒に仲良くできる自信はないんだけど」

ただ、『そういう性格なのだ』と今までは割り切れていた部分が今回、過去の出来事を知って無視できなくなったのだ。

事実、爆豪の言動はお世辞にも品性高潔とは言えないのだから。

「待って！ まだ一年も経ってねえけどよオ！ それでも半年近く一緒にやってきたんだ。俺はダチ信じてえ。いや、信じてるぜ！」

一方、爆豪と仲の良い切島が爆豪を庇う。

当然切島も爆豪のあの言葉に対して思うところは大きいにある。

だが、友達を信じたいという漢気から自らの主張を口にしたのだ。それを助けるように上鳴も意見を言う。

「そもそも、あの改人が言っただけが本当かどうか分かんねえじゃん。俺たちを惑わせる嘘かもしれないだろ？」

そう言っただけの雰囲気や和らげようとするが、誰もその言葉を信じることができない。

皆、爆豪があんな暴言を言ったと確信していた。

困った上鳴は思わず爆豪を見た。

『言っただけと言っただけ。そうしたら丸く収まる』

そんな上鳴の思いとは裏腹に、爆豪は首を縦に振った。

「ああ。言っただけ。デクのヤツに間違いなく、言っただけ」

「ちよ、おまえ!?!」

「わかりきった嘘ついてどオすんだ？　アアン？　余計な小細工しようとしてんじゃないやねえよ、アホ面」

上鳴の下手なフォロウを切って捨てる爆豪。

事実、上鳴のとった手段は下策といえるものだった。しかし、そういう物言いが問題視されている部分でもあるのだけれど。

「本当に言っただけだね。爆豪君」

ポツリと呟くように声を出したのは麗日。

短い一言だが、それには爆豪に対する批判が入っていると周囲は感じた。

「麗日君、よすんだ」

「え？　あ、違うよ！　そういうんじゃないよ！　あの骸無って子のことを考えて……可哀相って思っただけの言葉が」

人を殺すヴィランにまでなってしまった彼の立場や状況を想像したという麗日。

自身も裕福とは言えない家庭だが、ヴィランになろうと思うほど追い詰められていない。

だからこそ、そんな彼のことを考えて同情してしまったのだ。

「そういや、あいつ、俺たちと同じ年なんだよな。それがヴィランになるなんて、よっぼどのが——」



「だから！ そいつを追い詰めてヴィランにしたのは爆豪だろ！ やっぱ爆豪が悪いんじゃないか！」

砂藤も骸無への同情を口にしたところ、峰田が言葉の端をとらえて爆豪を批判する。

慌てて飯田が止めに入るが、冷静になりきれずに怒鳴るような口調になってしまう。

「よせと言っているんだ！ いい加減にしないか！」

「なんだよ。オイラが悪いのかよ！ おまえだってそう思ってるくせに。委員長の見地があるから止めているだけだろ！」

「そうだ！ 僕は学級委員長だ。だからクラスがバラバラになっていくのを黙ってみているわけにはいかないんだ！」

双方冷静さを失って怒鳴り合うような状況。

飯田は言葉を間違えた。

クラスの協調を主張するつもりが、学級委員長であることを前面に出して言ってしまったせいで、峰田の言葉を否定しきれていない。

これでは立場があるから止めているだけで、本心では爆豪をよく思っていないと言っているようなものだ。

そして、立場といえばもう一人思い悩んでいる人物がいる。

「立場……私も副委員長としての立場があり、責任があります。そして、その立場からすればこの争いを止めなければいけないということも分っています。でも……」

何かに耐えるようにギュッと両手を握りこむ八百万。

そうして、血を吐くようにその思いを口にした。

「しかし、それでも！ 轟さんのことを考えると、冷静には、なれそうにありません！」

同じ特待生として轟に特別な敬意を持っていた八百万。

彼女こそ、轟が意識不明の重体になって一番影響を受けているのかもしれない。

八百万につられて、また常闇も自分の気持ちを吐露する。

「冷静でいられないのは八百万だけじゃない。俺も今、下手に言葉を

口にすれば感情的になりかねない」

普段から冷静を心掛ける常闇ですら、爆豪に対するよくない感情を隠し切れない。

そんな事実はさらに場の空気をギスギスしたものに変わっていく。

「駄目だよー。こんな風にいがい合つてちや駄目だ！ 雄英の、ヒーロー科の仲間でしょ、僕たちは!!」

ドロドロとした場の雰囲気、口田が叫ぶように訴えかけた。

普段無口な彼がこうやって大きく主張することは珍しい。だからこそ、場の雰囲気を一変させる一声となった。

「そうだよ。やめよう？ ただでさえ轟があんなことになったんだからさ」

「一度冷静になりましたよ。クラスのお友達がバラバラになつていくのを見ているのは寂しいわ」

ムードメーカーの葉隠と冷静な意見を言うことが多い蛙吹。

この二人が意見することで、場の空気が緩んだ。

すかさず飯田が皆をまとめ上げようと声を上げる。

「今は大変な時だ。だからこそ、一致団結していく必要があるんだ。皆で協力していこう!」

「だが、どうする？ ただ、『団結しよう』と言うだけでは難しいだろう。何か具体的な行動がなければ」

「そんなの、皆でガンバロー! ……じゃ、駄目なんだよね?」

言葉で言うだけでは不十分だという障子。

芦戸はどうすればいいかと、皆に問いかける。

その答えは、嵐の中心人物である爆豪が答えた。

「ンなもん、簡単なことだろうが。集団に不和があるなら原因を取り除くまでだ。そオだろーが」

「爆豪君、何を？ 待て、どこへ行く!?! 待て、待つんだ!」

簡単に一言告げて教室を立ち去る爆豪。

慌てて飯田が追いかけて教室を出ていく。

あとに残されたクラスメイト達は、呆然とそれを見送ることしかできなかつた。

その後、爆豪は教室には戻ってこなかった。  
翌日も。

その次の日も。

爆豪勝己、消息不明。

## 英雄願望と決戦場

緑谷出久は呪いをかけました プロローグ

——警察 対ヴィラン連合捜査本部

ヒーロー免許仮免許試験襲撃事件から約一か月が経った。

多くのヴィランを吸収したヴィラン連合の動きは止まることを知らず、連日ニュースを騒がせている。

その火消しにヒーローたちが東奔西走するなか、今日、警察組織の中で大規模な会議が行われようとしていた。

「これより、対ヴィラン連合捜査会議を始める。会議の進行は私、本郷がやらせていただく」

捜査の責任者である本郷警視總監の号令と共に会議が始まる。

60歳を手前にした年齢を感じさせない気迫に満ちた姿と声に場の雰囲気引き締まる。

会議室の正面に立つ彼の左右には警察の幹部が並んでおり、反対側には多くの刑事たちが列をなして備え付けられた会議用の机の座っていた。

誰もが真剣な表情をしている。

それもそのはずだ。今日は自分たちの捜査の結果について、重大な発表があると聞いていたからだ。

「諸君らの知つての通り、ヴィラン連合による事件が多発してる。先月のヒーロー仮免許試験同時襲撃事件は記憶に新しい」

厳しい顔をした本郷警視總監は、まずは苦しい今の現状について語りだした。

彼の表情からすでに察せられるが、状況は決して良くはない。

「いままでと違い、組織だって動き始めたヴィランたちに我々警察もヒーローたちも後手に回っている。残念ながら、世間を見る我々への目は厳しいものと言わざるを得ない」

連日報道される事件に、被害を抑えることができない警察・ヒーローへの世間の批判は高まっていた。

むろん、警察・ヒーローもただ指をくわえてみていたわけではない。ヒーロー同士、またはヒーローと警察で連携を深めて対処にあたっていた。

だが、ヒーローとは遅れてくるもの。事件が起きてから動き出すヒーローは、必然、ヴィランたちに一步二歩も遅れる形となる。

個性の使用が法律で禁じられている警察は、個性犯罪に対応できずに、目の前でいいようにされてしまう。

そんな現実をこの場にいる刑事たちは何度も見せつけられてきたのだ。

その風景を誰もが思い出し、暗澹とした空気が漂う。

だが！

「しかし、我々もただ黙って見ていたわけではない！ 我々は個性を使うことが禁じられている。だが、それは無力という意味ではない！」

重い空気を打ち払うように、本郷警視総監が声を張り上げた。

その目には力強い光が宿っている。

警察はヒーローのようにヴィランを個性を使って取り押さえるような派手なこととはできない。

その代わりにできるのは、ひたすら地道な調査だ。

聞き込みで情報を集め、化学調査で現場を分析し、犯人の心理を読み解いて動きを推理する。

決して派手ではない、ひたすら地道な作業だ。

「襲撃してきたヴィラン、事件を起こした犯人・関係者。事件を通して得た情報からわずかな糸を手繰り寄せるようにして、諸君らが捜査を続けてくれたおかげでやつらのアジトを複数発見した！」

犯人を突き止めるという執念。

それこそが、ヒーローにはない警察という組織が持つ力だ。

今の時代、ヒーローこそが花形なのだろう。警察は脇役なのだろう。

しかし、それでも――

「我々、警察官にも意地がある！ ヒーローたちと協力し、ヴィラン連

合の一斉摘発を行う!! 諸君、今こそ反撃の時! 我々の正義を見せつけるのだ!!」

本郷警視総監の振り上げた拳と共に、会議室にいた刑事たちから気炎の声が上がった。

ヴィランども、桜の代紋が正義を見るがいい。

|||||

—— 雄英高校 職員室

「ダメだ。許可は出せん」

はつきりとした口調で相澤が告げる。

その言葉を受けたのは飯田と切島の二人だった。

「何故です!? 理由をお聞かせ願います」

「そうです! セツかく仮免取ったのになんでインターンシップ行っちゃ駄目なんスか?」

相澤の言葉に不満な二人は自然と声が大きくなる。

インターンシップの申請をして却下された二人は陳情のためにやってきていたのだった。

生徒二人の不満を、相澤は冷静すぎるほど合理的に対応していく。

「ヴィランが活性化している影響を鑑みた学校の判断だ。状況が悪化しているのはおまえたちもわかっているだろう」

「我々はヒーロー科です。今の状況を少しでも良くするためにかしりたいと思うのは当然のことです!」

「じつとなんかしてられませんよ! 何のための仮免なんですか、俺らア—」

ヴィランの力が強くなっているときだからこそ、何か行動をしたいと主張する二人。

その言葉はまさしくヒーローらしい心掛けだと言えるだろう。

だが、心意気だけで認めてやるほど相澤は甘い教師ではない。

「調子に乗るなよ、ひよっこども。仮免はあくまで仮免。そこを踏まえた上で学校側は力不足だと判断した。それが分かっているなら、おまえたちのヒーローとしての適性を考え直さなければならなくなるわけだが?」

「し、しかし……」

眼光鋭く、除籍処分もほのめかして威圧する相澤に怯む二人。

何とか言い募ろうとするが、それを遮って相澤が言葉を続ける。

「だいたい、インターンシップに行きたいのは、さっきの理由だけじゃないだろうが？」

「お見通しっすか……」

真意を隠していた不誠実さを突かれた飯田は顔を伏せ、切島は気まぐげに目を逸らす。

先ほどの言葉も嘘ではないのだが、彼らにはもう一つインターンシップへ行きたい理由があった。

「ハア……そんなに居なくなつたヤツのことが心配か？」

「当たり前です！ 彼も、クラスメイト。仲間の一員です」

「友達<sup>ダチ</sup>を放つてはおこなんぎ、漢が廃ります！」

ため息交じりに質問を投げかければ、何とも熱のこもつた返事が返ってきた。

二人はインターンシップという郊外活動に参加することで、学校を去つていった爆豪の情報を集めようと考えているのだ。

あの爆豪が学校を去つたからと言って何もしていないわけがない。

かなり追い詰められていた様子もあり、ヒーローの資格など関係なしにヴィラン連合を追っている可能性も高かった。

だが、それは当然のことながら法に反する行為であり、本人も危険にさらされていることとなる。

そんな状況になっているかもしれないクラスメイトを止めたい一心で二人は出来ることを模索しているのだ。

相澤も二人の気持ちは理解できなくもない。しかし、懸念材料が多すぎるのだ。

「何度も言うが、現在は状況が悪すぎる。学生を参加させたことで何かあれば雄英高校、ひいてはヒーロー社会全体への批判もあり得るだろう」

第一にまず、状況がひつ迫していてリスクが高すぎることだ。

経験不足の学生を抱え込んでやっていけるほどの余裕はないのが

現実だ。それも一年生となれば余計に負担が大きい。

もしそれで何か間違いが起きれば、生徒の命が危険にさらされるだけでなく、学校を始めとした関係各所への批判が起きかねないのだ。

「そもそも、クラスがまとまっていけない状況で外のこと意識を向けている余裕があるのか？」

「そ、それは、学級委員長として力不足で申し訳なく思っております」相澤の指摘に表情が厳しくなる飯田と切島。

第二の理由に、爆豪に対するクラスメイトの感じ方、そしてそれ起因するクラス内の不和があった。

爆豪に対する悪感情を持っているクラスメイトが一定数いるのが今のA組だ。

改人・骸無の身の上につまわる話を聞いて、その原因を爆豪のせいだと責めることで心の平穏を保とうとする者や原因となった彼の言動に嫌悪を示す者など、理由は一つではないが、爆豪に対する悪感情がある。

そんな状況で爆豪を探しに行くなどと主張するクラスメイトがいれば、不和はさらに悪化するだろう。

感情によるものだ。理性でどうこうという話ではないのだから、難しい。

「爆豪の搜索も警察が行ってくれている。今は大人に任せて情報が入ってくるのを待て」

いいな。と、念押しをする相澤に不承不承ながら首を縦にふる飯田と切島。

「それで、先生。爆豪の情報、何か入ってきてねえツスカ？」

「……伝えられることは何も。さあ、分かったら早く行け」

「失礼いたしました」

最後に質問の返事を聞いて職員室を去る二人。

それを見送った相澤は大きくため息を吐いた。

「あいつめ。学校からいなくなっても問題を残していくとはな……」

爆豪の事を考えてこめかみを押さえる相澤。苦労が尽きない。

先ほど二人には伝えられなかったが、爆豪に関しての情報が一つ



入ってきていたのだ。

その内容を伝えれば、クラスの一部が暴走する可能性が考えられる情報だった。

「あのバカ。なんでヴィジランテなんぞになってやがる」

それはとあるヴィジランテの組織に爆豪が参加しているとの目撃情報。

今頃、何をしているのかと思いはせる相澤の顔には、勝手なことをしてる爆豪への憤懣とわずかに見せる心配があった。

とある町の人気のない裏道で、爆発音が響き渡る。

倒れ伏すヴィランたちの真ん中で、一人たたずむ金髪の少年。

ボロボロに傷がついた装備と鬼気迫る表情を張り付けた彼こそ、雄英を自らの意思で去っていった爆豪であった。

「ただだ、まだ足りねえ。骸無を……俺は出久を止めなきやならねえんだ！」

呟くように、しかしそれでいて悲痛な叫びのような。

彼を動かすものは罪悪感？ 責任感？ 正義感？ それとも……

それがわかるのは、きつと骸無と再会したときだ。

緑谷出久は呪いをかけました その1

——横浜市神野区

商業施設が並ぶとあるビルの前は物々しい雰囲気にもまれていた。猫の子一匹逃さないと静かに包囲網を作るヒーローと警察官たち。警察の必死の捜査により、ヴィラン連合のアジトの場所、そして首魁である死柄木がそこに滞在する時間すらも調べ上げて今日、摘発へと踏み切ったのだ。

雄英のOBをはじめとした歴戦のヒーローたち。武装した警察の精鋭たち。

ヴィラン連合のアジトを壊滅させる準備はすでに整っている。

「DETROIT SMASH！」

「先制必縛……ウルシ鎖牢！」

隠れ家的なバーへと偽装されたアジトにオールマイトとシンリンカムイが殴り込む。

ヒーローの突然の登場に、中にいた犯罪者たちは慌てふためきだした。

「オールマイト!? なんでここに……」

「くそー！ ヒーローどもめー！」

綿密な計画の元に実行された摘発作戦によって、ヴィランたちは口々に抵抗もできず次々と捕まっていく。

その中の一人に、最大の目標である死柄木も含まれていた。

シンリンカムイの必殺技に拘束された姿のまま、オールマイトと対峙する。

「……ッ！ オールマイトオ!!」

「観念しろ、死柄木弔。これで終わりだ」

無抵抗を勧告するオールマイトへ死柄木は憎悪に染まった目で睨み返す。

毛の先ほどもこのままおとなしく逮捕されるつもりなどないことが意思として伝わってくる。

「終わり？ 勝ち誇るなよ、クズめ。もう勝ったつもりか？」

「おまえが何かするのを見逃すほど我々は甘くないぞ！ 大人しくしている」

「見逃さない？ ……ハハハ！ 笑わせてくれるぜ、オールマイト。まるで節穴だア！」

オールマイトの言葉を嘲笑する死柄木。

余裕ともとれる発言にオールマイトは警戒心を強める。

「それはどういう意味だ!？」

「俺はこれでもヴィラン連合の『リーダー』なんだぜ？」

護衛が全くいないとでも思っているのか？

そう死柄木の口元が弧を描いて嘲笑った瞬間、オールマイトの前髪が数本千切れ落ちる。

警戒心を強めていたオールマイトが反射的に身を躲さなければ深手を負っていたと感じられるほど強力な蹴撃。

その攻撃の余波だけで周囲の敵味方を吹き飛ばす、オールマイトを彷彿とさせる威力を放つことができる敵などそう多くはない。

一撃でヒーロー優位の状況をひっくり返した人物。それは……

「よくやった、骸無」

「……先生」からキミの撤退を補助するように命令されている。指示を」

ヴィラン連合最高戦力が一つ、改人・骸無。

脳無、身無たち改人を引き連れてこの場に現れ、死柄木を解放した彼はオールマイトの前に立ちふさがる。

フルフェイスのヘルメットで表情は見えず、声音も無機質な印象を与える骸無の姿に、オールマイトは拳を怒りで震わせて叫ぶ。

「緑谷少年……死柄木弔！ これ以上、彼に罪を重ねさせるな!!」

「ハンッ！ 人聞きが悪いなア。まるで俺たちが無理やりやらせているみたいな言い方だ。骸無、おまえの本心つてやつを見せてやれよ」

オールマイトの怒りを鼻で嗤い、骸無に指示を出す死柄木。

指示を受けて即座に戦闘にもつれ込む骸無とそれを受けて立つオールマイト。

両者は、建物内を破壊しながら拳打の応酬を交わしていく。

『クツ、彼の相手は私がするしかない……皆、頑張ってくれ!』

骸無の相手で精いっぱい、他のヒーローや警察の援護ができないオールマイト。

横目で見れば、彼らはすでに改人たちと戦闘を開始していた。

死柄木は、骸無たちに時間稼ぎをさせて撤退している。

今回の摘発で一番のターゲットを逃してしまった。

悔しさで奥歯を噛みしめるが、状況はそれどころではなかった。

敵味方入り乱れての乱戦だ。

改人たちの相手をする仲間を案じるも、何とかしてくれることを信じて目の前の骸無に集中するしかない。

この骸無も、いや、緑谷出久もオールマイトにとっては救いなければいけない一人なのだから。

「やめるんだ、緑谷少年! 君がこんなことをする必要はない!」  
「……倒す」

戦いながら説得を行うオールマイトだが、機械のように戦う骸無に表情をゆがめる。

以前は見られた緑谷出久としての感情が見えてこないことに焦りと怒りを感じる。

より強い洗脳を受けたのか、それとも……

不安の影が心に差し込んでくる中、希望を捨てないオールマイトは  
“緑谷出久”の心に訴えるべく言葉を紡ぐ。

「緑谷少年、私は君に謝らなければならない」

激しく戦いを続け、場所を移動しながらオールマイトが口を開く。

それは過去を語り、自身の発言を謝罪するものだ。

「一年以上前のあの日、初めて君に出会った時のことだ」

あの緑谷出久の運命が変わってしまった日の話を持ち出され、骸無の動きも思わず止まる。

骸無が反応したことで手ごたえを感じたオールマイトはたたみかけるべく、言葉を積み上げていく。

「私は、君の抱える苦しみに気づかず、無思慮に言葉を投げかけた」  
苦し気な表情でオールマイトは当時の言葉を振り返って思う。

「今思えばなんと傲慢な言葉だっただろうか。私は、自分が恥ずかしい」

「夢を見ることは悪いことじゃないが、現実も相応に見なくてはな、少年」

自分自身も無個性でありながら、この国には抛り所となる「柱」が必要だと、「平和の象徴」が必要だとヒーローを目指し、OFAを引き継いでNo.1ヒーローとなった。

そんなかつての自分と似た夢を抱いた少年に投げかけた言葉としては、上から目線の、酷く冷たい言葉だった。

別にオールマイトは間違ったことは言っていない。「無個性」がヒーローを目指すという危険性を考えれば当然の言葉であり、厳しい現実でもある。

だが、10年以上苦しんできた少年の夢を否定する言葉としては、本当に最適な言葉だったのだろうか？

見ず知らずの少年で、事情も全く知らない相手だったとしても非情な言い方ではなかっただろうか？

そう自問自答してみれば、答えはすぐに出た。

知らず知らずのうちに傲慢になっていたオールマイト。

だからこそ、何の力も持たないままヒーローたちが憶する中立に向かつていった、誰よりもヒーローらしかった彼にその言葉を伝えなければいけないのだ。

「すまなかった、少年。そして、あの日伝えることができなかった言葉をもう一度言おう」

USJ襲撃の時に一度伝えて以来のあの言葉を……

「緑谷出久。君は、ヒーローになれる！」

かつて緑谷出久が欲してやまなかったその言葉。

齢4歳の頃に「無個性」だと告げられたときから望み続けたその言葉を。

ようやく待ち望んだ言葉を受けて、骸無はヘルメットを外し素顔をさらす。

だが、俯いていてその表情は見えない。

「オールマイト……緑谷出久はヒーローになれるんですね？」

「ああ、そうだともし！」

骸無からの問いかけに力強く頷くオールマイト。

自分の言葉が骸無の心に響いたことを願って、オールマイトは願いを込めて彼を見る。

「なら、ボクももう一度問いかけます」

そう言っただけで伏せていた顔を上げ、オールマイトを見据えて言い放った。

「ボクは、緑谷出久は改造人間です」

「なッ！ 少年!？」

見つめる瞳は絶望で濁りきっている。

かつての憧れのヒーローを前にして、いや、だからこそ絶望した表情で話を続ける。

「ヴィラン連合に人体実験にかけられて、骨を鋼に、筋肉も神経も臓器も、身体のうちこちを切り刻まれて改造されています」

胸元に手を当てて、かつてと全く違うモノになってしまった自分の身体について語る。

「ヴィラン連合の作戦に従って、多くの犯罪行為をしてきました。

……多くの人を傷つけ、殺しました」

まるで、懺悔のような言葉。人を殺めた感触を思い出したのか、それを告げた時に拳をギュツと握りこむ。

そして、一年以上前のあの中学生だったころのように、オールマイトに問いかける。

「こんな化け物でも、ヒーローになれますか？ こんな骸無でも、あなたみたいになれますか？」

何かを期待するように笑いながら、しかし、目だけは絶望に濁ったままで。

骸無は、昔の緑谷出久ではなくなってしまった彼は問いかけるのだ。

“ヒーローに、あなたみたいになれますか？”

一年と少し前にオールマイトに尋ねたように。

十一年前に母親に尋ねたように。

彼の言葉にシヨックを隠せないオールマイト。何かを伝えなければならぬ一心で口を開く。

「それは君のせいじゃない！ 君は悪くない!!」  
ついて出たのは、そんなありきたりな言葉。

悪に利用され、翻弄され、悪事を犯してしまった被害者を慰めるにはびつたりの言葉だ。

かける言葉として間違いとは言えないだろう。しかし、  
「オールマイト、それはボクの欲しい言葉じゃないよ……」

目の前の少年だった存在にとつて正解とは言えない。  
ちがう。ちがうんだよ。と、首を横に振る骸無は絶望していた。

誰も、彼が望む言葉を言ってくれないのだから。  
今、ここで、それがたとえ嘘でも言つて欲しかったのに。憧れてい

たオールマイトに言ってもらえればそれで満足できたのに……。  
オールマイトは、また言葉の選択を間違えたのだと自覚した。

自覚したとてもはや手遅れなのだ。  
もう、オールマイトの言葉は骸無には届かない。

「私が来た！」  
と、オールマイトは言う。

ならば、骸無はなんと答えるだろう？  
「もう、ボクは欲しい言葉を待ち続けることに疲れたんです」

「待ちくたびれました」  
と、彼は言う。  
「遅すぎますよ」

再びフルフェイスのヘルメットを装着する骸無。  
それはあたかも緑谷出久という存在を仮面で隠して骸無に成り代

わったかのようなだった。  
「緑谷少ね——ぐッ！」

なおも呼びかけようとするオールマイトだったが、骸無は聞く耳など持たず、攻撃を仕掛けてくる。

油断を突かれて直撃を受けてしまったオールマイト。戦闘不能になるほどではないが、大ダメージだ。

「待つんだ、緑谷少年！ 話を——」

「死イッ！」

身体的にも心理的にも鈍った動きを骸無が見逃すはずがなく、渾身の一撃が体の芯を捉えた。

壁にめり込み血を吐くオールマイト。

さすがのオールマイトもすぐには動けない。

「終わりです。これで！」

「ゴフツ！ 待つんだ、少年」

とどめを刺すべく骸無が拳を振り上げる。

オールマイトは文字通り血を吐くような思いを込めて呼びかけるが、意に介さず骸無の追撃が迫る。

かに見えたが——

響き渡る爆発音。少し遅れて破壊をもたらす熱と風が骸無を横合いから殴りつけてきた。

「誰だ!? いや、この個性は……」

数メートル爆風で飛ばされた体勢を即座に整えながら攻撃された方向に視線を向ける骸無。

その下手人は即座に分かった。

オールマイトとはまた別の、そして長い因縁の相手だ。分からないはずもない。

「爆豪、勝己ッ！」

「よお、出久。しばらくぶりじゃねえか」

いつでも爆破ができるように掌を向けたまま、爆豪勝己は獰猛に笑う。

雄英を飛び出してからろくに整備も出来ず戦い続けてきたからか、身にまとうコスチュームはボロボロだ。

全体的に薄汚れており、布地の場所によつては破れてしまっている。

装備もあちこち傷ができており、メインの防具でもあり武器でもある籠手は表面の塗装やメッキが剥がれてしまっている。

そんなボロボロの状態にもかかわらず、彼の目は以前よりも危険な



雰囲気を漂わせていた。

「爆豪、おまえ、何の用だ！　なんでここにいる!？」

仮面を被り感情を殺したはずが、なお抑えきれずに感情を漏れ出させる骸無。

怒り、憎しみ。そんな負の感情を内包した殺意が爆豪に向けられる。

一般人が耐えられないプレッシャーを受けながら、爆豪はここに来た目的を告げる。

「てめえを、止めに来た」

「ボクを？」

「ああ」

思わず問い返した骸無に言葉少なく頷く爆豪。

対する骸無の反応は、怒りだった。

「そうかい。なら、やってみろよ！　出来るもんならなア！」

「できる出来ないじゃねえんだ！　やらなきゃならねえんだよ!!」

積もり積もった憎悪と悲壮な覚悟が、いま、ぶつかり合う。

## 緑谷出久は呪いをかけました その2

ビルの天井から埃が舞い落ちる。

建物が大きな衝撃を受けて揺れ動く。

連続して起こる爆発音と破壊音はその戦闘の激しさを物語っていた。

「死ねー!」

「チィィー!」

A・Pシヨット  
徹甲弾

一点集中した起爆で破壊力を上げた必殺技を骸無に打ち込む爆豪。コンクリの壁をも打ち砕く威力の攻撃を連射され、防御に回る骸無。

改造人間の名は伊達ではなく、防御に回ったのは一瞬だけで、常人ならばノックアウトされてもおかしくない猛攻を受けながら反撃を繰り返した。

「この程度の攻撃でボクが倒せるとでも思ってたのかよ!」

「思ってたねえよ、バアカー!」

骸無が個性で空気を固めた弾丸を放つ。

が、爆豪はそれをすべて爆破で迎撃に成功する。

空気という不可視の弾丸を撃ち落とせるその戦闘センスに、相手をしている骸無は苛立ちを隠せない。

迎撃され、逸らされた弾丸が爆豪の周囲の壁や床を破壊していく様子からもかなりの殺傷能力を持たせた一撃だったことがわかる。

それほどまでに骸無の爆豪への憎悪は深い。

それゆえに、骸無の攻撃はさらに殺傷能力が高いものを、確実に、そして自分のその手で殺せるモノを自然と選択していく。

〃五指刃化〃

〃関節回転〃

〃筋力増強〃

鋭い刃物と化した右指を手首ごと回転させて、右腕を殺人ドリルへと変えながら強化した筋力で特攻を仕掛ける。

人体を容易にミンチにするであろう攻撃。殺意に満ちた一撃だ。

「そおくるよなあ、てめえは!」

当たれば即死の攻撃を爆豪は驚異的な見切りによって薄皮一枚で躲しきる。

雄英を出奔してから爆豪は対骸無戦闘を研究し尽くしてきたのだ。その結果がこの見切りへと繋がっている。

紙一枚で躲された攻撃は決定的な隙を作り出した。

「死ねや！」

「しまっ——」

骸無へと向けられた爆豪の両掌が真っ赤に灼熱する。

テルミット  
焼夷弾

超高温の爆風が骸無を襲い、後方へと弾き飛ばす。

爆風の衝撃、高温の熱によるやけど、燃焼により一瞬途絶える酸素。

複合したダメージにさすがの骸無も膝をつきそうになる。攻撃を受けたその姿からも攻撃の凄まじさが垣間見える。

「ようやくその面アみせたな、出久」

「……爆豪オー！」

割れたフルフェイスマスクから見せる瞳は、相変わらず憎悪に染まっている。

だが、その目の観察力は濁ることなく爆豪の異変を見逃さなかった。

「そんな捨て身の攻撃をしてくるなんて……正気？」

爆豪の両掌からは煙が上がっており、特殊繊維の焦げる臭いに混じって肉が焼ける嫌な臭いが漂っていた。

確実に限界を超えている。無理、無茶、無謀である。

「ンなもん、てめえを倒せるなら安いモンだろーが！」

が、爆豪にとっては考慮に値しない事柄だ。

彼にはそうするだけの理由があるのだから。

「どうして、そこまで……」

「全部、俺のせいだからな。おまえが、そうなったのは全部俺のせいだ！ だから！ 俺が止めなきゃならねえんだ!!」

たとえ、自分の命に代えてでも。そんな覚悟を語る爆豪へ骸無は冷やかに問いかける。

「それは、ボクを殺してでも？」

「……ああ」

短く首を縦に振って肯定する爆豪。

事実、先ほどの攻撃は命を奪うことを念頭にした攻撃だったのだから。

ヴィランを止めるために殺害も厭わない。

それはヒーローの考え方ではない。

爆豪はヒーローになるという夢を諦めてでも、骸無を止める覚悟を決めていたのだ。

「なんだよそれ……ふざけるな！」

もつとも、骸無からすればとうてい許容できないモノでしかなかったのだが。

「自分のせいだって言っておきながら、ボクを殺してでも止める？」

馬鹿にしてるだろ！ おまえ！」

ひび割れた仮面をかなぐり捨てて爆豪へと殴り掛かる。

当然、爆豪も迎撃をするが、骸無は個性を複数使い、高温への耐性や防御力を上げて、改造人間のタフネスに任せてがむしやりに攻撃を仕掛けていく。

「いつまで自分の方が格上だと思ってるんだよ！ ボクを殺せるつもり？」

文字通り怒りをぶつけながら爆豪の傲慢さを指摘する。

特攻じみた攻撃に爆豪は身を削られるように傷を増やしていく。

「そうやって見下してくる態度がムカつくんだ！ いつもいつも、そうやって!!」

「ガッ!？」

紙一重で躲し続けていた爆豪だったが、ついに直撃を食らって吹き飛ばされる。

強化された蹴りがとっさにクロスした腕のガードごと爆豪を貫く。

壁に蜘蛛の巣状のヒビを作り、その背を預けている爆豪へ骸無が近づいていく。

「これで終わりだよ。爆豪」

「グフツ。クソが……」

ガードした腕は無残な状態だった。

骨折こそしていないが、籠手は砕け散り、衝撃で痺れたように動かすことができない。

両手が使えない、つまり個性が使えない爆豪に抵抗する余力はない。

完全に詰みの状況だ。

「それで、最後に言い残すことはあるかな？　一応、幼馴染の誼で聞いてあげるよ」

勝者の余裕からか、それとも最後の慈悲か。

その心情は分からないが、言葉を投げかけてきた骸無に爆豪は口を開いた。

「おまえは、俺を殺せたら満足できんのか？」

「どういう意味？」

意図が分からず問いを返す骸無。

爆豪は自分の心情をさらけ出していく。

「てめえがそうなたちまったのは、全部俺のせいだ。だからおまえは俺を殺していい」

「なんの……つもり？」

自分を殺す権利があると告げる爆豪に骸無は思わず動揺する。

爆豪の言葉はまだ続きがあった。

「俺を殺せば、おまえの恨みは晴れるだろ？　んなら、俺の命なんかくれてやる。だから、もう、これ以上、ヴィランそっちにいんのはやめてくれ」「君を殺して、全部終わりにしろって言うの？」

頷く爆豪。

それは懇願であり、懺悔であり、贖罪を求める言葉だった。

緑谷出久が骸無という悪に堕ちたのは、すべて自分のせい。ならば、自分がすべて責任を負えばすべて解決する。

そんな風に考えた結果の言葉だった。

今まで見てきた彼からは想像ができない姿に、骸無の心がざわつくのを感じた。

「何を、言っただよ！ ボクを殺してでも止めるって言ったり、自分が悪いから殺してくれって言ったり、無茶苦茶だ！」

まず湧き上がってきた感情は怒りだった。

自分勝手なことを言う爆豪への。

そして――

「一番気に食わないのは……ッ！　なんでおまえが辛そうな顔してるんだ！」

何より悲劇のヒーロー面して自分に酔っているようにしか見えな  
いことへの怒りだ。

「苦しかったのは僕だ！　辛かったのは僕だ！　痛かったのは僕だ  
！」

命を差し出せば、勝手に気持ち晴れて今まで出久が受けてきた苦  
痛がなかったことにでもなるともいえるのだろうか？

それこそ、自身の命に対する過大評価であり、骸無の恨み・怒りへ  
の過小評価というものだ。

出久にとつてみれば、傲慢な考えだとしか感じられなかった。

「苦しくて辛くて痛くて！　……いつも泣いていたのは僕だ！　なの  
に……それが何で君が泣きそうな顔してるんだよ」

怒っているような、嘆いているような、泣いているような、そんな  
複雑な感情の波に心がぐしゃぐしゃにされる。

これ以上、話を聞くことは耐えられないと感じた骸無は、心をかき  
乱す存在の爆豪を排除しようと動き出す。

「そんなに望むなら、殺してやる！　もう、死んでよ、かつちゃん」  
拳を振り上げる骸無。

だが、その行動は遅かったと言わざるを得ない。

その拳を横から止める人物がいた。

「止めるんだ、少年！」

「オールマイト……」

ダメーじから復活し、ようやく動けるようになったオールマイトが  
二人の戦いに介入してきたのだ。

爆豪への執着のあまり、時間をかけすぎた骸無のミスだ。

タイミングは最悪だ。

骸無にとつても、オールマイトにとつても。

「なんで止めるんですか？ オールマイト。あなたもかっちゃんも正しくて、僕が間違っているって言うんですか!？」

「そうじゃない！ 話を聞いてくれ、緑谷少年！」

ヒーローとして人が殺されそうになっていたら止めるのは当然のことだ。

正常な人間ならそう判断できる。

だが、今の骸無は正常ではない。憎い幼馴染からの言葉に動揺し、混乱して精神状態はぐしゃぐしゃだ。

だから、爆豪を殺害しようとした自分を止めたオールマイトの行動を……骸無は自分への否定に捉えてしまった。

「誰も僕の味方になってくれない。誰もボクを見てくれない！ 誰も僕を救ってくれない!!」

頭を抱え、悲痛に叫ぶ。

もはや狂乱といつていいほどに錯乱している。

「違う、そんなことはない！ 私は君の味方だ！」

「オールマイトに、僕の何が分かるって言うんですか!？」

「少年!」

オールマイトの手を振り払い後ずさる骸無。

その背後にはワープゲートが出現し、その身を包み込んでいった。「待て、待つんだ、緑谷少年!」

引き留めようと手を伸ばすオールマイトだったが、虚しく空をきる結果に終わる。

また、救えなかった。

悔しさに震えるオールマイト。その背後で動く気配がした。

「どこへ行くこうというんだい？ 爆豪少年」

「どこへだっていいだろ。あいつがいないこの場にはもう用はねえよ」

骸無がいなくなったことで立ち去ろうとする爆豪を呼び止める。

当然、そのまま行かせるわけにはいかない。

「そうはいかない。骸無を追いかけるつもりのようなのだが、一体、彼をどうするつもりだ?」

「どうする……?」

ヒーローでもない爆豪に骸無を追いかける資格はないことは置いておいて、その目的を尋ねるオールマイト。

理屈をぶつけるよりも、爆豪の内心を知るべきだとの判断からだつた。

どんな言葉がでてくるかと身構えるオールマイトだったが、その返事は予想外のものであった。

「俺は……俺は、どオすりやいいんだ?」

「爆豪、少年?」

彼の口から出てきたのは弱々しい言葉。

憧れのヒーローを前にしたからか、それとも幼馴染からぶつけられた感情に影響されたからか、耐えきれなくなったように弱音を吐き出していく。

「俺の言葉がアイツを傷つけた。俺がアイツを追い詰めて、人殺しまでさせちゃった。全部、俺が悪いんだ。だけど、ンなもん、どうやって償えばいい?」

その姿は、己の犯した罪の重さに震える咎人そのものだった。

「俺よりもアイツの方が強え。俺じゃ、アイツを止められねえ!俺のせいなのに、何もできねえ! なら俺が命を差し出せば終わるのか? あいつは満足してくれんのか? もう、どうすりやいいのか、分かんねえんだよ!!」

客観的に見てチグハグに見えた爆豪の行動の理由がこれだった。

本人もどうすればいいのか分からないまま、罪の意識に悶え苦しんでいただけなのだ。

爆豪の慟哭を受け止めるオールマイト。

「爆豪少年。一つ言えるのは、自分の命一つ差し出して償える罪なんてないんだよ。罪とは、生きて背負っていくものだ」

「なら、なら、どうしろってんだよ!」

あえて厳しい言葉を投げかけるオールマイト。



下手な慰めよりも、そちらの方が良いと思ったのだ。

爆豪の考えは、明らかに間違っているのだから。

「どうしたらいいか。それはいたってシンプルだよ。……緑谷少年に一言、しっかりと謝ることさ」

自分のしたことが悪いことだったと自覚したのなら、まずは謝罪することだと諭す。

いたって当たり前。当然のことだ。

「なんだよ、それ。俺のしたことは謝って許されることじゃ——」

「許されるために謝罪はするんじゃない。自分の反省を心から伝えるためにやるんだ」

自分のしたことは許されることじゃない、無意味だと反発する爆豪の言葉を遮り、オールマイトは強く言葉をかける。

許す許さないは相手が決めることであって、謝罪する側が判断することではない。

だが、その謝罪がなければ許す許さないの前提に立つことも出来ない。

爆豪はスタートラインにすら立っていないなかつたのだ。それで、相手を止めるだとか、命を差し出すだとか、見当違いも甚だしいわけで。

「もう一度、緑谷少年と話をしなきゃな。そのためにも、彼を連れ戻さなければならぬ」

「俺は……俺はッ！」

「彼は私たちが絶対に取り戻す。君はもう一度彼と話せるまで、待っているんだ」

これ以上、ヴィジランテの真似事をさせないように説得していくオールマイト。

しかし、爆豪はもともと大人しい性格はしていない。言われて聞くようなキャラなどではない。

「それでも、俺の責任なんだよ。オールマイト。だから、アイツを見つけるのも俺がやらなくちゃいけないんだ！」

「おい、爆豪少年！ グツ、シット！ こんな時に制限時間が」

走り去る爆豪を追いかけようとして制限時間を迎えてしまった

オールマイト。

その背を見送り、無力に拳を握る。

「私はまた、彼らを救えなかった……いや、まだだ。まだ諦めるものか！」

顔を上げるオールマイトの瞳には、覚悟が映し出されていた。

## 緑谷出久は呪いをかけました その3

ヒーロー・警察サイドによるヴィラン連合の一斉摘発。

それは一定の成果は上げたものの、死柄木という最大の目標を逃す結果となった。

しかし、だからといって立ち止まることは許されていない。

ヒーローと警察は得られた情報を元にさらにヴィラン連合を追い詰めるべく捜査を進めていた。

慌ただしく人が行き交う捜査本部。次の摘発作戦へ向けて最後の準備を進めているところだ。

そんな捜査本部がある施設の一室にて、オールマイトは体を休めていた。

関係者以外は立ち入り禁止とした部屋の中で、トゥルーフォームを晒すオールマイト。

その表情はけっして晴れやかなものとは言えなかった。

先の作戦を思い出し、拳を握りしめる。

逃がしてしまった死柄木の事、救えなかった出久のこと、止められなかった爆豪のこと。

自身の不甲斐なさが身に染みる。

「どうした、オールマイト。話は聞いていたかい？」

「……すまない、塚内君。少し考え事をしていた」

「作戦開始はすぐ迫っているんだ。しっかりしてくれ」

「ああ、気合をいれなければな！」

謝罪するオールマイトに塚内警部はため息を吐く。

なんだかんだと付き合いの長い彼が、オールマイトのメンタルがいつもとは違うことを察することができたのは当然のことだった。

そして友人としてオールマイトを案じるのもまた当然のことだ。

「で、考え事というのは？ 取り逃がした死柄木のことかい？」

「いや、それもあるが……骸無、いや、緑谷少年と爆豪少年のことを考えていた」

前回の作戦で相まみえる機会がありながら、両者ともに説得するこ

とができなかった。

そのことが悔やまれて仕方がないのだ。

もっと、かける言葉があったのではないか。彼らの心に訴えかけるふさわしい言葉があったのではないか。

そんな考えが頭の中をぐるぐる巡っているのだ、と、そう塚内に独白するオールマイルト。

珍しく弱音を吐くオールマイルトに塚内はあえて笑って励ましの言葉をかけた。

「らしくないことを考えているね。オールマイルト。君はそうじゃないだろう?」

「私らしくない?」

「ああ、そうさ。僕が知っているオールマイルトっていうのは——」

塚内が考えるオールマイルト像を語る。

『私が来た』そう言って現場に駆け付け、正義を行動で示してきたヒーローがオールマイルトだという。

オールマイルトというヒーローが最も人々の心を動かすのは、その言葉ではなくその姿なのだ。

「君はそうやって多くの人を救ってきたのだろうか? それこそちよつと強引なくらいにね」

「……そうだな。あのときは言葉を尽くすことよりも、彼らを止めることに全力を尽くすべきだったんだ!」

ヘドロ事件のあの日、自分が間に合わなかったという負い目から自然と弱腰な対応をしてしまったと自覚したオールマイルトは覚悟を決めなおした。

次こそ彼らを救うのだと。

「次に会う時こそ、必ず止めてみせる! 緑谷少年を取り戻すんだ!」  
力強く告げるオールマイルト。

しかし、心の隅で弱気な気持ちがよくる。

果たして、まだ間に合うのだろうか、と。

——第二次 ヴイラン連合摘発作戦

前回の作戦で得ることができた情報からさらに捜査を進め、ヴィラン連合の新たなアジトを見つけ出したヒーロー・警察連合。

今回は二つのチームで戦力を集中させた上での作戦決行だ。

片方は改人の製造プラントがあるとされる廃工場。もう一つは死柄木が潜伏しているとされる廃ビルだ。

オールマイトは今度こそ死柄木を捕らえるべく、死柄木捕縛チームとして参加している。

作戦開始までの時間、オールマイトは緊張した面持ちで車両の座席に腰掛けていた。

それもそのはず。

なぜなら、隣には師匠であるグラントリノが不機嫌そうに座っているのだから。

「まったく、おまえは本当に教育に関してはど素人だな。ええ？ 俊典？」

「はい……おっしやる通り、未熟者でして」

「んなことあ、分かっとなるわい！」

身を縮こまらせるオールマイトを叱りつけるグラントリノ。

そのしかめ面が不快をありありと映し出しているが、その原因が何かはつきりと分からないので滅多なことは口にできない。

「おまえさんが面倒見きれんと後継者でもない教え子をよこした時点で未熟具合は折り込み済みだつての」

「その節は、大変ご迷惑を……」

「そうやって骨を折って鍛えてやった有精卵どもが揃ってあの様だあ、どうなっとなるんだ。ええ!？」

謝るオールマイトへようやく不満の中身を口にしたグラントリノ。

職場体験でわずかな期間ながら指導をしてやった爆豪と轟の現状と、それを許してしまった雄英教師陣並びにオールマイトへの不満だった。

「ひとえに私の力不足が原因です。返す言葉もない……」

「まったく。自覚があるなら努力しておけ。まあ、あいつらにも悪いところがなかったわけでもないが」

悔恨を噛み締めるオールマイトの隣で指導をした二人の事を思い出す。

歴戦のヒーローであるグラントリノには、まだ指導者としての経験が短いオールマイトには見えていない部分を感じられていた。

「あいつら二人、ヒーローとして才能はあっても感性は全然持っていない奴らじゃったからなあ」

「あの、よくわからないのですが？」

ヒーローとしての『才能』と『感性』。その違いがよくわからずに聞き返すオールマイト。

その質問にグラントリノは一度頷いてから、教えを授けるように語りだした。

「才能があるってのは、身体能力が優れてる、体格に恵まれてるだとか強い個性を持っているとかそういうことを言うわけだ」

爆豪も轟も『爆破』に『半冷半燃』という強力な個性を持っており、身体能力も優れている。

まさしく、『才能』のある有望なヒーロー候補と言って差し支えないだろう。

では、『感性』がないとは？

「ヒーローとしてのセンスはダメダメだったな」

一言で言えば、と、前置きをして告げるグラントリノ。

オールマイトは首を傾げる。

「センス、ですか？ お言葉ですが、彼らにセンスがないとは思えませんが」

「表面的な話じゃねえのさ。もっと根本的な、根っここの考え方の話だ」  
戦闘技術や個性の扱い方とかの話ではないと言う。

大事なはそのヒーローの考え方、思考方法なのだと言論を語るグラントリノ。

「能力ってのはそいつが持って生まれたモンだけを言うんじゃないやねえだろ？ そいつの努力して身に着けた結果も含めて能力っていうもん

だ。その努力の方向性を決める考え方が間違つてりや、当然、能力は伸び悩む！」

爆豪、轟はその点が未熟だったのだ。

轟は父親を意識しすぎて自分の才能を自分で狭めてしまっている。爆豪は凝り固まったプライドが邪魔をして、成長の方向を限定してしまっている。

どちらも多くのヒーローを見てきた古豪グラントリノからしてみればばかばかしい話であった。

自分の父親が嫌いだから自分の能力を選び好みするなどただの我儘でしかない。

その結果、救えたはずの人が救えないとなった時に後悔しても遅いのだ。

実力を身に着けることに専念する。そう言えば聞こえはいいが、一人で出来ることなどたかが知れているのだ。

他人をないがしろにし、協調性を無視したヒーローが大成できるだろうか？

真にヒーローとしての感性を持っているのならば、その程度のことには真っ先に思い浮かぶはずだ。

だから、彼らには才能はあっても感性がないのだという。「しかし、そういった考え方というのは後から教育や指導を受けて見についていくものでは？」

「だから、それを教えられなくても最初から持つてるやつはスゲェんだろうが。そういうやつは成長速度は他とは違う！」

ある意味見えているゴールが違うのだという。だから、努力の方向性・効果が変わってくるのだ。

その説明を聞いて腑に落ちたような気持になったオールマイトは、大きく「なるほど」と頷いた。

……ところで、グラントリノの杖で小突かれて痛みに声を洩らす。「阿呆ー！何が『なるほど』だ！そこんところを教育しきれなかった結果が今の状態だろがい!!」

「も、申し訳ございません!!」

分かってんのか、新米教師！

ス、スミマセン！

と、上下関係がハッキリしている会話を繰り返す二人。  
天下のNo.1ヒーローも師匠相手では形無しであった。

昔からよく知る情けない姿を見せられて一つため息を吐いたグラントリノは呆れた様子で告げる。

「だいたい、才能よりも感性・考えの方が大事うんぬんかんぬんと言えば、おまえさんが最たるもんじゃろうが」

無個性でヒーローとしての才能はなかったが、『国民の拠り所になり、人々を支える柱になる』と信念をもってヒーローを目指し、その頂点に上り詰めたのがオールマイトだ。

それを師から告げられて、ハツと気が付くオールマイト。

『そうだ。私がワン・フォー・オールの後継者に緑谷少年を選ぼうと思ったのは、彼が強い個性を持っていたからじゃない！ 誰もが立ち竦む中、人を救うために一人走り出したその姿に心動かされたから選んだのだ！』

師の言葉によって、自身の心の根本的な部分を改めて見直すことができたオールマイト。

一層、気合を入れて摘発作戦へと意識を集中し始めた。

もう間もなく作戦開始時刻だ。

今度こそ、ヴィラン連合を倒し、緑谷少年を救うのだ。

そう心に誓うオールマイト。

さあ、決着の時はもうすぐだ。



## 緑谷出久は呪いをかけました その4

死柄木が潜伏しているとされる廃ビルへ摘発へと乗り込んだ警察とヒーローたち。

しかし、その作戦は序盤から苦戦を強いられていた。

「苦tagryecho狂wejaokrsldpgxくく!!」

「キエエエツ!!」

意味不明な言葉や奇声を発しながら脳無と身無たちが次々と警官やヒーローへと襲い掛かる。

四方八方を囲まれ、絶体絶命の状況に追い込まれていた。

「オールマイトさん、これ、嵌められたんじゃないですか!? 有り体に言ってヤバいでしょう」

「今回は相手が一枚上手だったか!」

脳無を複数相手に捌きながら声をかけてくるのは、九州から応援に駆けつけてくれたNo.3のヒーロー、ホークス。

彼ほどの実力者からしても厄介な状況であるのは明白で、その事実にもオールマイトは悔しさを滲ませて拳をふるっている。

突入した廃ビルには死柄木の姿はなく、代わりにいたのは小部屋や天井から次々と現れる改人たちだったのだ。

「畏だ!」

「感心しとる場合か、俊典イ!! さっさと片付けるぞ!」

「幸いなことに、一体一体は大した強さじゃない」

グラントリノとエッジショットが高速移動を繰り返しながら次々と脳無と身無を仕留めていく。

エッジショットの言う通り、改人たちの強さはそれほどではない。

ただ、問題は数だ。

廃ビルに詰め込めるだけ詰め込んだのではないかと思うほど、際限なく改人たちが襲い掛かってくるのだ。

終わりの見えない戦いは精神を消耗させ、焦燥感を煽る。これが恐怖を呼び起こせば、敗北は現実として迫ってくる。

「ああもう! こんなに数が多いなんておかしいですよ!」

「なんじやい、若いの。文句言ってる暇があったら働かんかい！」  
声を上げるホークスに、グラントリノが愚痴を言うなど叱りつける。

が、ホークスは首を横に振って言い返した。

「弱音じゃないですって！ こいつら数が多いだけで、トップヒーローを苦戦させるほどの力はない……こんなの倒すための罠としてはお粗末すぎませんか!？」

「まさか……」

ヴィラン連合の首魁・死柄木がいると偽情報を流してヒーローたちを罠にかけて待ち伏せをする。

至極合理的な作戦であり、事実、こうしてヒーローたちはその術中にはまってしまっている。

だからこそ解せないのだ。

オールマイトをはじめとしたトップヒーローが摘発作戦に参加することは予測できるはずなのに、数に任せるだけなのは。

相手はヴィラン連合。馬鹿ではない。もつと殺意や悪意にまみれたものであっても不思議ではないはずなのに。

ホークスの指摘でその疑問に気が付いたその場のヒーローたちは、ハッと一つの可能性に気が付く。

「塚内イ！ 別動隊との連絡はどうなってる!？」

「グラントリノ、待ってくれ。……だめだ！ 音信不通だ!」

グラントリノが警官隊を指揮する塚内に問いかければ、返ってきたのは最悪の答えだ。

この場にいる敵はすべて足止めをするための捨て駒。本命は向こうにいる。

別動隊が危険だ!

「オールマイトさん、こっちは何とかしますから向こうへ救援に行ってください」

「ホークス。しかし……」

「敵の思惑通りになってどうするんですか。こっちは十分対処できますよ」

「その通り。なに、こちとらトップランクのヒーローだ。信じてください」

このままではいけないと、ホークスがオールマイトへ別動隊へ救援に向かうことを提案した。

渋るオールマイトだったが、エッジシヨットからも後押しをする言葉を受け取る。

実力のあるNo. 3とNo. 5のヒーローの説得に、オールマイトも彼らを信じた。

「すまない。ここは任せたぞ！」

力強く領き、跳躍と共に改人を巻き込みながら壁を破壊して飛び出していくオールマイト。

彼を見送ったヒーローと警官隊は改めて脳無と身無の集団に向き直って戦闘態勢を整えた。

たとえ平和の象徴がいなくとも、この程度は何とかして見せる。

オールマイトが向こうを救ってくれるはずだ。

No. 1ヒーローの、*“平和の象徴”*への信頼は確かに彼らに力を与えている。

——同時刻 廃工場跡（改人プラント）

状況は最悪だ。

警官隊はほぼ壊滅状態にあり、ヒーローも多くが負傷している。

地面は大きく削れ、横転したパトカーからは炎と煙が上がっている。

先ほどから偶発的に起こり続けている爆発音や破壊音に混じって、悲鳴やうめき声が聞こえてくる。

様々なものが焼けて異臭が漂っている。血の臭いがする。

悪夢のような光景を作り出した本人は楽しそうに嗤っていた。

「No. 10ギャングオルカ、No. 6クラスト、No. 4ベストジーニスト……その他有象無象のヒーローたち。いやはや、これだけお集まりいただけるとは恐悦だな」

パチパチと手を叩いて乾いた音を響かせるこの男こそ、この惨劇を引き起こした張本人。

裏社会の帝王と呼ばれ恐れられた、オール・フォー・ワン。その人であつた。

事前の想定では狡猾で用心深い性格ゆえに己の安全が保障されぬ限り表に姿を見せないとされていた黒幕が目の前に現れたことで、現場の空気は糸を張りつめたような緊張感が支配していた。

「これだけのヒーローたちに狙われるなんて、ああ、なんとも恐ろしい恐ろしい……」

己の存在感に周囲が呑み込まれているのを分かっている、わざと芝居がかつた口調で周囲を見渡すAFO。

こんな明らかな挑発を受けて、黙っているほどヒーローたちは軟弱ではない。

「これだけの人員を簡単に壊滅させておいて、よく言う！」

「これ以上の暴虐、私が許さん！」

「貴様のいい様にはさせせん！」

ベストジーニストが真っ先に向かい合い、続いてクラストが義憤をぶつける。

獰猛にギャングオルカが睨みつけければ、その背後に彼のサイドキックを中心にヒーローたちも後に続く。

目の前の敵の強大さは嫌というほどに肌で感じ取っている。

強大な敵に恐怖を抱いていないわけではない。

しかし、引くわけにはいかないのだ。

ヒーローが悪を前に引いてしまえば、誰が平和を守る！

「負傷者を下がらせる！ 戦闘に自信のない者は救護にまわれ！」

「一瞬たりとも油断するな。こいつの得体が知れない……」

トップヒーローたちの指示に従い、各自動き出すヒーローたち。

勇気を振り絞って向かってくるその姿を前にAFOは嘲笑を浴びせる。

「まったく。なんて健気なんだろう。ヒーローというのはいつもそうだ」

複数の個性が飛び交い、ぶつかり合い、血を流す。

一般人が介入できない激闘は、始まってわずか10分ほどで終わりを告げたのだった。

——ヒーローたちの敗北をもって。

No. 10ヒーロー、ギャングオルカは壁に背中を預けるように気絶している。

No. 6ヒーロー、クラストはうつ伏せで血溜まりに沈んだ。

そのほかのヒーローたちも、誰一人として無傷なものはいない。

そしてまたNo. 4ヒーロー、ベストジーニストの命も風前の灯となっていた。

「さすがはトップクラスのヒーローたちだ。この僕をここまで手古摺らせるなんてね」

「ガフツ！ キ、貴様ア……」

首元を片腕でつかまれ、ボロボロの姿で宙に持ち上げられるベストジーニスト。

その場のヒーローたちの敗北を象徴するような光景に、まだ意識のあったヒーローの中には涙を浮かべているものさえいる。

だが、ヒーローたちの奮戦は無駄ではない。

体のあちこちに傷を作り、高級に仕立てられたスーツには血が染みついている。

とくに左肩の出血はひどく、ベストジーニストを軽々と持ち上げている右手とは反対に左腕はダラリと力なく下げられていた。

わずか10分程度の奮闘の結果だ。

この結果をどう評価するべきだろうか？

傷を負わせ、惜しいところまでいったと考えるべきか？

それともヴィランに負けてしまっただけで情けないと捉えるべきか？

ただ、ハッキリと言える成果が一つだけある。

「そこまでだ、オール・フォー・ワン！」

「やはり来たね。オールマイト」

ベストジーニストから手を離し、空を跳んできたオールマイトを迎え撃つAFO。

彼らは、ヒーローたちは耐えきることができたのだ。

平和の象徴が駆けつけてくれるまでの時間を。

「君に連絡が届いてからおそらく10分程度……ずいぶんと衰えたね、オールマイト」

「それがどうした、オール・フォー・ワン。貴様をここで倒す覚悟はとつくにできている！」

一瞬の衝突の後、距離をとり睨み合う両者。

互いの敵意を隠すことなくぶつけ合う二人には、退くという選択肢は存在しない。

奇しくも互いの意思は無言の同意を導き出した。

つまり、ここが決着の場なのだ。

「いくぞ、オール・フォー・ワン！」

「かかってこいよ、オールマイト！」

前に踏み込むオールマイト。迎え撃つAFO。

得意の右拳を打ち込むべく突進を仕掛けるオールマイトの圧は、並のヴィランであればその見た目だけで精神的敗北を植え付けることができるだろう。

だが、相手は積年の宿敵、OFAの継承者たちが代を受け継ぎながら戦い続けてきた、裏社会の帝王だ。

普通ならば必殺の一撃に悠然と対応して見せた。

両腕を個性で変形させ、イカの触腕のような形に複数分裂させてオールマイトに絡みつかせた。

広げられた網に自ら飛び込むような形になってしまい、勢いが削がれてしまった。

「捕まえたぞ、オールマイト」

「この程度、舐めるな！」

このまま拘束されてしまうか!? と、いうところをオールマイトは強引な方法で抜け出す。

自慢の怪力で拘束ごとAFOを振り回し、反対に地面に叩きつけて反撃へとつなげてみせたのだ。

地に半ば埋まる勢いで叩きつけたおかげで拘束が緩んだオールマ

イトは、拘束を脱し、続けて追撃を……することはしなかった。

「大丈夫かい？ ベストジーニスト」

作り出したわずかな時間を使って近くに倒れていたベストジーニストを救出し、戦闘から離れた場所へ横たえる。

戦闘に参加できず、いや、自らの能力を鑑みて悔しさを飲み込んで戦闘への不参加を決めた勇気あるヒーローたちがすぐさま救助活動にのりだす。

それを見届けたオールマイトはすぐさま戦場へと舞い戻った。

時間にすればほんの僅かな時間。

だが、AFOが体勢を立て直すには充分すぎる時間だった。

仕切り直す形になったAFOが口を開く。

「やれやれだなあ、オールマイト。ヒーローは守るものが多くて大変だ」

先ほど追撃できていれば決着がついていたかもしれないのに。

と、心にもないことを告げる。

だがしかし、そんな見え透いた挑発に乗るようなオールマイトではない。

逆に、AFOの弱みを見抜き、戯言を切って捨てた。

「無駄な挑発をするな、オール・フォー・ワン」

すでに一度死力を尽くして戦った相手だからこそ、この短い交戦の中でさえも感じ取れるものがある。

出会い頭の相手の言葉を意趣返しするように、オールマイトはAFOの虚勢を暴いてみせるべく、ハッキリと告げた。

「今、こうして戦ってハッキリ分かった。貴様は以前よりも弱くなった！」

「フッフ、それはお互い様というものじゃあないか？ オールマイト」

お互いの全盛期に比べれば、確実に力を失っている両者。

その事実を突きつけられれば、オールマイトも否定はできない。

「そうだな。だが……今の私は、貴様よりも強い！」

同時に事実を突きつけ返す。

オールマイトにかつて敗北したことで、また骸無という個性を与え

ても廃人にならない器を得たことで、多くの個性を失っているAFO。

一方、後継者候補が拐かされたことで、ワン・フォー・オールをまだ保持したままのオールマイト。

皮肉にも自身の後継者を得たかどうかの差が、自分たちの能力の差となって表れてしまっていたのだ。

「今日、今ここで、決着をつけるぞ！ オール・フォー・ワン!!」

再度、ぶつかり合う二人。

一般人どころか並のヒーローですら介入できない戦いを繰り広げる。

ただでさえ破壊されていた廃工場跡が、加速度的に更地へと変えられていく。

その戦いの推移は、オールマイトが口にした通り、次第に彼が押し始めていた。

“DETROIT SMASH!”

振りぬいた右拳が顔を捉え、相手をきりもみさせて吹き飛ばす。

明らか大ダメージだ。

あとわずかでオールマイトの勝利。

『そう、勝利を確信した時が君の最期だ。オールマイト』

その瞬間にAFOは罨を仕掛けている。

たとえどんな強者であっても、勝利の瞬間には気が緩むものだ。

その慢心を打つべく、AFOはあえて見せずに温存していた個性があった。

『反応速度上昇』『毒針』

決して派手ではないが、当たればオールマイトといえど一撃で倒すことができる組み合わせの個性だ。

こちらよりも弱っていないとはいえず、活動限界があるオールマイトが決着のチャンスをみすみす逃すことなどできはしない。

勝利を焦るその心を刺す一撃を隠し持っていた。

「オオオオオ！」



雄たけびを上げ突っ込んでくるオールマイルト。

『反応速度上昇』の個性を使ったAFOには止まって見えた。

そして、指から伸びる『毒針』でカウンターを取れば勝利が見えてくる。

「ガッ!？」

はずだった。

再び突き刺さる正義の鉄拳。

今度こそ、巨悪を沈めるに十分な一撃だった。

相手の動きは見えていた。

相手を確殺できる武器を用意できていた。

しかし、身体が追いつかなかった。

AFOの敗北の原因は言葉にすれば拍子抜けするほど単純にすぎた。

オールマイルトだけと戦っていたならば、この結果は覆ったかもしれない。

しかし、AFOはその直前に他のヒーローたちとも戦って、傷を負っていたのだ。

ヒーローは守るべきものが多い。同時に、支えてくれる仲間も多いのだから。

「う、ああ、うおおおお!!」

ついに仕留めた宿敵を見下ろし、勝利の雄たけびを上げるオールマイルト。

彼らしからぬ姿ではあるが、歴代の継承者たちの念願が叶った瞬間なのだ。そうもなるだろう。

CLAP CLAP CLAP

乾いた音があたりに響く。

歓喜の瞬間から、冷水を掛けられたかのように冷静さを取り戻すオールマイルト。

とても、嫌な予感がする。

「おめでとう。オールマイルト」

「緑谷……少年？」

手を打ちながら笑みを浮かべて歩いてくる緑谷出久、いや、骸無。  
仮面を外しこちらに笑いかける彼の顔を見て、オールマイトはなぜ  
か怖気が走った。

ああ、本当に、嫌な予感がする。